
I S - 小さな幸せを求める青年

ホワイト・グリント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I S・小さな幸せを求める青年

【Zコード】

Z9738Q

【作者名】

ホワイト・グリント

【あらすじ】

女性にしか動かすことが出来ない世界最強兵器『インフィニット・ストラトス』通称 I S が出現して男女のパワー・バランスは一変した。女尊男卑、それが新たに構築された今の社会の形である。

『世界で唯一 I S を使える男』織斑一夏はその特異性から I S 学園に強制入学させられることになった。周りの女性達から興味的である彼はそんな環境の中、さまざまな出会いがある前途多難な日常を送っていた。

・・・・一夏とその姉、織斑千冬には実は『義弟』がいた。知らぬ所で誰よりも悲しみをその身に体験し、優しかった義弟は数年前に死んだとニュースで報道された。そしてその義弟の正体は”転生者”だった。

しかもその義弟は今も生きて、同時に戦つてもいた。

義弟は前世から求めた小さな幸せを掴む為、傷だらけのその身と神に貰つた力を駆る。

プロローグ（前書き）

なんか小説に続いてアニメ版の「IS」を見たら非常に書きたくなりました。

他にも作品を投稿しているのですが、頑張らせていただきます。
では、どうぞ。

プロローグ

Side ???

世界、というか地球上のほとんどの場所は基本平和な場所である。

しかし、その中には当然対極の場所、争いが存在する場所もあるものだ。抽象的に一番しつくり来るのは中東だろつか？もちろん他にも戦場は存在する。

そしてオレは、その他の戦場のど真ん中で着実に迫る死を待っていた。

オレの名前はラーゼ・ベルセルク。名前を見ればわかると思いつが日本人ではない。

オレは自身の出身国や生みの親のことをまったく知らない。どういった経緯かわからないが物心がついた頃には、オレは銃を持ってアフガンなどの紛争地帯を走り回っていた。いわゆる少年兵といつやつだろう。

物心ついた頃からのせいなのかわからないが、自身の境遇を呪つたことは無かつた。最も、少年兵という存在は普通なら境遇を呪う前に死ぬのがほとんどだ。実際オレもそうなるはずだった。

昔仲間（オレと同じ少年兵）が戦場でシェルショックを起こし、

その混乱に巻き込まれる形でオレは敵の銃弾を体に受け、他の仲間は全員死んだ。そこでオレも殺されるはずだったのだが、何故か軍に訪れていた一人の社長がオレを助け、ベルセルク家の養子にしたおかげでオレは生き残った。

ちなみにラーゼという名はこの時に与えられたもので、その前の呼ばれ方は「 」といった感じの番号だった。

ベルセルク家は世界に対してかなりの影響を持つている会社で、養子になつたオレは一通りのエリート教養を叩き込まれ、それを次々と吸収していった。戦場で銃を撃ちまくる日常を送つてきただオレにとつてはエリート教養を学ぶ日々はただ楽しかった。

両親は、跡継ぎがない現状をどうにかしたい、それがダメでもせめて優秀な護衛が欲しい、という目的でオレを引き取つたらしいのだが、どうやらオレは後者に適している人材だつたらしい。

次の日からオレを見る両親の目は一生物の道具を見守つているような目に変わつていた。別に苦痛はない、そんな目は戦場で命令してくれる大人たちに嫌というほど向けられていた。

そこからさらに数年が経ち、オレが18歳になつた年、オレと両親は商談を終えて飛行機で帰ろうとしていた。

しかし、そんな時に街の各所でテロが発生、街の中は数時間でテロによる虐殺シヨーが繰り広げられる地獄へと変化を遂げた。

その地獄には当然、両親とオレも巻き込まれた。そして両親に襲い掛かる脅威を全て排除するのが、オレがラーゼ・ベルセルクでいる理由だ。

「父上、車が確保できました。警察も混乱しているようすで、最寄の軍関係者に連絡をして保護を要請しました」

「そうか……だがラーゼ、この騒ぎを起こしたテロリスト共に襲撃される可能性があるのでないか?」

親子ではなく、まるで部下と上司のうおうな会話の会話。オレの前で椅子に座っている男はオレの養父。少し離れた所では養母が電話越しに相手を怒鳴っている。大方、会社の人間がすぐに助けに来られないからだろ?。

「先程、空港内に進入しました三人組みを拘束し、口を割らせました。テロリストもどうやら組織を組んでいるようですので、私が奴らの警戒網を惹きつけてまいります。父上は母上と共にどうぞ他国へ脱出を……」

オレの発言に父上は面白そうに口元を歪めて顔を上げた。

「ほつ・・・・・自ら進んで囮になるといつか?・・・・・はつきり言つて私と妻はお前に對しては道具以上の価値を着けておらんぞ?・・・・・お前の帰還など待たず私は他国に飛ぶ、それを知つてもか?」

「全て存じております。その上で父上に提案しております。私は父上のおかげで生き延びた身、故にこの命は父上の命を守るために使おうと決めております」

我ながら見事な演技だと思う。どうせオレが何もしなければこの男はオレに捨て駒になつてこいと躊躇いもなく命令するはずだ。

オレの言葉を聞いた父上は無言で立ち上がり、母上を連れて車に乗つた。

「ラーゼ、今までご苦労だつたな。精々テロリスト共を一人でも殺して私達を助けてくれ」

「ラーゼ、感謝しますよ。道具はその役割を果たしてこそ道具です。あなたは私達に尽くしてくれた最高の道具でした」

「このようなセリフを悪意なしで口に出来るのだからこの夫婦は大したものだ。周囲のS.P.でさえ二人の言葉を人間のものとは思えない」

段々遠ざかる車。そのまま最寄の軍事施設を目指していくのだろうが、オレには最早どうでも良かつた。

「…………さて、行くか」

無表情で空港を出て、銃声が最も大きく聞こえる方向に歩き出す。オレの格好は黒いスーツ姿なので別に着替える必要は無い。歩きながら両手に指出し手袋を通して、手持ちの武器を確認する。

(腰のホルスターにM1911一挺とマガジンが一本。後は接近戦用のナイフが一本と投擲用のナイフが4本か・・・・どうせこれが最後だ。精々道連れを増やしていくとしよう)

最後なのでぶっちゃけるが、もう疲れた。肉体的な疲労もあるかもしないが主に精神面の疲労だろう。

最初は少年兵として戦場を駆け回り銃弾を撃つて撃たれる日々、毎日少なからず死んでいく同じ境遇の仲間。

次は社長の養子といつ名田でここでも道具扱い。少年兵の時よりは少なかつたが、暗殺や護衛という形でここでも人殺しを重ねた。

そして最後が養父母から直々の”死んでいい”という命令。見詰め返してみると人を殺した日々には大した空白がない気がする。

でも、これで最後だ。生き延びるつもりは毛頭ないが、生き延びても「寧にあの夫婦がたくさん雇つているであろう殺し屋に追われる続けるだけだ。

せめて最後は得意な人殺しで幕を閉じるとしよう。幸い殺す相手はたくさんいるのだから。

市街の通り道には簡易なバリケードが作られ、そこでは軍とテロリストの銃撃戦が繰り広げられていた。軍服を着ている軍とは違つて私服姿でマシンガンを撃ちまくつているテロリストの顔には笑顔があつた。

オレは戦場の様子を真上、建物の屋上から見下ろしていた。最初ここに来た時はテロリスト側の狙撃手がいたのだが、邪魔なので一瞬で首を斬り落として黙らせた。

消化に使われるホースの片方を丈夫なパイプに、もう片方を腹部に巻ぐ。右手にはM1911を持っている。

オレは屋上から躊躇いなく飛び降りる。体中を空気抵抗が襲い掛かるが、氣にもせずに建物の壁を駆け下りる。

そして地面が近付いたところで空いている左手を腹部から屋上に伸びるホースに伸ばす。左手への負荷を気にせず全力で引っ張り、落下のスピードを殺す。そしてオレが降り立つたのはバリケード作つて銃撃戦を繰り広げていたテロリスト達の真後ろ。

「ん？・・・・・なつ」

男の一人がオレの存在に気付くが、声を上げる前にオレの右手に握られた銃から吐き出された45ACP弾に頭部を吹き飛ばされる。別にこの弾なら頭に当てずとも殺傷能力は充分だが一撃必殺が身に付いてしまったのか頭部を狙つてしまつ。

絶命した男が倒れる前に右手の銃を乱射しながら左手でナイフを抜き、集団の中に突っ込んでいく。一箇所に密集しているので特に照準は必要ない。

突然後方から襲い掛かる痛みと仲間の悲鳴にテロリスト達は状況の理解が追いつかない。しかしそうしている間にオレは撃ち尽くしたマガジンを吐き捨てて集団の中でナイフを振るつ。

オレの振るつているナイフは刃が縦に30cmはあるので接近戦では高い切れ味が發揮される。すでにテロリストを5人ほど殺していく。テロリストの数人が状況を理解してオレに銃を撃つてくるが、周りに味方がいるので撃つの躊躇いがある。

「何度も言つがこれで最後だ。・・・・・頑張つてくれよ?」ちとら自主的に殺すのは初めてなんだ」

最初の発砲からおよそ10分。その間30人ほど固まっていたテロリストは10人前後まで減っている。だがオレも決して無傷ではない。背中に一発ほど狙撃を受け、額から流れた血によって左目が塞がれている。

武器の方もそろそろ危ない。銃は一挺と弾は3発……は今撃ち尽くした。投擲用ナイフは狙撃手を仕留めるのに全部使ってしまった無い。残りはもう接近戦用のナイフだけだ。

銃を乱射してくる男に正面から突っ込んでそれ違い様に右手のナイフを振るつて胸部を切り裂く。通り過ぎてすぐにブレーク、ナイフを逆手持ちに切り替えて男の背中に突き刺す。

再び走り出し、今度は銃を持った一人目の手の甲を切り裂く。二人目は痛みで手に持っていたM9を落とす。それを左手でキャッチして一人目の腹部、腸の場所に鋭い刺突、同時にM9のグリップで二人目の顎を碎く。

少し形は違うが、実はこの動きは偶然見て興味を持った日本のアニメを参考にしたものだ。最初のは”空の境界”的の両義式の技。次のは”ガンスリンガーガール”的のピノツキオの技だ。

ドンッ！！

右脇腹をライフル弾で貫かれた。痛みを感じる前に発砲者に向けてM9を連射、発砲者が絶命する。

「…………はっ、いいねえ、けど、まだあああ

「…」

テロリストの方が逆に恐怖するほど今のオレは狂つて見えるだろう。ただ殺す。それだけしか頭の中にはない。そうだ、まだまだ殺せるはずだ！

そんな長いことがあって冒頭に辿り着く。周りにはたくさんの人間の死体が転がり、降り注ぐ雨が死体から血を拭き取っていく。

あれから記憶があやふやだ。なんだか記憶の中では軍人も殺しているがあるのだが、テロリストの死体がたくさん転がっていることから欲求不満でマジでやつちまつたかもしれない。

どちらにしても、もう終わりだろう。体中から流れる血は現在進行形で水溜りを作っているし、痛みが無い体は指一本動かない。

「終わりか・・・・・ああ、よく思い出すとオレの人生って人間としちゃ最低も良い所だよなあ。好きな風にやり直しどとか出来ねえかなあ～・・・・・あ、やべ・・・・・眠い・・・」

呑気に喋っていたのだが体が先に限界を迎えた。襲い掛かる強力な睡魔。瞼がゆっくりと細くなり、オレの意識は無くなつた。

しかし、次の瞬間に再び意識が覚醒、目の前の景色が真っ黒から真っ白に染まる。

『ふう〜ん。ならさ、叶えてあげようか？その願い』

オレの背後から聞こえたその声は、若くて明るい女の声だった。

プロローグ2（前書き）

原作にはまだ届かないプロローグです。

では、どうぞ。

プロローグ2

Side ラーゼ

「暇つぶしに下界を覗いてみれば、とんだめつけ物ねえ）。・・・・・試しに過去も覗いてみればこれまた不幸なもの。・・・・・んで、興味をそそられてキミを呼んだってわけ」

ラーゼ・ベルセルクだ。

オレはあの時、養父妻を守る囮となつてテロリストを皆殺しにし（不確定だが軍人も殺してしまつたかもしない）雨の中、体が限界を迎えて死んだはずだった。

だが眠ろうと瞼を閉じた次の瞬間に見たのは何処までも真っ白の空間。そこには今話しているオレより頭一つほど小さい一人の女性。腰まで届く長い金髪、エメラルドのような深緑の瞳、スタイルは抜群で容姿は恐らくかなりの美人に部類するだろう。

そんな女性がワンピースのような服を着て、今オレの前で陽気な笑顔で話している。なんだか人の不幸を躊躇いもなく爆笑できそうな笑みによく似ている。

しかもこの女性の名前、なんと”ヘラ”だつて。信じられるか？笑顔で人の不幸に興味をそそられたこれが結婚の女神なんだぜ？人の空想がどれだけ再現できない美しさを求めてるのかよくわかつたよ。

とりあえずヘラが言つたことを整理しよう。

「あー・・・確認するぞ？あなたは溜まっている仕事を部下に押し付けて暇つぶしに下界を覗いた。そんでオレから偶然・・・なんだつけ？強いタナトス（死神）の気配？・・・それが感じられたんでオレの人生をよく見ていたら面白く感じたと？」

「そうだよ、理解が早いねえ）。キミの人生は見ていて飽きなかつたよホントに・・・捕虜にされた基地から脱出するついでにその基地を一人で壊滅させたり、両親が国の重鎮に恩を売りたいから政府要人を誘拐したテロリストを殺したり・・・中でもパーティーを狙った銃所持の襲撃犯50人を一人で全滅させた時なんてぶつちぎりで面白さアリよ！・・ねえ、これDVDにしてみない！？」

どうやらオレの人生を見てきたというのは本当らしい。実際今口にしていた事件全てをオレは体験している。

懐かしいな～・・・一番目の時なんて完全にガンスリンガーガーラルのピノッキオの真似をして殺し方もまったく同じにしたつけ？・・まあ、その後に残つた数人が手榴弾で特攻してきたのは流石にびっくりしたけどな。

「しない！？・・・と言われても誰が買って誰が見るんだよ。・・・オレの記憶が正しけりやどの事件にも実写にしたら思いつきR18指定のグロシーンが盛り沢山だつたぞ」

「大丈夫！。あの位、天界に住んでるみんなは私みたいに笑顔で見れるから！」

「ゴンッ！！！」

握り拳を作った笑顔で断言してくれるが、その言葉はオレの不幸を

笑顔で見ていた確かに証拠になつていなか?・とりあえずこいつの頭に拳骨を叩き込んだオレに罪はないはずだ。

「それで?・・・興味をそそられたとはい、まさかDVDの製作許可を貰う為だけにオレを呼んだわけではないだろ?・用件はなんだ?・地獄行き決定の判決が下された、とかなら自覚あるから別にいられねえぞ」

拳骨の痛みで涙目になつたヘラはオレを上目遣いで見上げてくる。

「痛てて・・・うう、最初に言つたじやん。『願いを叶えてあげよつか?』って」

「願い?・・・もしかして、好きにやり直せたらって、あれか?・・・口にしておいてなんだが、出来るのか?つかやっていいのか?」

「ふふふ、女神を・・・いや私を侮つてもらつては困るなあ。そん位簡単なのだよ。ていうか、キミの人生を見させて貰つた者としては、個人的にキミはもつと幸せになつて欲しいんだよね。タナトス死神の気配が強かつたのもキミの人生の一部だけど。幾らなんでもキミは不幸すぎた。だから、キミには素晴らしい来世を生きて欲しいんだ。・・・」

前半は今までどおりの口調だが、後半になるに連れて口調が真面目なものへと変わっていく。

幸せな人生、か。今まで生きてきた中でまったく求めなかつたと言えば嘘になる。曇りのない笑みで楽しそうに過ごしている親子に何度も憧れた。血に染まり切つた自分を見て”何故自分が”と思ったこともあった。

諦めていた幸せ。それをこの女神は『与えてくれるのか？』

「……………ハア、人の人生を”DVDにじょう”なんていつた奴の言葉かそれ。けど……ありがとう。んじや女神様、オレに幸せを掴むチャンスをくれないか？」

「お任せなさい！……………んじやせつからくだからアニメとかの一次元の世界なんて行つてみない？」

シリアス気味だった雰囲気をぶつとばしてこの女神はいきなり壮大なことを言い出した。

「アニメの世界？すまん。そういうのはまったくではないが、あまり見たことないんだ」

アニメを見たことが無いわけではないが、どの世界も死亡フラグが濃いものばかりであまり行きたくない。

「ああ、それもそうだね……………んじやそ、なんかやりたかった事とか無い？あるならそれを参考にして私が選ぶよ？」

やりたかった事？んなこと言われてもそんなものパツと出でくるものではない。……………あ、そうだ。

「空……………」

「ん？何？」

「少年兵の時、戦闘機とかじゃなくて、生身で空を自由に飛びたい

つて思つたことなるあるな」「

殺し合ひばかりの地上に嫌気が差して、青空を見上げたときに本気で願つたことがあつた。空なら自由になれると思ったのだらうか?

「空を飛ぶ、かあー。空・・・・空・・・・あーそつだあの世界なら色んな意味で幸せだよねーちょっと待つてー!」

オレの言葉を聞いて女神は少しの間ぶつぶつと何かを呟き始め、良い所が思いついたのか姿を消した。そして、3秒ほどでまた戻ってきた。

「はいこれ

女神が差し出してきたのは一枚のA4用紙。見てみると7つの空欄があり、その上には『好きなチートを書いてみようーキ!!』の願いが今実現する!』と殴り書きで書かれている。なんだかうまい非常にむかついてくるタイトルは。

「そこ」に好きな願いを7つ書いて、それが来世でのあなたの力になるから。なんでも良いや?『テスノートでも超能力でも』

「おーおい、んな物必要とする時点でどんな所に送るつもりだ・・・・・・」

「あくまで例えだよ。戦争中とか化け物がうろついてるとか、そういう所じゃないから安心して。ほらほら、書いた書いた。あ、言い忘れてたけどロボットとかの名前は何でも良いから必ず入れてね」

「・・・・・んじゅー、欲を出しても・・・・・」

一つ目『肉体をリンクスに改造。AMS適正数値をゼロの倍以上に』

一つ目『レオハルト、及びジョンラルドのアーマード・コア・ネクスト、ノブリス・オブリージュを搭乗機に』

二つ目『上記と同じ内容で、ベルリオーズ搭乗機シユープリス』

四つ目『上記と同じ内容で、アナトリニアの傭兵搭乗機ホワイトグリン』

五つ目『アーマード・コア・for answerまでに登場するパンツの全て』

六つ目『搭乗機全てをFB SMSメモリ改造全項目フル改造状態に』

七つ目『搭乗機全てをFB SMSメモリ改造全項目フル改造状態に』
こんな感じにしてみた。オレが唯一やり戻したゲームであるアーマード・コアの影が濃いのは仕方の無いことだ。

「ほつほつ、なかなかですなあ。でもなんか物足りないよねえ、機体は全部小さめになるし。しかも最後のは事実上必要ない。．．．・よおし！サービスとして1、6、7番目の願いは私が変わりに叶えてあげる。あと願いが3つ残るよ」

と言われても。他に思いつくものは精々、格闘戦闘に特化した機体として、アンジェの搭乗機オルレアを追加するぐらいだ。残りの二つは保留にするか？

「保留？・・・なら、私が一個だけ機体選んでもいい？お勧めつていうか、個人的にあなたに乗つて欲しいものがあるんだけど」

「・・・構わんが、最終決定はオレにさせてくれ」

女神が薦めてきたのは”機動戦士ガンダムOO”の劇場版に登場するガンダムサーバニヤ。詳しい機体構造は知らないがわざわざ薦められたのだ、ぜひ使うことにしよう。

「うむうむ、機体はこれで充分ね。あとは肉体か・・・最優秀のリンクスつてだけじゃ物足りないし、純粹種イノベイタの力と、アナトリアの傭兵の戦闘経験、知識は・・・博士号が取れる位でいいか・・・」

「おい、知らない単語の筈なのに阻止すべきだとオレの本能が叫んでいるんだが・・・」

「大丈夫、大丈夫。持つてて損になるものは入れてないから。・・・よし完了。じゃ、準備はいいかな？」

どうやら今からすぐに送られるらしい。オレは無言で頷く。確認した女神はオレの足元に何らかの陣を展開した。陣が発光を始める。

「注意事項を言っておくね。まず、キミは最初から改造された肉体で新たな人生を始める。でも、キミの願つた機体は来るべき時期とか、キミ自身の強さとか、そう言つた条件を満たさないと使うことは出来ないからね」

「は？・・・それまでは自分の肉体だけで生き抜けつてことか？」

「そんな大きなスケールの話じゃないよ。そのことは多分行けばわ

かるから。・・・それじゃ、楽しい人生送つてねえ～・・・ん
つ・・」

「・・・・・・・・・おい、これはなんの真似だ。つか頬を赤めるな、
胡散臭さがにじみ出てるぞ」

陣の発光が強まり、体が半分ほど消滅した所で、なんと女神がキス
してきやがつた。しかも唇に。

「えへへ・・・・・キミってファーストまだでしょ？私もなんだ・・・
・女神の口付けは幸福をもたらす物なんだよ？せつかくだから貰つ
て行つて」

「納得いかんが・・・・・わかった。んじゃな、色々ありがとうございました」
ラ”・・・”

「・・・・・・・・・どういたしまして」

一瞬驚いてすぐに笑顔を浮かべたヘラを見て、オレは周りを包む力
の流れに身を委ねてそのまま意識を手放した。

Side Out

「・・・・・行つたかあ～」

光に包まれて消えたラーゼを見送つてヘラはその場にしばらく呆然
としていた。

「うう～む。本気で幸せになつて欲しいとは思つたけど、流石にキ
スはやり過ぎたかな？」

普段見せている陽気な笑顔だが、よく見ると頬が少し赤い。実はこの結婚の女神、かなり初心だった。

「あー？・・・DVDの製作許可貰うの忘れてた。おーん・・・ま、いつか、勝手に作つて他のみんなに配っちゃおっと・・・さあ、忙しくなるぞお～」

そして、拳骨を喰らつた位ではまったく懲りていないのでした。

ふと、ヘラの服のポケットから一枚の紙が落ちた。そこには文が短く記載されている。

『ラーゼ・ベルセルク。女神ヘラの決定により記憶を引き継いだ状態による転生を決定。向かう世界の名は』

その世界の名は・・・。

『・・・・・インフィニッシュ・ストラタス』

プロローグ2（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

プロローグは終わりましたが、原作にまったく近づけねえ。

ついでなのですが、主人公ラーゼはISの原作知識がありません。

次回はようやくISの世界です。でも、原作キャラが出るのはまだ先になるかもしれません。長い目で見守ってください。

では、また次回。

主人公設定（前書き）

主人公の設定です。主人公だけでもかなりのチートになっています。
では、どうぞ。

キャライメージを自分で思い直し、イメージを書き直しました。

主人公設定

ラーゼ・ベルセルク

本作のオリジナル主人公。

・年齢 21歳 転生後は肉体年齢が5歳に低下。

・性別 男

・身長 190cm 転生後不明。

・体重 65kg 転生後不明。

・容姿（転生後） 背中まで届く銀髪、深い真紅の瞳、イメージはコードギアのロスカラに登場する“ライ”を銀髪赤目にして目を少し鋭くした感じ。

・声のイメージ：森久保祥太郎さん。

・趣味や好きなもの 子供の笑顔、絵描き、ピアノ、読書、雨。

・嫌いなもの 戦争と戦場、理由が無い一方的な虐殺、他人を見下す人間。

・性格

物静かな口調で少し暗く見えるが、優しく面倒見もいい。しかし

本気でキレた時は殺人を起こしてもおかしくないほど敵意があらわになる。幼い頃から戦場に身を置いてきたので人を殺すのには躊躇いがない。ただし、無関係の人人が死ぬのは我慢ならない。

- ・ 詳細

過去について情報がまったく無く、物心着いた時には中東で名無しの少年兵として戦っていた。他にも少年兵の仲間がいたが、仲間の一人がシェルショックを起こした時に敵に包囲され皆殺しにされた。事実上少年兵部隊の唯一人の生き残り。

戦場で殺されそうな所をベルセルク社の社長とその妻に助けられ、ラーゼという名前を与えられた。それ以後はベルセルク家の養子となつたが、夫妻がラーゼを引き取ったのは道具として使う為である。ラーゼ自身はそのことを自覚しており、夫妻の命令で数多くのテロリストを殺してきた。

やがて精神が磨耗して、最後は夫妻を守るために”捨て駒になつてこい”という命令を引き受け、数十人のテロリストと多数の軍人を巻き添えにして死んだ。その後、女神ヘラに第一の人生を与られ、I.Sの世界へと転生する。

搭乗機

- ・ アーマードコア・ネクスト4機

『ノブリス・オブリージュ (for answer版)』『シュー
プリス』『ホワイトグリント』『オルレア』

- ・ ガンダムサバニヤ。

・for answerまで登場した全てのパーティ。中にはV.O.B

ヴァンガード・オーバード・ブースト

などもある。

上記の機体は全てヘラの手によつてサイズが縮小され、" I.Sに見えるが中身がまったく違つ兵器"へと変貌を遂げている。一般的の見解では全身^{フルスキン}装甲のI.Sに見えるかもしけないが、正体はネクストやモビルスーツをそのままI.Sのようなパワードスーツにしたものなのだ。

搭乗機設定

- ・ラーゼの実力や条件などの規制によつて最初に使える機体はノブリストとオルレアだけ。

・ネクストは本来の機能をフルに使えばあつという間にコジマ汚染を撒き散らす。しかし、ヘラの魔改造よつてラーゼのネクストから排出されるコジマ粒子は全て無害な新種のニュー・トリノに変換されるようになった。ただし兵器の物理的な破壊力に大きな変化はない。

これによつてプライマルアーマー、オーバーブースト、コジマキヤノン、アサルトアーマーなどを使用しても地表や環境、周辺の人間や敵をコジマ粒子で汚染することはない。

・サバーニヤは縮小化した以外は本来のものと変更点は特にない。サポート役の二体のハロは黄色のハロが音声込みでA.Iとなつてサポートしてくれる。

パイロット設定

・肉体がリンクスへと改造されているので、身体能力全般が人知を超えている。しかしラーゼ本人は、簡単にフライパンを丸められようになつたことに感動するなどまたたくの負担を感じていない。

AMS適正は、リンクスの中で最高の数値を出していたセロの倍以上なのでリンクスの才能はまさに”天才”である。

・純粹種（ノベイタ）の力のおかげで強力な脳量子波と驚異的な空間認識能力等を手にし、寿命は理論上常人の倍近くなつた。実は、これはラーゼの寿命が怪我などで縮んだ場合に對しての保険でヘラが追加したのだ。

・リンクス戦争の開始から最後まで戦い抜き、それから數十年の間も戦つたアナトリアの傭兵の戦闘経験を貰つたのでネクストの操縦でミスをすることはまず無い。

主人公設定（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

早速無茶苦茶なオリジナル設定の登場です。

フルで戦つてゴジマ汚染がないネクストつて、自分でも反則な兵器
だと思います。

では、また次回。

第1話 崩れ去つた幸せと新たな出会い（前書き）

よつやく少しだけ原作キャラを出せた。

今回もオリジナル設定があります。

あと随分遅れた気がしますが、感想などありましたらよろしくお願
いします。

では、どうぞ。

第1話 崩れ去つた幸せと新たな出会い

Side ライゼ

一ねえ！テーセお兄ちゃん、遊ぼう！」

「…の隣で呼んで」(「お隣さん」)

「...」「...」「...」「...」

「わかつた、わかつた。・・・わかつたから4人で一斉に服を引っ張るな。別に逃げないつての」

ラーゼ・ベルセルクだ。

オレは女神ヘラから力を貰い、前世の記憶を持つたままヘラの選んだ世界に転生した。

しかし、目が覚めたオレはなんとサバンナ風の荒野に一人倒れていった。しかも何故か紛争孤児みたいな格好で。どうやらヘラの用意した転生とは、最初からではなく途中からやり直すことのようだ。

しかもちゃんと願いは叶えてくれたようだ。目が覚めてから体に何かの違和感を感じる。恐らくAMSとネクストの操縦に耐えるために強化された肉体だからだろう。確かめるために落ちていた石を握ってみたら簡単に粉碎できた。

あと首の後ろの丁度真ん中あたりに接続プラグが人工皮膚で隠されていたが、あれがAMSプラグなのだろう。

あと、小さな湖の水面を見た時に気付いたのだが、顔の形なども別物になっていた。誰だよこの銀髪赤目少年。イビルな笑み浮かべたりとか本気で睨んだりすればかなり怖い顔になると思つぞ。

その後、状況を確認したオレはとりあえず人里を探し、この街を見つけた。

そして住人の格好を見て一瞬で確信した。ここは、前世のオレの始まりの場所でもある中東だつた。

ここはオレの中東とは随分違つていた。それはもう天と地くらい対極に。何故か？オレの知つてゐる中東は今のオレみたいな子供に救いの手を差し延べたりしないからだよ。しかもここでは紛争などはほとんど起こつていないうらしい。

いや本当に良い人達だよ。オレの格好を見た途端に手厚く保護してくれて戸籍も用意してくれたし、知らないことも教えてくれて、生活が安定するまで色んなことでかなりお世話になつた。

それと、気付いている人もいるだろうがオレの名前は前世と変わらず『ラーゼ・ベルセルク』にした。どうせ前世のオレを知つてゐる人間がいるはずは無い。それにオレ自身この名前は氣に入つてゐる。

そんなことがあつて今のオレはもうこの街で暮らしていく。ちなみに世間上でオレは7歳の子供だ。

冒頭に戻るが、精神年齢が成人を超えていたオレは子供達に大好評。どうやら身体能力を確認するときにやつた空中バック転3回連続が受けたらしい。・・・・自分で望んでおいてなんだけど、幾らなんでも無茶苦茶すぎないか？この体。

暇があればたくさんのお供達の面倒を見るのが当たり前になってしまった。なんというか、すごく幸せな感じがする。

当たり前の日常を体験するだけでも前世のオレに不可能なことだった。その不可能なことが今では日常の一部になつていて、ヘラには感謝しても感謝しきれない。

だが、2年続いたオレの幸せは、突然訪れた一つの不幸に砕かれた。

月明かりが差し込む部屋の中、もう見慣れた天井を瞳に映してオレは目覚めた。

おかしい。いつも目覚める時間より遙かに早い。それに何だか外から悲鳴や怒鳴り声なども聞こえてきてかなり騒がしい。明らかに只事ではなさそうだ。

ドンドンドン！――

「ラーゼー！ラーゼ起きてるか！・・・・ラーゼー！」

「ラーゼー君！起きてラーゼ君！――」

正面玄関の扉が大きな力で叩かれ、お隣に住んでいる家族の夫妻が必死に叫んでいる。一瞬でベッドから跳ね起きてすばやく扉を開ける。扉を開けるとお隣の夫妻、ラードさんとルイーネさんが必死の形相をしていた。その後ろでは街中の人々が走り回っている。

「どうしたんですか？・・・只事じゃなさそうですけど」

「数十分前に、突然政府の人間がやつて來たんだよ。何事かと思つたんだが・・・・」

「落ち着いて聞いてね。今、世界各所のミサイル基地がハッキングを受けて2000発以上のミサイルが発射されたらしいの」

「は？」

それは何の冗談だ？ミサイル基地のハッキングと同時に2000発以上のミサイルが発射された？犯罪やテロを通り越して、もはや災厄のレベルじゃないか。

その犯人だつて同じだ。楽しさにイカれたハッカーというのは決して居ないわけではないがこの犯人の思考は人間の枠に収まるのだろうか？

「幸いほとんどどのミサイルは二ホンという国に発射されてたらしいが、数十発のミサイルが他とは違う軌道でこの街の近くに落ちてくるらしい」

日本？なぜ2000発以上ものミサイルを日本に落とすんだ？領土的に小さく海に囲まれたあの国でなくとも候補は幾らもあるはず

だ。

領土が小さだから狙いやすい？ 小さく海に囲まれている？ つまり逆を取れば守りやすい。 ······ もしかして犯人の狙いはミサイルを着弾させることがじゃないなくて ······。

「つてこんなゆうへり話してる場合じゃないー」ラーゼ、急いで着替える！ 街から少し離れた所に軍が車を止めてる。俺達も子供達を連れて後から行くから！」

「あ、はい。でもまた後でー！」

弾かれたように家の中に戻り、すばやく寝巻きを脱いで普段着に着替える。少しでも必要な荷物を纏めるべきかもしれないが、生憎と家以外に私物はあまり無いので纏めておいた金と体だけで充分だ。

街を出てしまへり走つたところ、難民救出などで使う車が何台か止めてあった。人波の中にはじっかりラードさんとルイーネさんもいる。軍人の声に耳を済ませてみると、どうやら脱出はギリギリで間に合ひついで。安心してオレも車に乗り込むところ。

しかし·····。

「·····あれ？ ルイーネ、ベルドとマコヒスはどうした？」

「え？ やつ今まで一人で何かを話してたけど·····え？ ベルド！ マコヒス！ 何処にいるの！？」

ベルドとマコヒスとこいつのはラードさんとルイーネさんの子供だ。

ベルドが長男でマリエスが次妹だ。よく考えてみればお隣の関係でオレにかなり懐いてきたあの二人がオレを見つけて話し掛けっこないはずはない。つまり、一人は車に乗っていない。

そして最悪なことに乗っていた車が動き出した。タイムコマットが近いのだろう。軍人の顔に隠しきれない焦りが見える。

「うそ……うそでしょ……ベルド!! マリエス!! ……いやああ……」

「ルイーネー落ち着けルイーネー……」

「離して! 離してラード……お願い行かせてぇ……」

車から飛び降りようとしたルイーネさんをラードさんが必死に止める。余裕がないルイーネさんはラードさんが涙を流しているのにも気付いてないだろう。

街から離れた距離はおよそ5キロ。大人数を乗せたこの車では、飛ばして一人を拾ってもミニサイルの被害から逃げ切れない。無茶苦茶な体を持つているオレでさえこの事態を覆すことは出来ないだろう。だが、それでも……。

(はいそうですか、って言つて見捨てられるかよ……)

「すみません……」

「ラーゼ君? ……くつ……」

ルイーネさんの腹部を殴つて氣絶わせる。そのまま自然とラードさ

んと田が合つ。

「・・・・先に行つてください。あの二人は必ず助けてますから」

「え?・・・・おい!ラーゼー!」

ラードさんの叫びを無視して軍人から救急セットを強奪。車から飛び降りる。かなり速度を出していたので着地と同時に地面を盛大に転がる。しかし全身に強化手術を施されているリンクスの体にこの程度は大した怪我にはならない。

即座に起き上がり原動機付自動車を凌駕するかのようなスピードで走りだす。具体的なスピードで表すなら時速5~70キロは出しているかもしね。もう少し早く走れそุดが逃げるときの為にまだ体力を残しておきたい。

突然耳に大きな風きり音が聞こえてきた。走る速度を落とさずに夜空を見上げてみると、子供が見たら流れ星と勘違いしそうな光が10本ほど見えた。間違いなくミサイルだろう。まずいな、先に街へ着くことは出来そうだが逃げられるとは思えん。

「ベルドー・マコエス!・・・・何処にいる!?返事をしてくれ!...」

ゴーストタウンになつた街の中でオレは叫ぶ。街は無音状態のため遠くまで声が響く。

ガタンッ！！

ふと家の中から何かが倒れるような音を聞き、ドアを蹴りでぶち破つて中に入る。そこにいたのは、黒髪赤めの男の子と黒髪黒目の女の子。

「ベルド、マリエス……よかつた、無事だつたか。まったく何でまだこんな所にいるんだ？」

「「「」めんせ」「…………」「れ」」

二人が両手で差し出してきたの蒼と金の水晶玉。これは確か、この二人が今年6歳の誕生日を迎えた時にラードさんがプレゼントしたものだ。青がベルド、金がマリエスだったつけ？これを取りに来たつてわけか。

「はあ・・・・まあいいや。行こう、ラードさんとルイーネさんが心配してゐるぞ」

「「「うん……」「」」

揃つて笑顔を浮かべた双子を抱きかかえ、オレはすぐに家を出ようとした。オレの記憶が確かに街の広場の近くに補助席付きのバイクが置いてあつたはずだ。それを使ってできるだけ遠くに逃げよう。先に逃げた人達との合流はあとから考えればいい。

しかし、オレの見立てるプランは強烈な爆音と暴風で台無しになつた。

ボオオオン！……ボオオオン！……

家の中の窓から見えた無数の紅蓮の柱。それが意味するのはつまりタイムリミット。しかもそれは街の広場付近から吹き上がっていた。最悪もいい所だな、クソが。

「ラーゼお兄ちゃん？」

「ラーゼ兄さんどうしたの？」

「・・・・・すまん」

呆然とする一人に首筋に威力を極限まで抑えた手刀を打ち込む。罪悪感を感じる前に気絶した一人に救助キットから取り出した酸素マスクを一人に付ける。オレ分は初めから頭数に入れてないので無い。

二人に混乱されでは厄介なことになる。それに、もう何処に逃げても無事で済む場所など無い。ならばせめて・・・・・。

絶えず続く爆音。爆風が吹き荒れ、家の天井に亀裂が走り始める。このままでは間違いなく数分で崩れるだろう。だがそれでいい、それならこの一人は助かる。

ベルドとマリエスを密着させ、オレはその上から覆い被さるように二人を抱きしめ、。この肉体のタフさならば岩の破片を幾ら浴びても貫通することはないだろう。これで二人は生き埋めにはならない。

瓦礫に埋もれたところなら直接火は届かないし、煙が入ってきたり酸素が足りなくなつても一人には酸素マスクがあるから大丈夫だ。まあ、オレが生き残れる可能性は・・・・・良くて2、3%が良い所か？てか、むしろ誰かに”無い”ときっぱり言われた方が楽に

なれそうだな。

この一人も絶対に生き残れるということはないが、この世界の中東政治や救助団体は優秀だ、心配はないだろう。その時はオレの遺体も一緒に運ばれるかもしねえが。

ブツッ!!

「・・・・・ツ!!」

天井が崩れた。背中に岩の破片が次々と突き刺さり、血が流れ出す。他にも刺さらずに背中にぶつかる破片もある。意識が薄れ、視界が暗くなっていく。痛みは前世で嫌と言つほど味わつたが、やはり慣れなどがあるわけもない。

「・・・・・ぐつ!!・・・・・ベルド・・・マリヒス・・・生きて、くれよ・・・」

そう言つて一人の頭を撫で、オレは意識を失つた。

何だか騒がしいな。何故か消毒液の臭いがするが・・・冥界つてのは実は騒音とアルコール臭に溢れた場所だったのか？

目を開けてみる。すると、視界に映つたのは冥界ではなく、白い天井だった。

何故か体が動かないで首だけ動かして周りを見る。すると、数人の女性と一人の男性が忙しく側にある機械を操作したり、点滴を取り替えたりしている。

「……………は、何・・・処・・・だ？」

あれ？普通に話そうとしたのに、なんだこの掠れ声は。しかもうまく喋れない。酸素マスクを付けられてるせい？いやいや、んなわけないだろ？

多分ここは病院だと思うのだが、処置をしてる人間の言葉が引っかかる。なんだつけ？これ。ああ、そうだ！日本語だ！…………あれ？でも確かに日本にはミサイルのほとんどが向かってたんじゃなかつたけ？

それに病院つてことは、下手したらAMSプラグとか改造された体とかがバレてるんじゃないか？

オレが一人思考の海に沈んでいると、男性医師が廊下で誰かと話していた。ここからでは顔が見えないが、どうにも女性に見える。

するとその女性が医師と入れ替わる形で部屋に入ってきた。近くで見てみるとかなりの美人さんだ。黒い長髪に少し狼を思わせる吊り目。クールビューティという言葉がよく似合う女性だ。オレになに

か用だらうか？転生してから日本人とは会話以前に出会つたことすらないのだが。

「目が……覚めたんだな。……よかつた」

その女性はオレの顔を見た途端に今にも泣きそうな顔をした。なぜ、この人が泣くのだろうか。

「何故……あな、たが……泣く、ん……ですか……？」

かなり苦労したが何とか声に出せた。一応前世で日本語は完全に覚えているのでなまりは無いはずだ。

「！……私の言葉がわかるのか？……ああ無理に喋るな、煙や埃を大量に吸い込んだせいで喉が弱っているんだ。頷くだけいい」

オレの声を聞いて、女性の顔が泣き顔から入室の時の顔に戻った。なるほど、声がうまく出せないのはそういうことか。そういえばこの人は誰だらう？少し無理してでも聞いてみるか？

「そういえば、自己紹介がまだだつたな。ラーゼ・ベルセルク君」

どうやら必要なかつたらしい。しかし、オレの名前を知つていると言つことはオレのことを調べたということか。AMSの技術を狙っている人間には見えないから一先ずは安心だが。

「私の名前は……織斑千冬。……キミにこんな怪我を負わせてしまつた張本人だ」

これがオレ、ラーゼ・ベルセルクが、未来に『世界で唯一ISを動かせる男性』と呼ばれる織斑一夏とその姉、織斑千冬の二人に出合った出来事の始まりである。

第1話 崩れ去つた幸せと新たな出会い（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

今回のオリジナルは白騎士事件でのミサイルが日本以外に飛んで行つたという滅茶苦茶なものです。

あと、原作キャラは出せたけど、ストーリーが原作に入るのはまだ1、2話先だと思います。

それと、近々試験が迫つてきましたのでしばらく更新を遅れさせていただきます。まあ元々早くもないのですが。どうかご了承ください。

では、また次回。

第2話 新たな家族（前書き）

試験勉強の休憩時間に投稿です。

では、どうぞ。

第2話 新たな家族

Side ラーゼ

「なあラーゼ、組み手付き合ってくれないか？ 篠も一緒にやろうぜ」

「別に構わんが……一夏、せめて2対1でやろう。私達が一人だけで挑んでも勝負にならない」

「そうだな……それじゃ兄さん、篠、タイミングはそつちに任せるよ。……けど今日は姉さんも帰ってくるし、一回だけにしようか」

ラーゼ・ベルセルクだ。

日本の病院で用覚めたオレは織斑千冬さんに出会い、キミにこんな怪我を負わせてしまった張本人だ”と言われた。

詳しい事情を聞くと、ミサイル基地にハッキングし、あの2000発以上（正確な数は2341発）のミサイルを一斉発射させたのは千冬さんの友人なんだそうだ。そして千冬さんはその友人の計画の手伝いとして、日本に飛来してきた大半のミサイルを迎撃したらしい。

その話を聞いた瞬間は鼻で笑いそうになつた。一人の女性がどうやら

つて無数のミサイル群を迎撃出来たというのだ、と。

そうそう思つたオレは、次に千冬さんが話した内容に興味を示した。

I.S. 正式名称インフィニット・ストラトス。

宇宙空間での活動を想定し、千冬さんの友人が開発したマルチフォーム・スーツ。理論上の性能は従来の兵器を圧倒する性能を秘めている。しかし、世界はI.S.の性能を”絵空事”だと黙つて興味を示さなかつたらしい。

その対応は当然だとも思つが、同時に愚かなことでもある。千冬さんが簡単に教えてくれた性能だけでも、物質を粒子化し搭乗者の意思で武装を交換する高度な火器管制、戦闘機のような速さで縦横無尽の飛行が出来る運動性能。これだけを聞いても充分に興味を示す価値はあつたはずだ。

もし、これを一つの国が独占すれば、パックスエコノミカのように全ての国家と戦争をするのも可能になつただろつ。そこにオレが持つAMSとネクストの技術を加えれば敗北はまずありえない。やるつもりもないがな。

ただこの時、オレはI.S.が女性にしか反応しないという重大な事実を聞いていなかつたのだ。

話がずれたな。そこでI.S.の圧倒的な性能を世界に知らしめる為に千冬さんの友人は今回のような騒動を用意したんだそうだ。

日本に向けて同時発射された2000発以上のミサイルをI.S.”白騎士”を使って千冬さんが一人で迎撃する。ついでに白騎士を鹹獲、

あるいは破壊しようとした国家軍も死傷者無しで無力化したという二重効果が生まれた。今では世界各国がISを抑止力にしようと千冬さんの友人の理論に食い付いているらしい。

結果的に計画は大成功。しかし、唯一つだけ失敗があった。それが予定コースから外れて迎撃が間に合わず、中東に飛来した数十発のミサイル。そして唯一人だけの負傷者、つまりオレのことだ。

ミサイルの迎撃と軍の無力化が終わった千冬さんは即座に中東へ直行。瓦礫の下敷きになっていたオレを発見して救出してくれた。ベルドとマリエスは気絶したままだつたが無傷だつたので無事ラードさんの所に届けられたそうだ。

だがそれに反してオレは見るも無残な状態だつたらしい。破片が刺さつた背中の出血以外にも後頭部に当たつた破片、鉄の棒などが貫通して負傷した幾つかの内臓、意識を失つた状態で煙と埃を吸い過ぎてボロボロになつた呼吸機能、他にも体中を破片で刻まれた無数の切り傷。はつきり言おう。2、3%の力を甘く見ていた。

とは言つてもオレは病院での処置を繋ぎ繋ぎに行つて、この病院でようやく怪我の処置が完了した。それに、怪我の処置が終わつてもオレは意識不明の状態で、目が覚めた今日まで一年以上眠つていた。

「・・・・・い、ち・・・・年・・・・?」

「・・・・・そうだ。・・・・・本当に申し訳ないと思つている。私達の不手際で危うくキミは命を落とす所だつた。・・・・・すまなかつた」

千冬さんは深く頭を下げた。入室の時のあの顔からして、目が覚め

るまで何度も見舞いに来てくれたのだろう。その度にどれほどの精神的な負担を感じたのか、その負担を果たして何度感じたのだろう。

本音を言えば、オレは千冬さんとその友人さんにはまったく怒りの感情を抱いてはいない。むしろ感謝しているくらいだ。ベルドとマリエスは無事だったし、千冬さんがISで即座に駆けつけてくれたからオレは死なずに済んだ。そのISを開発してくれた友人さんにも同じように感謝している。

それに意識を失っていても、オレの体に秘められているAMSの技術を欲しがる輩は少なからず居た筈だ。しかもオレは今回の事件で唯一人の被害者、政治的注目は無駄に集まつたはず。それでもオレがこうして無事に目覚めることが出来たのはこの人達が守ってくれたからだろう。

「気に・・・して、ま、せ・・・んよ」

「え?・・・だ、だが・・・」

「助け・・て、くだ・・さつて・・・あり、がとう・・『じぞい、ま・す。・・グッ!・・ゲホッ!』

喋りすぎたのか軽く吐血した。しかしこの言葉だけは伝えなければならなかつた。助けてもらつたら感謝するのは人として当然だ。今のオレの体がまともな人間と呼べるのか疑問があるが。

「もういい・・・もう、いいから・・・ありがとう」

オレの手を握つて涙を流す千冬さん。しかしその表情は先程とは違ひ、何かが吹つ切れたような顔をしていた。あとオレはその後に医

者から吐血した件でかなり怒られた。すいませんでした。

それからオレは凄まじい勢いでリハビリを終えたのだが、行く当てのないことにその時に気付き、盛大に自分を恨んだ。そこで「ウチに来ないか?」と救いの手を差し延べてくれたのが千冬さん。オレは喜んで引き受け、織斑家に引き取られた。AMSの技術を狙う連中から追われる予想してたので千冬さんには大感謝だ。

そして冒頭に戻り、オレは織斑家の一番下の兄弟ということになっている。前世の家庭が滅茶苦茶なものだったので、今の家族はとても温かく感じる。

今はオレの兄である織斑一夏とその幼馴染、篠ノ之箒の一人を同時に相手にして組み手をしている。最初は一人の剣道を見ているだけだったのが、兄さんに誘われた時に『オレはナイフと素手の方が慣れている』と答えてしまい兄さんと勝負。

結果はオレの圧勝。小太刀サイズの木刀を片手に兄さんの竹刀を上空に払い、一瞬で首筋に木刀を添えて終了。試合時間はほんの数秒だった。

それからはこうして2対1の組み手を偶にやっている。オレは素手、兄さんと箒は防具無しで武器に竹刀を持つ形だ。楽勝か、と聞かれれば実はそうでもない。二人はこの年に不相応な位の実力を持つている。鍛錬さえ欠かさなければ数年後には前世のオレとやり合えるレベルになるだろう。

だが今は所詮子供、楽勝ではなくても油断しなければ負けはしない。息を切らした兄さんが唐竹に振り下ろしてきた竹刀を軽いサイドステップでかわし、踏み込んできた右足を横に払って兄さんを横転させる。立ち上がる前に首筋に手刀をゆっくりと添えた。「回死亡」。これで兄さんはリタイアだ。

「一夏！？・・・はあつ！..」

前方から笄が額を狙つて突きを放つてくる。首を僅かに傾けて突きを回避、笄の左足に自身の左足を絡めて軽く突き飛ばす。

「え？・・・うわあ！」

いつの間にか片足が地面から離れたことで笄は地面に尻餅を着く。即座に立ち上がろうとするが、その前にオレは蹴りを顔面に・・・・・当たる寸前で止めた。

「・・・一回死亡」。これで笄もリタイアだ

「あ～あ、また負けか・・・・・初めてやつたときから一撃も入られねえよ」

「むう～・・・・・勝てないとわかつていても、やはり悔しいものだな・・・・・」

「兄さんも笄も、その年でその位強いのはすごい方だよ。オレがちよつと異常なだけ」

オレは前世で何度も戦闘を経験してきたし、リンクスとなつたこの体のおかげで前世のオレが再現不可能だった動きも出来るようにな

つた。この体なら前世の最後の戦場でも生き残る」ことが出来るだろう。

だがそれは対人戦、中東の時のような災害の前ではまるで無力だったな。

「さあ、兄さん、篠、もつお仕舞いにして早く着替えよ。今日は姉さんが帰つて来るんだし」

千冬さんはオレと一夏を養うために一人で働いている。最近では国内より海外に行くことのほうが多いかもしれない、養つてもらつて るオレと兄さんに出来るのはせめて帰つてきた千冬さんをゆっくりさせたあげられるように家事をしつかりすることぐらいだ。

そんな千冬さんが今日、日本に帰つてくる。これから3人で出掛け 空港に迎えに行くところだ。幸い空港は歩いて行ける距離なので、大人に同席してもらわなくとも平気だ。

この時、オレは知つておくべきだった。不幸といつのは一つの出来事だけで終わるものではないということだ。

第2話 新たな家族（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

主人公がようやく織斑家に引き取られました。しかし未だにIISやネクストなどを使った戦闘が書けない。o_r_z

出来れば次回で少年時代は終わりにしたいと思います。

では、また次回。

第3話 田覚めの予兆（前書き）

気が付いたらPVが2万を超えていました。

みなさんありがとうございます。

パパチャ様、baru様、デウカリオーン様から感想をいただきました。ありがとうございます。

では、どうぞ。

第3話　目覚めの予兆

Side ラーゼ

もう少しで千冬姉さんが乗る飛行機が降り立つ空港。兄さん、篠、オレの三人はゲート前で椅子に雑談をしていた。先程放送があり、姉さんの乗った飛行機はあと十数分で滑走路に入るらしい。

兄さんと篠は到着が待ち遠しいのか笑顔で話し合っている。見ていて微笑ましいものを感じるが、オレは会話に混ざらず、何度も周りの気配を探っている。

(3人・・・・いや、5人に増えたな)

空港に入つてから感じ始めた複数の視線。最初は子供だけで空港に来たことを珍しく思つた人間のものだと思つたが、確信した。

これはその手のものとは違つ。前世で数えきれないほど感じた尾行と監視の視線だ。しかしすぐに気づけないとは、オレも随分と緩くなつたものだ。初めから気付けていれば適当な理由で兄さん達から離れて早めに監視を仕留められたのに。

仕方ない、今からでもやるか。

「兄さん、篠、ちょっと飲み物でも買ってくるよ。姉さんが先に来たら正面ロビーで待つてて」

兄さんと篠は疑いもせずに元気良く返事、オレは一人の元から離れていく。移動するに連れて5つの気配がオレを追い掛けてくる。

(やはり狙いはオレか。AMSの技術が田舎でか……まあすぐにわかるだろ？……締め上げればな)

その時のオレは知らずの内に歪んだ笑みを浮かべていた。

「げほっ！…………もう……許し……バキッ！」……があ
！……」

「だつたらさつさとバックの組織名を吐けよ……こちとら人を
待たせてるんだ。そろそろ鼻や指も折っちゃった方が良いか……
？」

スパイ5人組みは意外と簡単に見つかった。この世界でのスパイの
鍛度が低いのか、オレが相手した奴らが異常だつたのか、どっちに
しても苦労はしなかつた。

あとは姿を隠して尾行を撒き、一人ずつボコボコにしてリーダーを
聞き出した。現在オレの足元で地べたを這いながら顔を蹴られて口
から血を吐いている男がそうだ。他の4人は四分の三殺し状態にし
て警備員の巡回ルートに置いてある。

今の場所は人の手があまり無い古い倉庫の中。他の仲間と連絡が出来なくて焦つたのか、人目のない場所に逃げようとしたのをオレが追跡していくことに気付かなかつた。結果的にこいつは自分で自分の首を絞めた。

一応逃げないようにして、この腕と足の骨は全て折つてある。顔面もボロボロにしているが、喋れなくなると少し困るので頸の骨を折らないように手加減を加えている。

いやあ～この体つてかなりの怪力だから狙い所しだいで骨を折るのは蹴り一発で済んだよ。まあ中には砕けた骨もあるかもしかんが知つたことではない。

一度目は千冬さん達が確かに拒否の意思を示したはずだ、それをわかつていてこいつらはやつて来た、ならばもう掛けてやる慈悲は無い。

「……あ、そうだ。聞き忘れてたけどお前らがオレを狙つてた日、的つて何？……とぼけた場合は肩と指の骨を砕くぞ」

「……ひっ！……お、俺達への命、今には……AM、Sつて名前の……技術、だつて……」

「……なに？」

AMSの技術を狙つてきたことは完全に予想通りだ。そこはいい。しかしオレの疑問点は別にある。

なぜこいつらに命令した組織の人間は”AMS”という技術名を知つている?

オレは今まで、この世界の誰にもAMSの技術詳細はもちろん、AMSといつ略称や正式名称であるアレゴワーマニアコペイティシステムの名前すら口に出していない。資料などにも残した記憶はない。

ならば何故こいつらを雇つた組織は名前を知つていた?この世界の人間が付けた略称と偶然一致した?馬鹿な、詳細も知らない段階の技術に略称が必要なほど長い名前を付けるわけが無い。

(いや待てよ……詳細を知らずに名前は付けられない、なら逆に明確な詳細を知つていたら?もしまつたく同一の技術体系が存在していたら?……だがそんなことがありえるのか?オレのこの力は元々ヘラに『えられた力なんだぞ?……ダメだ、情報が少な過ぎる)

「……おい、これが最後のチャンスだ。お前らの所属してゐる組織名はなんだ?……素直に吐けばオレの情報を一切話さない条件で見逃してやる。……ちなみに反対の場合、わかるよな?」

「(「クン!」)(「クン!」)……亡國企業つて名前だ……ファンタム・タスクとも呼ばれてる……」

「ファンタム・タスク……あんがとよ。んじゃ、『苦労さん』……」

「え?……「バキッ!」……がつ!……なん……で……」

拳で醜く歪んだ顔で相棒に裏切られたような目をオレに向か、男は氣を失つた。何を驚いているんだ?監視していく相手をそのまま所属先に返してやるわけないだろ。

指紋などの付着を避けるために装着していた黒い手袋は外さず、気絶した男の所持品から無線機を見つけて握り潰し、粉々に踏み碎く。そして男を肩に背負い、他の四人と同じように夜の警備員が巡回口

ースで偶然発見したように設置しておぐ。こんなもんか。

少し遅くなつてしまつたが、後で千冬さんに事情を話せばわかつてもらえるだらう。そして、オレ自身もこれからどうするか決めるべきだ。

スパイが送り込まれて、そのスパイが全滅した。ならば敵の狙いはオレではなく周りの人間に変更される可能性が大きい。それを回避するためには、オレという存在が今の環境から姿を消さなくてはならない。

「ふつ・・・・やれやれ、この日常もいよいよ潮時か？」

皮肉げに笑いながら右手で拳を作る。そしてその拳を、壁に横殴りで叩きつけた。全力ではなかつたがピカピカのタイルで作られた壁に大きな蜘蛛の巣状の亀裂が走る。

「・・・・・ふざけんな」

見えぬ敵に対して放つた言葉にあらん限りの憎悪を込める。握りしめた右手からは力の入れ過ぎで血が出ているがどうでもいい。

オレは願つた。殺し続けることしか出来なかつた人生をやり直したいと、そして手にしたんだ、新たな人生を、新しい家族と過ごす日常を。なのにそれがまた壊れようとしている。

認めない。前世を否定はしないが、新たな人生での幸せまで否定されるなど冗談ではない。不幸は前世でイヤと言つほど経験した、だから今度は絶対に幸せを諦めない。それを邪魔するモノがいるならその敵を破壊し尽くす。

今のオレにはそれを可能にする力が眠っている。オレのみに『えられた力が。やれる、やってやる。今度こそ、オレは・・・・・。

ピー。

『凍結強制解除。』これよりネクスト、ノブリス・オブリージュ、オルレア、一機のデータのセットアップを開始します

突然脳内に響いた短い電子音、それに続いて左目の網膜に表示された文章。オレの理解が追い着くより先に網膜の文字は消え、新たに二つのメーターが表示された。

「これは・・・・・」「フルルルル！・・・・ん？」

前方に設置されていた公衆電話がコール音を立てている。まるでオレの身に起きた異常と合わせたようなタイミングだ。普段なら存分に警戒するところだがオレは左手を手で押さえながら躊躇わざ受話器を取る。

「もしも』やあ！お久しぶりだね・・・』「ガチャ！」・・・行くか
「フルルルル！・・・はあ」「ガチャン」何の用だ？ヘラ・・・・

受話器を取った時と同じように躊躇いなく受話器を置いたが、再びやつてきた「ホール音を聞いて溜め息を吐きながら受話器の向こう側の女神に用件を聞いた。

『それより！いきなり電話を切るなんて酷いじゃないラーゼ！・・・
つたく、いきなりデータの凍結が解かれたから連絡しに来たつての
に』

いつからこいつはオレのことを”キミ”から”ラーゼ”と呼ぶようになったんだ? こいつと仲が進展するようなことなんて・・・あつたな、プロローグ²で思いつきり。とりあえず意識しないよう冷静に話す。

「データ? ··· ···」の左目の網膜に直接映ってるやつか?」

『 そうだよ。あの時言つたけどラーゼの機体は来るべき時期が来るか、条件を満たさなければ使用できない ··· ··· はずだっただけだ。ラーゼの激情が作用して凍結が強制解除されちゃつたみたい、よっぽど強い感情を抱いたんだろうねえ~ ··· ··· 何なのかは大体想像出来るけど』

「オレの前世を見てきたお前なら、か? ··· ··· それで? これはどうゆう仕組みなんだ?」

『 今から説明するね。少し長くなるよ?』

まずその左目に映つてるのはデーターはラーゼが選んだ機体のノブリスト・オブリー・ジュー、オルレア、一機のネクストをその世界の戦闘に最も適した形に最適化し、同時に変化したネクストのデータをラーゼの体の中にダウンロードしてくる作業の進行度だよ。他の機体も全てそれと同じように行われるから。

それが100%になればラーゼは晴れて本物のリンクスつてこと。

それと、その作業には段階があるの。今みたいに機体のデータを読み込み始める状態が第一形態^{ファーストフェイズ}、その作業が終了した状態が第二形態^{セカンドフェイズ}、そこからしばらく扱つて慣れたら第三形態^{サードフェイズ}に入るの、第三形

態になつたら武装とかパークを自在に変更できるようになるよ。あつ、機体の整備とかは専用の道具を送るから。

「こんな所かな？質問ある？」

「いや、大丈夫だ・・・・・それと、別のこととで質問がある何故この世界にAMSの技術が存在するんだ？お前が選んだこの世界は”アーマード・コア”の世界ではないんだろう？」

現状は理解した。しかしながら気になることはある。あのスパイと違つてへラなら確實に何かを知つてているはずだ。オレをこの世界に送つたのは他でも無いへラなのだから。

『それだけは絶対に無いよ・・・・・絶対にね』これに関しては私も予想外だつたんだけど・・・前世のラーゼに宿つてたタナトス（死神）の力が何らかの形で干渉したのかも・・そっちの世界で目が覚めた時も生まれた瞬間ていうよりはどつかで倒れてたつて感じじやなかつた？』

「ああ・・・・目が覚めたら荒野の真ん中で寝てた　　衣服もボロボロだつたな」

『確定だね。タナトスの力がラーゼの来世を”転生”から”憑依”に変更したんだよ・・・私の予想だけど、その変更が起こした何らかの力で世界にAMSの技術が生まれた。最悪ネクストも・・・。』

そして体にラーゼの魂が宿る前のその体の持ち主は何処かの研究施設で暮らしてたんじゃない？それこそアスピナ機関みたいな所とか・・・そこを抜け出してしばらくして・・・』

「オレの魂が宿つた、か つまり、この世界にはAMSやアーマードコア・ネクスト、それを動かすリンクスが存在していると?」

『うん。十中八九ラーゼと同じ力を使うだろ? うね……でもその世界にはISもあるからリンクス戦争とかは絶対に起きないと思うよ。それだけは安心して。……あ、そろそろ時間切れかな?』

「ありがとう、ヘラ 色々教えてくれて助かった」

『いいのー! いいのー! ……じゃあ、頑張ってねー! ちゃんと幸せにならなきゃダメだよ?』

そこで電話が切れた。受話器を戻し、今度こそ兄さん達の所に歩き出す。

しかし、どうやらオレの敵は一つの企業だけでないらしい。だが恐怖は無い。オレの邪魔をするのならそれら全て倒してみせよ。

左目に触れる。表示されたメーターの数値は現在ノブリスが56%、オルレアが49%。

「やうだ あきらめない……絶対に、諦めてたまるか……

』

そう呟きながら空港の広いロビーに足を踏み入れた瞬間、ロビー全体を爆音と閃光が支配した。

第3話 田覚めの予兆（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

主人公の来訪の仕方は死神のせいで実は憑依になつていきました。ちなみに主人公の魂が宿る前の人格は命令に忠実な人形のようなものです。

そしてすいません、少年時代が未だに終わりません。下手をしたらあと1、2話分使うかも……。

少し無理矢理な感じかもしれません、このHISの世界にアーマードコアの技術が秘密裏に生まれましたので、原作のリンクスやネクストも出していくつもりです。多分アームズフォートもあるかも。

では、また次回。

第4話 謎のHIS、急襲（前書き）

B.R様から感想をいただきました。ありがとうございます。

突然で申し訳ないのですが・・・どなたかオルレアの左右の背中武装のパーク名をご存知ありませんか？左背中はプラズマキヤノンというだけでパーク名がわからず、右背中はわかりません。わかる人がいればお手数を掛けますがお教えください。

では、どうぞ。

第4話 謎のHIS、急襲

Side 千冬

私は海外での仕事を終えて久々に故郷である日本に帰ってきた。ゲートを潜つてすぐに私に飛びついてきたのは大切な家族であり弟の一夏。傍には私の悪友である篠ノ之 束の妹、篠ノ之 篓がいる。ふと、もう一人の弟がないことに気付いた。ほとんど一夏の独断で一番下の弟ということになつてているがあいづは外見年齢よりも遙かにしつかりしているので、いつも一夏達を傍で見守つている。今回のような迎えの時も普段は必ず着いて来るのが……。

「ただいま、一夏、篠……ラーゼはどうした?」

「おかえり千冬姉!……ラーゼはなんか飲み物買つてくるつて行つたきり戻つてこないんだよ……千冬姉が先に着いたら正面ロビーで待つてくれつて……」

ラーゼが一夏達を置いて飲み物を買いに行つた? 普段ならありえないことだ。何かあつたのか?

あいづは自分の存在が色々な意味で世間から注目を集めていることを充分に理解している。本当にあいづは外見からは想像もできないほどしつかりし過ぎている。今だつて自分で目の前の問題を片付けようとしているのだから。

少しは頼つて欲しいと思った。だが事実上ラーゼには手助けなど不要だ。それほどの力を持つていた。実際、あいづを物理的

に鎮圧するには私でもISの力が必要なほどだ。

ラーゼが入院していた頃に医者から聞かされた話だと、ラーゼの肉体は内臓や脳を除いた全身に人工的な強化手術を施されているらしい。何よりも驚かされたのはラーゼの首の後ろに人工皮膚で隠された接続プラグ。それは明らかに一般人の生活には必要無い物だ。

どれだけ簡単に見積もってもラーゼ個人が有する身体能力は人知を超えていた。一度だけ手合させしたことがあったがあいつは小太刀サイズの木刀一本だけで私とほぼ互角だった。

自慢ではないが私の身体能力も他人と比べればかなり異常なのだろう。しかしラーゼはあの年で私のそれに追い着いた。

本人の様子からしてラーゼは自分のことを全て理解している。辛くないのか?とは訊けなかった。答えの予想が付かないのに何故だかラーゼの答えを聞くのが怖かつたのだ。

ラーゼが目を覚ました時もそうだ。

絶対に許してもらえないと思っていた、罵倒される覚悟も出来ていた。当然だ、私と束はラーゼに生死の危険を伴う怪我をさせたのだから。今思えばあれで生きていられたのはラーゼだったからだ。

だがラーゼは恨み言の一つも言わずに許してくれた。しかも、あることか逆に感謝された。一瞬頭の中に障害でも出来たのどうかとも思った。

嬉しかった。しかし同時に罵倒の一つも無かつたことが怖かつた。何故そもそも簡単に許せるのだろう?本当は殺したいほど恨んでいる

のでは？簡単に言えば、私はラーゼの言葉が信じられなかつた。家族へ勧誘したときも本心ではおつかなびつくりだつた。

もちろん今ならそんなことはないとはつきりわかる。あいつは私達と本当の家族として向き合つてくれている。

話がかなりはずれたな。

とにかくラーゼならば自分で問題を解決して戻つてくれるだろう。

「そりか・・・では先に行つて待つていよう

「うんー」「はいー」

三人で歩き出し、会話をしながら正面ロビーを目指した。

ラーゼは私がISの知識に詳しかつたことから気づいているだろうが、一夏は私がIS関連の仕事をしていることを知らない。束の計画によつて今やISは全世界の軍事力の要となつてゐる。そんな時期なのでこつちに居られるのはそりが長くない。

(いいかげん海外にいる束をラーゼに合わせて5人で遊びにでも行くか・・・)

目の前で楽しそうに話している弟とその幼馴染を見ながら頭の中でそんなことを計画してみる。

だが次の瞬間、私の思考は突如やつてきた閃光と爆風によつて中断された。

この時、私の計画が実現される可能性は無くなつた。

Side Out

爆風がやつてくるよりも前に千冬は一夏と簫を抱き寄せ地面に伏せた。その時ゴンッ！という音が聞こえたか千冬は気にしない。爆風の熱が千冬の肌を撫でて通り過ぎる。

千冬が顔を上げると、そこは空港の中とはまったく違つた場所になつていた。人が最も密集するゲートやチケットの販売口、電子掲示板などの場所から巨大な黒煙が巻き起こり、爆発の炎が引火して壁や置物は燃え盛つている。

炎は爆発の直撃を受けて絶命した人々の体を焼いてその勢いを増していく。

「爆弾テロか……だとしたら何処の馬鹿だ……？」

千冬は目の前の状況に少し混乱しながらもほどんど冷静だった。

自然と自分の白騎士に続く新たな愛機、暮桜を展開しようとするが手を止めて舌打ち。間の悪いことに現在暮桜は束の要求で整備に出していたのだ。

ISが無く、一夏と簫がいる今の状態で自分に出来ることは無い。そう思い千冬は額を打つて氣絶している簫と事態をまったく理解できていない一夏を抱えて移動する。その際一夏に死体を見せないよう注意を払う。

爆発音が連續で響いた。聞こえてきた方向は真上。千冬が視線を上

げた先では空港の天井に張り巡らされた丸い鉄柱が落下していた。

仕組まれていた爆弾は天井の鉄柱の接続部分を数箇所破壊したのだ。

その中の破片の一部が千冬に迫る。決して大きくなくても膨大な落下エネルギーを得た物理的破壊力は人一人を殺すには充分。

避けられない。逃れられない死を理解した千冬は目を閉じた。次の瞬間に破片は千冬の体に直撃し、鮮血を撒き散らす・・・・・

はずなのだが、その痛みは訪れなかつた。

バアアーン！－！

破片が千冬に迫った時、千冬の横を人影が通り過ぎ、落ちてきた破片をなんと右の拳で殴つた。間違いなく腕の骨が粉々になるはずなのだが、碎けたのは破片の方だった。しかも見る限り衝突した拳には少しの出血しか見当たらない。

千冬は聞こえた粉碎音に目を開ける。するとそこには・・・・・・。

「痛ててて・・・流石にこの体でも無傷とはいいかないか。・・・怪我無いですか？姉さん、兄さん」

右手をぶらぶら振りながらこちらを心配していくラーゼの姿があつた。その登場にこそ驚いたが、もう一人の弟を見て千冬は目を伏せて笑つた。

「ああ、大丈夫だ・・・・・ただいま、ラーゼ」

千冬の言葉にラーゼは一瞬目を見開いたが、すぐに苦笑した。

「おかえりなさい・・・千冬姉さん」

Side ラーゼ

正面ロビーに辿り着いた瞬間に起った爆発。その原因は間違いないオレがさつきボコボコにした奴らのバックだろう。ちつ、今になつてはもう遅いがやつぱりあいつ等殺しておけばよかつた。

しかし、スパイを送り込んでくる時点で小さくない組織だとわかるが、まさかここまでやるとはな。

こんなことをするのはもはやただのテロリストだ。亡国企業はオレの頭の中にある超えてはいけない境界を超えた。

人の血で汚れきったオレが言う資格は無いのかもしれないが言ってやる、この行いは”悪”だ。

(まずは兄さん達を探さないと・・・多分姉さんと一緒に正面ロビーにいた筈だ)

今的位置は爆破地点の一階からエスカレーターで上がった2階。縦の高さはほぼ1・2、3メートル。エスカレーターを使わずにまつすぐ一階に飛び降りる。

着地。足に負荷が掛かり、痺れが走る。だがそれだけだ。そろそろこの体の反則性能で可能な行動は直感的にわかる。

空港にいる人間の全員が逃げ出している中、周りを見渡して兄さん達を探す。

(お、いた・・・・つてー?・・・)

見つけたのは姉さんだったが、兄さんと簾は千冬さんの脇に抱えられている。そんな姉さんの上から一つの破片が落ちてきた。あのまでは直撃する。

迷わず走り出して右の拳を突き出す。真空を生み出して放ったそれは破片を粉々にした。

流石にこれは無傷とはいかず裂傷が出来たが、逆に何故裂傷だけで済むのだろう？

そんなことを考えながら姉さんに無事か訊くと、無事の報告とただいまの言葉が帰ってきた。

とつあえず安心しておかえりと返し、すぐに空港から出よつと姉さんの荷物を持って一緒に出口へ走り出す。周りにいた人々も殆どが逃げ終えているようで、人影があまり無い。残っているのは天井まで到達しかけている炎と爆発で降り注ぎ散乱した破片だけ。

「な、なあラーゼ・・・・何がどうなってるんだ・・・?」

簾のように氣絶していない兄さんは現在の状況がまったく理解できていないうだ。それでも暴れたりして姉さんの邪魔をしてないので充分大したものだが。

「早い話がテロだよ・・・・平和なこの時世、しかも日本の中でもこんな体験するなんて本当に運がない・・・」

「やつこつラー・ゼはなんで冷静なんだ・・・？」

「オレは兄さん達の所に来る前に何度か中東で経験したからだよ・・・
・・実際、こんな状況じゃ籌みたいに気絶しちまつた方が色々幸せな方だ・・・」

「お前、ぐり・ぐりの状況でよく話せるな。・・・見えた、出口だ」

オレはかなりの速度で走る姉さんに並びながら3人で会話する。緊張感があるで無いが頭上の破片には注意を向けているので大丈夫だ。出口の外には人ごみが出来ていて、耳には消防車のサイレンの音が聞こえる。どうやら騒動は次第に治まるようだ。

煙が近付いてきたので先に姉さんを行かせ、オレがその後に続く。

だがオレが出口を通りつとしたり、背筋に強烈な悪寒が走った。気が付けばオレは千冬姉さんを荷物と一緒に出口の外に突き飛ばしていた。その時、呆然とこちらを見る兄さんと驚愕の顔でこちらを振り向いた姉さんの一人と目が合ひ。

「・・・・ラーゼ・・・・?」

「・・・・ツ！？・・・・ラーゼー！」

背後から猛スピードで近付いてくるジヒット音。飛来してきたそれは、爆弾よりも一際大きな爆発を起こして出口とその周辺を吹き飛ばした。

「・・・・ぐうつ・・・・！」

爆発で後ろに飛ばされながら咄嗟に両腕で顔を守つたが、飛び散つた破片が腕や脇腹に少量突き刺さつる。

背中を地面にぶつけて着地。顔を上げた先には崩れ去った瓦礫と業火に完全に塞がれた出口。どう見ても出られそうにない。巻き起こった炎はすでに空港内部の7割まで広がりつつある。

(・・・でこりが、しせいへせ出られやつにないな・・・)

ガチャン！！

「・・・ツツ！」

背後から聞こえた重い駆動音。振り向いて確認するより先に全力で右に跳ぶ。

その瞬間
・
・
・
・
・
・
・
・
。

鼓膜を突き破りかねない轟音と共に、一瞬前にオレが立っていた場所が吹き飛んだ。いや、音からして無数の銃弾が着弾しただけなのだろう。だが、銃弾の大きさと連射速度が異常だつた。

着弾点から逸れた場所に空いた穴の大きさから、弾の大きさは人間が単体で使う兵器のものじゃない。戦車などに搭載されている対人機銃でもここまではならないと思う。

連射速度も最低で毎秒20～30発はあるだろ？・・・でなけれ

ば床に巨大なクレーターが出来るわけもない。ちなみに、毎秒30発で発射される弾は毎分で1800発に到達する。

立ち上がって視線をクレーターから発射元・・・空中に持ち上げる。視線の先の相手もオレを見た。

そこには2メートルを超える真っ黒の中に白いラインが入った巨人。だがその身は人のものではなく機械だ。

その全長からは太いとも細いともれない二つの足、腕の長さは指先まで太ももの辺りまで。両腕の肩を円状の装甲が包み、その上に短い三本のスパイク、肩から肘関節までを金属で出来ている伸縮式のバルブで固定し、そこから下の腕は少し細い。（イメージ：アニメ版のIS 4話に登場した黒い敵ISの腕を短くして細くし、肩を上記の通りに変えた姿）

そしてその真ん中、人間で言う胴体の部分にもう一つの体がある。不気味な覆面と全身タイツみたいな格好をしているが、何？あの変態・・・まあ、あの格好はとりあえず無視して。

多分あれはIS、インフィニット・ストラトスだ。姉さんの話ではもう全ての国が第二世代のIS開発に着手したらしいが、亡国企業はどこでこんなものを手に入れた？つか子供一人が狙いで普通ISまで持ち出すか？

それに、一目見ただけでもこいつが積んでる装備は常識的に人間に使用してはいけないとと思う。

右腕の下に装着されているガトリングガンと右腰の横にぶら下げているドラム型マガジン、これがさつき床にクレーターを作ったのだ

る。つい。

I.Sの装備は基本、粒子化した状態から実体化させて自由に使用する。恐らくこいつにはまだまだ物騒な火器が搭載されているな。

黒いI.Sが空中に浮いたまま無言で右手を持ち上げ、ガトリングの砲口をオレに向ける。

(話すつもりはありません……てか……?)

先程と同じように全力で跳ぶ。今度も右だ。立っていた床がさつきと同じように抉られ砂埃が舞う。今度はさつきと違つて黒いI.Sはガトリングのトリガーを引いたまま砲口をオレに向けてくる。

着地してからも全力で走り抜ける。I.Sにはハイパー・センサーといふ聞くだけでも凄さが伝わってくる高性能センサーが搭載されている。つまりあの黒いI.Sは精密射撃が期待できないガトリングでも的確な射撃が出来るのだ。

人前で一度も発揮したことない”全力”で走る。オレの急加速に反応が遅れガトリングの追跡から距離が開く。もちろんすぐに追い着くだろうが、照準が狂つた僅かな隙にエスカレーターへ走る。二階へ逃げて隠れれば少しば時間が稼げるだろう。

だが、それは相手にも予想できたことだった。

背後からキューイン！という音が響き、黒いI.Sの肩から新しい武器が出現した。その形は縦に長く、一本の筒のような形をしている。その筒の先端が向いているのは間違いないオレ。

「あれは・・・・やばつ・・・」

ボオオオン！――！

大きな発射音が響いたと同時に右に転がる。オレのいた場所を白い煙がロケット音をばら撒いて通過した。

顔を上げた途端に強烈な爆風。両手で顔をガードしてなんとか踏み止まる。

爆煙が晴れた場所には完全に原形を失ったエスカレーターが見える。形を見て思ったが、やはりあれはロケットランチャーだ。出口をふつ飛ばしたのもアレだろう。

逃げ道を塞いだ黒いISは再び右手のガトリングを持ち上げた。

「・・・調子に・・・」

砲口がこちらを向く前に転がっていた手の平サイズの瓦礫を右手で拾つて投球ホーム。

「・・・乗るんじゃねえ！――・・・」

左足で地面を踏みつけ、全力投球。ただのストレートだが、この体の全力で投げた物体の速度は160キロを超える。そしてそれだけの速度が加われば、充分な殺傷能力を秘めた凶器となる。

黒いISの搭乗者はオレの攻撃が予想外だつたのか一瞬固まって反応が遅れた。そのまま瓦礫は搭乗者の顔面に食い込むはずだったのだが、瓦礫は顔面の寸前で発生した力場に物理エネルギーを殺され、

地に落ちた。

(・・・今のがＩＳの中で最も重視されてる”絶対防御”か・・)

ＩＳは防御面、詳しくは操縦者の保護に一番目を配っている。それが今の絶対防御だ。搭乗者の生死に関わる損傷はどのように自動防御が働く、しかし絶対防御はＩＳのエネルギーが大幅に削られると姉さんが言つていたし、今まで少しばかり消耗させられたはずだ。

(・・・攻略の糸口は見えたな・・・あいつの正体も・・・変だと
は思ったが、無人機か)

操縦しているのが人間、しかもそれがＩＳである時点で女確定なのだ。いかに訓練を積んでもあの速度で瓦礫が顔面に接近してきて何の反応もないのはおかしい。反射的に少なからず声が出るか、腕で身を庇うぐらいはするはずだ。

ガチャン！

ガトリングの砲口が再びオレを捉える。降り注いで散乱した巨大な瓦礫が集まる地点に向かつて走り抜け、瓦礫を盾にしながらガトリングを回避する。だが、突然周りの瓦礫が纏めて吹き飛んだ。黒いＩＳがロケットランチャーを放つてきたのだ。

爆発に肌を焼かれるが、出血などの外傷は殆ど無い。爆炎の中から黒いＩＳに向かつて走り出す。ハイパー・センサーでオレを捉えていた黒いＩＳは空中に少し浮いてガトリングを向けていた。立ち止まらず走る速度をあげる。

ガトリングのトリガーが引かれる前に右足でハイキックを放つ。狙

つたのはガトリングの砲身。蹴りが直撃した砲身は少し歪み、構えていた腕がオレから見て左に開く。

二段構えで、黒い I.S は備えていた口ケットランチャーを構える。即座に右足を戻して全力で真上に跳躍。オレは黒い I.S を飛び越さずに肩に着地し、口ケットランチャーの砲身を右手で掴む。

「・・・おらあああああ！」

咆哮と共に握りしめた左拳で砲身を殴る。だが I.S の装甲と同等の強度を持つ砲身は拳一発では壊れない。中指が折れたが砲身に与えた損害は亀裂程度だつた。黒い I.S がオレを振り落とそうと暴れ、武装を粒子化するより先に左手を伸ばしていく。

右手はバランスを取るために砲身を掴んでいるし、左手は中指が折れて充分な威力の拳を放てない。両足も激しく揺れているこの状況では落ちないようにするので精一杯。

「おつと・・・・・仕方、ないか・・」

左手で手刀を作る。中指が使えないのなら小指で衝撃を与える手刀にすればいい。これで小指も折れるだろうが、どうせ左手はもうまたもに使えないし口ケット弾の連射よりは遙かにマシだ。

「・・・はああああ！－！」

振り下ろす。亀裂が入った同じ箇所に手刀を打ち込み、今度こそ口ケットランチャーの砲身が碎ける。遅れて小指が折れた痛みが走るが、これでこの武装が使用できなくなつたのだから安いものだ。

迫る大きな手から逃れるために黒いI.Sの肩から飛び降りようとする。しかし、突然左から強烈な衝撃を感じた。

「・・・・ぐつ・・・・！」

全身に暴風が襲い掛かり、骨をやられた痛みを感じた瞬間、オレの胴体が大きな手に驚撃みにされていることに気が付く。少し霞む視界の先に見えたのは、みるみる近づく壁。

背中から衝撃を感じ、すぐに壁に叩きつけられたと理解した。

「・・・・がはつ・・・・！」

背中の激痛は背骨が砕けたのではないかと錯覚を覚えるほどだつた。胴体を掴む手が離れても、オレの体は壁に深くめり込んだままで抜けなかつた。

顔を上げると、右手にガトリングを持ったさつきの黒いI.Sの横にもう一機同じ形状の装甲のI.Sが浮いていた。ただ武装が異なり、右手に片手で持てるマシンガン、左肩にさつきオレが破壊したのと同じようなロケットランチャーを積んでいる。

(一機いたのか・・・・ビームでも用心深い奴らだ・・・・)

口の端から血を垂らして舌打ち。ガトリングの方だけならばなんとかする自信はあった。しかしI.Sが一機に増え、もう一機はまったくの無傷となるとかなり厳しい。体はまだ動けるだろうが左手が使えない。

「もつちよつとやれると思ったが・・・仕方ない・・・・」

二機の黒いI.Sがガトリングとロケットランチャーを構える。直撃すればこの滅茶苦茶な体でも死にはしないかも知れないが間違いなく重傷だ。そんな状況でオレは口元に笑みを浮かべた。

「・・・・・生身じゃこんなところか・・・

瞬間、ガトリングとロケットランチャーの砲口が轟音を上げ、オレの体は爆発と土煙に包まれた。

だがその時、オレの脳内だけで短い電子音が響いていた。

Side Out

ラーゼの姿が見えなくなり、一機の黒いI.Sは武器をどけてハイパーセンサーを操作する。

センサーが生体反応を一つ捉える。そこは一機の予想範囲内だった。しかしセンサーが捉えた生体反応の強さは発砲前とまったく同じ・・・いや、むしろ強くなっていた。

黒いI.S一機はそれぞれガトリングとロケットランチャーを構えトリガーに指を掛ける。

だが次の瞬間、センサーがアラームを鳴らし、一機の間を突風が吹き抜けた。しかも、気が付けば黒いI.S2のロケットランチャーの砲身が綺麗に切断されていた。

センサーを見直すとラーゼの反応が元の場所から消えていて、新た

な反応がちょうど後方に出現していた。一機はそれぞれ武器を構えて後方を向いた。

そこには・・・・・・片手に銃を持つた天使が浮いていた。

第4話 謎のIS、急襲（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

ちくしょう・・・・まだ少年期が終わらない。

今回、多分オリジナル設定になると思いますが、幕がまだ引っ越していないう時期にもう第二世代型のIS設計が開始されています。この設定が影響して火器積んだ黒いISが原作で大量に出るかも。

次回は多分ネクスト無双です。

では、また次回。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使（前書き）

今は名もなき傭兵様から感想とオルレアの武装情報をいただきました。ありがとうございます。

更新が少し遅くなりました。申し訳ありません。

では、どうぞ。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使

Side ラーゼ

ピー。

『データセシットアップ終了。これよりネクスト、ノブリス・オブリージュ、オルレア、の一機を起動させることが可能になりました。おめでとう』『やあこまち』

二機の黒いE-Sが発砲した瞬間に鳴り響いたオレにしか聞こえない小さな電子音。それに続いて左目の網膜に文字が浮かび上がった。特に驚きは無い。姉さん達と話している時も戦闘中もオレの左目にはずつとメーターが表示されていたのだから。むしろやっと終わってかと呆れた気分になる。

放たれた弾丸が何時までもやつて来ないことに気付き、視線を持ち上げてみた。そこには、全てが止まつた世界があった。

黒いE-Sはもちろん、燃える炎も、放たれた弾丸も、音も、時そのものが歩みを止めていた。その閉ざされた世界の中で、オレは自分を保っている。呼吸も出来て、体も動く、オレは生きている。

ピー。

『緊急事態の発生を確認しました。現在製作者への開発された『初期起動限定サポートプログラム』に連動して時間停止プログラム "ザ・ワールド" を発動しています。自衛、および敵の撃退に最も

確実な方法として、ネクストの起動を推奨します』

時間停止プログラムの名前にネタの気配がするのは何故だろ？

「なるほど、今の状態はヘラの力か・・・ノブリス・・・起動しろ・・・！」

止まつた世界の中でもう一つの動きがあつた。左目に映された質問に、オレは苦笑の後に返答した。

『了解。リンクスの命令を受諾、ネクスト、ノブリス・オブリージュ、起動します』

壁にめり込んだ状態の体が浮遊感に包まれ、瓦礫を押しのけて空中に浮遊した。

全身が無害となつた緑色のコジマ粒子の光に覆われ、純白の装甲を纏つていく。

肩幅が広い胸部アーマーと両肩が上に出て肘の部分に専用のスタビライザーを装備した細い両腕。さらに、搭乗者の生命補助システムでも積んであるのか左腕から折れた指の痛みが消えた。

膝と足首、太ももの各所に黒いパーツが付けられ、股関節の近くにレッグスタビライザーを装着した一脚。

頭部を覆うヘッドパーツは元々の形から口元の装甲を無くし、目をセンサーや望遠などの様々な機能を積んだ赤いバイザーで覆つている。

その際、ヘッドパートの裏から伸びたプラグがオレのAMSプラグに接続した。一瞬だけ頭痛を感じて視界と思考にノイズが走ったが、すぐに納まった。セロの倍以上のAMS適正を持つオレだからこそこの程度で済んだのだろう。

AMS適正が低く、粗製と言われたアナトリアの傭兵やローディーの接続時の痛みはきっと想像を絶するものだろう。

AMSを接続すると、脳内に速度計と高度計、コジマ粒子の密度、被弾箇所や損傷度などの機体情報が送られる。自分の意識の全てがこの機体に繋がつたと確かに感じられ、さっそく武装の展開を指示、右手の平を前に突き出す。

脳から流れた電子信号がノブリスヘダイレクトに送られ、装甲の展開と同じようにコジマ粒子の光が両腕と背中に収束し武装を形成した。

右腕に突撃型ライフル、MR-102を握り、左腕にレーザーブレード、EB-0305を装着。背中の左右両方には3連装レーザーキヤノン、EC-0307ABを一基装備する。背中に待機状態となっている一つのレーザーキヤノンは翼の形によく似ている。

全身に余韻を残して漂うコジマ粒子の輝きを身に纏い、今ここにローゼンタールを象徴するネクスト、破壊天使、ノブリス・オブリー ジュが完成した。

純白の装甲を纏っている中で唯一肌が見える口元に笑みが浮かんだ。ネクストに繋がれ、全身が全能感に包まれた。感情を抑えきれず、喜びの笑みが抑えられない。

「そ、うだ・・・・」これが、オレの手に入れた力・・・・最高だ

『ノブリス・オブリー・ジューの起動を確認、5秒後にサポートプログ
ラムを終了します。御武運を』

5秒か、覚悟を決めるには充分な時間だ。

4・・・3・・・2・・・1・・・0・・・時が動いた。

物理的な破壊力を持つたガトリングの弾丸とロケット弾が再びオレに迫り、着弾。着弾点が吹き飛び、爆発と土煙が舞う。しかし、吹き飛ばされたのは背後の壁だけ、オレ自身は無傷だ。

オレに迫った弾丸とロケット弾は装甲に触れる前に薄緑の膜のようなものに阻まれ、ロケット弾はそのまま爆発、弾丸は全て弾かれた。

プライマル・アーマー。ネクストの標準機能であり、ジェネレーターから生み出されるゴジマ粒子を機体周辺に還流させ、あらゆる攻撃のダメージを大きく軽減、あるいは無力化する膜状のバリアだ。

実体弾には一番効果が高く、既存する戦車砲や榴弾、ミサイルなどではほとんど損害を与えるはず、理論上は核兵器にも耐えられる。

これほど強大な防御力を持つていて、実は複数弱点がある。一つ、形が膜状なので貫通力に優れたスナイパーライフルやレーザー兵器に対しても効果が比較的小さいのだ。

二つ、粒子で構成されているので攻撃を受け続けければプライマル・アーマーは次第に減衰し、再展開に時間を要する。

ネクストが使用するグレネードならば爆風でプライマル・アーマーを大きく削れるが、今黒いIS2が使用したロケットランチャーでは単純に破壊力が足りない。

「さあて……反撃開始だ……」

背中に装備された4つのメインブースターが火を静かに吹き出し始め、爆発のような轟音を上げる。同時に、オレの全身を重圧が襲つた。攻撃を受けたわけではない、オレ自身が急加速を行つたせいだ。

クイック・ブースト。これもネクストの標準機能であり、ブースターを瞬間に高出力で噴射することで前後左右への高速機動を可能にしている。機体の重量やブースターの出力などにもよるが、FB-Sを全項目フル改造にした今のノブリスは一度のクイック・ブーストで800～900kmに到達することが可能だ。

高機動のクイック・ブースト、防御面でプライマル・アーマー。この二つがネクストを他の兵器から隔絶させた根源である。

体験したことのない重圧で一瞬右の視界が真っ黒に染まつた。見えているもう半分の視界には距離が近付いていく黒いIS2が映つている。その様子を見る限りクイック・ブーストの動きを感じ出来ていないう�だ。

左腕のレーザーブレードを起動させる。通り過ぎ様に左腕を振るう。標準のレーザーブレードより長い金色の刀身が発生し、黒いIS2のロケットランチャーの砲身を綺麗に切断した。

手応えを感じ、ブースターを吹かして空中に浮遊、背後を振り向く。2機のISが3秒ほど経つてからこちらを振り向いた。後一步でオ

レの命を奪えた存在が今ではとてもみじめで弱く見える。

二機はオレの姿を見て硬直し、動きを止めた。無人機なので驚いている様は見られないが、今の奴らは人間の様子で言えば予想外の事態に激しく動搖している。酷く滑稽なその様子に引き金を引きたい衝動がこみ上げてくる。

行動が決まつたらしく、二機は新たに武器を出現させた。黒いIS1は右肩のロケットランチャーを粒子化して収納し左手に西洋騎士が持つ盾、いやシールドを出現させる。黒いIS2も左肩のロケットランチャーを収納し、左手に刀身が真っ直ぐの形をした鍔の無い実体剣を握った。

ガトリングガンと大型シールド、マシンガンと実体剣か・・・・・クリック・ブーストのスピードを一度見たというのにこの程度の武装とはな、搭載されている人工知能は唯のガラクタではないのか？。

黒いIS1がシールドを持ち上げ、ガトリングガンを撃つてきた。黒いIS2も右手のマシンガンを発砲してくる。連射速度はガトリングに及ばないだろうが充分火力がある。相手が同じISであればな。

クイック・ブーストを使って右に高速移動。放たれた弾丸はブライマル・アーマーにすら掠りもせず射線の延長にあつた壁を抉つただけだつた。一瞬でオレが消えたように見たIS2機は発砲を中止してオレに再び武器を向ける。

「・・・・・つまりんな。この程度ではまともな性能確認にすらなん・・・・・せめて武器の精度を確かめる位は耐えて見せり」

再びサイドクイック・ブーストで弾丸を回避、加速の勢いが完全に止まつていない状態から前方、黒いIS2に向かつてクイック・ブーストで接近し、右手の突撃型ライフルを連射する。右腕に連續で伝わる僅かな振動。放たれた十数発の弾丸は全て黒いIS2に直撃し、無数の火花を散らさせる。

(さすがにシールドバリアの貫通は簡単に出来ないか……それにしても全弾命中とはな、相手が避けられなかつたとはいえFCSの射撃精度はかなりのものだな……ん……?)

黒いIS2がまっすぐこっちに接近し、黒いIS1が後退して距離を取つた。

黒いIS2にライフルを10発程度連射してみると回避運動を行つたので特攻ではないらしい。こちらの射撃をほとんど避けられていなかつたがな。

エネルギーを大きく削つて接近してきた黒いIS2は左手に持つ近接用の実体剣を振り上げた。

「遠距離では勝てないと判断したか……だが生憎と……」

メインブースターを噴射して空中を前進、僅か2秒で時速500Kmに到達。これでもまだ初期加速の段階だ。

眼前には唐竹に振り下ろされた実体剣、物理兵器であるそれならプライマル・アーマーを貫通できるだろう。だが恐怖など微塵も感じない。

左腕を横薙ぎに振るつた。それに運動して光刃が一瞬輝く。黒いエ

S2の左腕は手応えを感じずに空を切る。黒いIS2の左腕は一の腕から下が無くなっていた。勢い余つてオレの右側を通り過ぎ、すぐ振り向いたが、そこに待ち構えていたのは一つの銃口。

「・・・距離にも地形にも、こいつに苦手は無い・・・」

ほぼゼロ距離での発砲。防御すら間に合わない距離で連射された弾丸は絶対防護による数秒の抵抗をぶち抜き、黒いIS2に搭乗している人形の上半身を完全に消し飛ばした。

『万能』をコンセプトに作られたノブリス・オブリー・ジューの強みは戦闘域を選ばない所にある。空中だろうが、海上だろうが、地上だろうが、遠距離だろうが、近距離だろうが、どんな状況でも、ノブリス・オブリー・ジューは万全の戦いが出来る。

黒いISが糸の切れた人形のように動きを止めた。

レーザーブレードを右に振るつて落下する前に黒いIS2を胴体から両断する。そこから落していく上半身に向かつてライフルを向け、爆発するまで連射した。

子供一人を捕らえるためにISを2機も用意した組織だ。失敗した場合は何百キロの爆薬を纏い自爆、なんてプログラムが積まれてもおかしくない。だからこそ自爆などの素振りを見せる前に完全に破壊した。

空になつたライフルのマガジンを換装。地上に転がつたガラクタから田を離し、もう1機に目を向けてみた。ちょうど狙いを定めて発砲してくる。クイック・ブーストで回避したのでまったく当たらながな。

「最後か…丁度良い、これの試射で終わりにしよう…。その盾で耐え切れるかな…？」

笑みを浮かべて背部の武装を開く。“象徴”である背中の翼が死を振り撒く”兵器”へと変貌を遂げた。

右に3門、左に3門、合わせて計6門の大出力3連装マルチレーザーキヤノン、EC-0307AB。これこそノブリス・オブリージュがその身に背負う『象徴』の真の姿であり、瞬間火力では他の機体と比較しても上位に入るノブリスの切り札。

前世でプレイしたゲームでのノブリスはこれを装備しているため積載量・出力ともに余裕が無く、決して扱いやすいとは言えない機体だった。しかしフル改造状態となつた今ならばその問題は特に深刻ではない。積載量にはまだ余裕があるし、ENもこれを展開しながらのクイック・ブーストも可能だ。

照準。向けられた兵器の脅威を知らない黒いIIS-1は愚かなことにシールドを構えて受け止める体勢を取つた。無知は罪、とはよく言つたものだな。

「消える」

発射。全ての発射口から放たれた6つの閃光が空間を灼いた。センサーなどを使わなくても肉眼で目視できるレベルまで収束された白いレーザーは黒いIISをシールド」と飲み込み、上半身を完全に蒸発させる。

レーザーの勢いはそれだけでは止まらず、黒いIISの直線状にあつ

た壁をも貫通。壁は命中した部分が黒い IIS のロケットランチャーを遙かに上回る大爆発を起こして崩壊し、レーザーは知らぬ間に時間が経つていて暗くなつた夜空に溶けていった。

オートブーストを吹かせてゅつくりと地上に着地、レーザー・キャノンを収納して翼の形に戻つたそれの破壊力に少し驚いたが、なにより気になつたのは、

「レーザーの色つでレオハルトが乗つてた時のやつなのか……オレ自身」つちの方が好きだからありがたいな」

for Answer でのレーザーの色は赤だつたのだが、どうやら4時代のレーザーの色に変更されているらしい。個人的にそのことはとても嬉しい。

(・・・てか何で for Answer になつたらレーザーの色変わつたんだ？製作事情？)

それより破壊力がいさか予想外だつた。持つてたシールドを消し飛ばすのはわかりきつていたが、まさか絶対防御すら一瞬で消し飛ばすとは思つていなかつた。いや、ネクストの武装なのだからこれぐらいは予想しておくべきだつたのか？

何にしても・・・これは有人使用の IIS に撃つたらどんでもないとになるだろうな、威力があり過ぎる。まだ各国の IIS 技術の発展は幼いから少し時が経てばシールドの強度もかなり強化されるとは思うが。

「やめよつ・・・それよりこれからどうするかだ・・・・・

敵は全て破壊した。だけど・・・・・。

「IJのまま・・・・戻るべきなのか？本当に・・・・

自衛とは言つてもこれでオレは完全に亡国企業を敵に回したことになる。プロの工作員による監視、民間人を平気で巻き込んだ爆破テロ、どれも犯罪集団などで納まる行動ではない。爆破の現場を見た時も思つたが、相手はテロリストだ。それもかなりの規模の。

そんな連中がこれで諦めるわけが無い。しかも今回の騒動でオレ自身に”火器を搭載したIS-2機を撃破できる力がある”という事実がわかつた。そうすれば予想していたように奴らの狙いはオレ自身からオレの周りの人間、兄さんや姉さん、弟に変わる。

「ダメだ・・・それだけは、ダメだ・・・やはり・・・」

オレが消えねばならないのか。それで兄さん達に危害が及ばないと
いう保証などは無い。だが、オレが傍にいるよりは安全なはずだ。

「結局・・・」うなるのか・・・・

ネクストの装甲を纏いながら苦笑する。情けない。家族の死にこれ
ほどの恐怖を抱くなど、リンクスにしてぬる過ぎる。AMS適正や
戦闘経験以前の問題だ。いや、下手をしたら一般人よりも臆病なの
かもしれないな。

だけどそれでも構わない。オレが真に望むのは楽しい小さな日常だ。
力を望んだのはそれを手に入れ、守るためにだ。例えくだらないと言
われてもそれは変わらない。

絶対に諦めない。だがどうする？どうやって兄さん達を守る？

空港の火災はもう全焼が確定したんじゃないかという段階までひどくなっている。煙の量も増してきて呼吸が少し辛くなつてくれる。まるでオレに決断を迫らせているかのようだ。

『プルルルル！…』

思考の海に沈んでいた意識が突然聞こえた電子音に引き戻される。条件反射で音の発生源の方向にライフルを構えた。しかし、そこには燃え盛る炎とあちこちに穴の空いた床しか見えない。

いや、よく見ると携帯電話が一つ落ちていた。接近して左手で拾い上げる。画面には着信者の名が”篠ノ之束”と出ている。

「篠ノ之…？…もしかして…あれ？…くそ、ボタンが押せんっ…！」

今オレはネクストの装甲を纏ついていて全長が最低2メートル以上はある。それに連れて手全体の大きさも携帯電話に出るには少しでかい。なんとか通話ボタンを押して、手の平全体で携帯電話を耳元に押し付け固定する。

「…・…もしもし」

『はいはーい！…電話越しに初めまして！…天才科学者、篠ノ之束だよー！…』

「…・…（堪える、堪える…・…）ヘラの時と違つて今は電話を切るべきじゃない）…・…』

電話越しから聞こえたヘラと雰囲気が似ている心から楽しそうな声。激しく電話を切りたくなるが、現状が現状なので必死に堪える。電話相手が相手なのだから尚更だ。

篠ノ之束。何を隠そうIISを発明した張本人である。なぜそんな人物が今このタイミングでそこら辺に落ちていた携帯電話に電話を掛けってきたのかは知らないが、必ずオレに関係のある話をするはずだ。

「…………どうも、篠ノ之束」とはあなたは筈の……

『ふ……テンション低いなあ。けどその通り、私は可愛い篠ちゃんの姉なのだよ。ちなみに大好きなちーちゃんの大親友！』

「…………IISの発明者があなたがオレに一体何の用ですか？…………今のオレの状況を全て理解している上での電話だと思いましたが…………

『うん、大体はそんな所だね。キミは現状問題で時間が無いから簡潔に用件を言うね？…………どう？私の所で働いてみない？交換条件としてキミが今悩んでる問題をどうにかしてあげるよ？…………悪いようにはしないし、保護だつてしてあげる。ある程度他の望みも叶えてあげるよ？』

どうやら本当に全てお見通しらしい。オレが今悩んでいる問題を解決してくれて、さらに保護までしてくれる。願つてもないことだ。数多のミサイル基地にハッキング出来たこの人の協力が得られれば亡国企業の後も追える。

しかしそれ故に迷う。この状況で全ての問題を解決してくれるなど、

疑うなというのが無理だ。だがこの申し出を受ける以外にオレの望みを叶える道は無い。

「……一つだけ聞かせてください……あなたがオレを保護する理由は？”この力”が田端ですか？」

『違つよ？今は単純に仕事の手伝いをしてくれる優秀な人が欲しいだけだよ。それに、キミには少し大きな貸しがあるからね……・この二つが理由だよ』

「…………わかりました。お受けします……」

『うんうん。素直でいい子だね～～～くんは……それじゃあその携帯に合流場所を示したメールを送るからそこで落ち合おう！…じゃね～～～！』

「さて……行くか。暇な時間は当分やつて来ないみたいだぞ、ノブリス」

上昇してレーザーキヤノンで大穴が開いた壁から空港の外に出る。マスクコミや一般人になるべく目撃されたくないの、連續クイック・ブーストを使って炎の光が届かない夜空に移動して空中で停止する。

バイザーの望遠機能で集まっている消防車の近くを見てみる。酸素マスクを付けている人がたくさん見え、中には到着した救急車に乗せられる人もいた。

そんな人ごみの中、即席の布団に寝かせた子供一人を静かに見守る一人の女性を見つけた。間違いなく姉さんだろう。どうにかして無事の報告をしたいがあれだけ人がたくさんいる中だ、誰にも見られないようにするのは無理だろう。

「行つてきます……姉さん、兄さん……いつか、必ず戻るから……」

背部のブースターが一瞬吸気音を響かせプライマル・アーマーの展開に使われていたコジマ粒子がブースターに圧縮された。次の瞬間、全身がクイック・ブーストの時以上の重圧を感じ、爆発的なスピードで加速した。

オーバード・ブースト。背部に搭載された個別の専用ブースターユニットにコジマ粒子を回して爆発的な加速を得る。もちろんエネルギー消費は通常のブースターより遥かに大きくなるが、発揮される速度は時速10000km以上、クイック・ブーストと併用すれば瞬間的には最大時速20000kmも可能である。

ネクストが長距離を一瞬で縮めるためによく使用しているが、初体験のオレは重圧で声にならない苦しみが漏れてくる。

「……ぐう……くつ……」

少し苦しいがクイック・ブーストを連射するより、ENの回復の時間置いて何度もオーバード・ブーストをしたほうが時間の短縮になるはずだ。

音速を超える推力を得たオレは大気の壁をぶち破りながら夜空を飛行し、目標地点に向かった。

Side Out

空港火災で起こった爆破テロにより空港は全焼して建物がほぼ倒壊。死者は確認されているだけでも数十名、遺体が見つかっていない生死不明者は数人いた。

生死不明者は一般で行方不明者と変えられ、その人間達は事実上の死亡者と無言の見解が広げられた。

その行方不明者の中に書かれていた名前の中には・・・・。

『ラーゼ・B・織斑』
ペルセルク

という名前が記されていた。

少年期終了 第5話 覚醒、破壊天使（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

やつと少年期が終わりました。少し強引な終わり方だと思いますが。作者は法律ほとんど知らないんで行方不明者云々のことを自分の願望のままに書きました。

ノブリスの機動力とかも作者はFBSフル改造を実現できなかつたので出来る限りの実験結果と予測を混ぜて書きました。時速900kmつてよく考えたらかなり速いですからね。ゲーム的な見解で。

少しネクストを強くし過ぎてしまった気がする。このままで工Sと戦えないのでネクストの武器には威力を抑えるリミッターが付くかも？

少年期が終わつてもすぐに原作に入るわけではありません。原作にはまだ少し掛かると思いますが、長く温かい日で見ていてください。

では、また次回。

第6話 天才とリンクス

S i d e O u t

某国にあるとある研究所に突如けたたましいアラートが響き渡った。

「・・・何事だ！？」

「センサーが当施設に高速で接近する反応を一つ確認しました！！・
・ミサイルじゃない、なんだこの速度は・・・最低でも速度は1
000キロ以上です！！」

「I-Sか？・・・迎撃体勢！武装ヘリに戦車・・・出せる戦力は全
て出せ！・・・この存在を知られたのなら生かして帰すわけにはいか
ん！」

「りょ、了解！！」

十数分後、研究所の周囲は無数の兵器群で埋め尽くされた。

空を無数の武装ヘリが浮遊し、陸を戦車とミサイルポッドを搭載し
た武装車両が埋め尽くしている。

その数はもはや『部隊』ではなく『軍隊』に届くレベルだろう。

現代で国家が最も期待を向けている兵器はI-Sなのだが、この研究

アイエス・アーティファクト・システムズ

所は非公式かつ人道的に違法な研究所なので警備の主力は今になつては珍しい戦車などを使つてはいる。

いかに最強の機動兵器と言われているE.Sでも軍隊規模の兵器群を1機で相手にすることなど出来はしない。それこそ相手が世界に名を刻んだ白騎士かそれと同じ位の強さを持つていなければ不可能だ。

負けはしない、必ず勝てる。

司令室の人間も警備隊の面々も心からそう思った。世代差による性能が大きくとも圧倒的な物量はそのまま力になる。これほどの戦力差を覆せるわけはない。

『目標接近・・・来ます！』

しかし、接敵から数分後・・・彼らの予想図は木つ端微塵に打ち砕かれた。やつて来た敵の力は、軍隊でも止められぬ程に強大だったのだ。

背後に爆音を引き連れ、常人では視認すら難しい速度で突っ込んできたそれは空中で加速を止め、次の瞬間その場から爆音と共に姿を消した。同時に戦車の一台が爆散した。

『え？』

警備隊の誰かが声を上げた。その瞬間に戦車砲でない発砲音が響き、3台纏つて並んでいた武装車両がミサイルを搭載したまま大爆発を

起こした。

『なんだ、どうなつてるんだ・・・敵はどこに』『おい！...後ろだ
！...』・・・え？』

上空から地上を見ていたパイロットが通信を聞いて後ろを向くと、目の前には迫る光があった。それが何なのか知ることもなく、パイロットはその光に飲み込まれ灰の人形となつた。

光はそのまま横薙ぎに動き他にもヘリを4機ほど斬り裂き、爆発させた。その爆発に気付き、警備隊の全員の視線がそこに集まる。

天使。

一瞬その敵を見た全員が同じことを考えた。しかしそく見ればそれは天使ではなく全身が装甲に覆われた機動兵器だった。

『う、撃て！...撃て！...撃ちまくれええつ！...』

警備隊の隊長らしき人間が絶叫のような声で指示を出し、思い出したように戦車部隊やヘリが榴弾やミサイルなどの発砲を開始した。

空中に浮遊する天使に迫る無数の弾幕。しかしその全てが着弾する前に天使は爆音を鳴らし、慣性の法則を無視した高機動で弾幕を潛り抜けた。

目標を追いかねたヘリのミサイルは地上の戦車隊のど真ん中に着弾、数十台の戦車が爆発した。

『てめえら何やつてんだ！...こつちは味方だぞ！...』

『やりたくてやつたんじゃない！！奴が全て回避したんだ！』

戦車隊の人間が無線に怒鳴り、ヘリのパイロットが怒鳴り返す。そうしている間に天使は地上に着地、背部のブースターを吹かして統率がボロボロになつた戦車隊に迫る。

そしてお返しとばかりに始まつた天使の攻撃。

天使の左腕から発生した長い光刃が戦車隊を薙ぎ払い、右手に握られたライフルが水平に放たれ武装車両に穴を開けて爆発。巻き起こつた紅蓮の炎が近くの戦車を飲み込み、誘爆した。

『ぐ、くそおおおー！』

苦し紛れに放たれた戦車の榴弾が天使の背に直撃した。爆煙が巻き起こり、次第に晴れていく。そこには傷一つ付かず悠然と立つてゐる天使。戦車の搭乗者は氣付いていないがその周辺には緑色の膜のような物があつた。

背に榴弾の直撃を受けて無傷でいる天使の姿が一瞬幻ではないかと戦車の搭乗者は思うが、それが現実と思い知る前に搭乗者は天使の放つたライフルによつて肉塊となり絶命した。

「なんだ・・・なんだあれは！？」

司令室にいた指揮官が怒声を上げた。他の人間は外で交戦している

部隊からの通信を受けていて指揮官の声は聞こえていない。

指揮官が見詰める先には無数のモニター。そこには超スピードで移動し両手の武器を使って外の部隊を全滅させていく天使。

「あれは本当にエラか！？？？ あんな滅茶苦茶なものが！！」

誰に対してもなく司令官は叫ぶ。そうしたくなるもなるほどにあの天使の力は圧倒的だった。

物量の差をたつた1機だけで覆すなど戦術面から見たらバグ以外の何でもない。そもそもあれは本当にISなのだろうか。指揮官もISの性能や機動を見たことがあったが、モニターに移る天使はISそれすら凌駕するものに見える。

「！」航空部隊、全滅・・・戦車隊の残存戦力およそ12%・・・もう持ちません・・・」

モニターには空中へ上昇する天使が映る。一定の高度まで上昇した天使は背中の機械仕掛けの翼を前方に展開、翼の先端が僅かに残つた戦車隊に向けられた。

翼の先端から放たれた6つの光。それは地面に着弾し、大爆発を起こして僅かに残っていた戦車隊を全て消し飛ばした。

「ば、馬鹿な・・・たつた1機があれほどの出力を持つた光学兵器を・・・」

「ど」までふざけているのだ・・・化け物が！――

天使は空中に浮遊したまま翼の形をしたレーザーキヤノンの砲口を基地に向ける。それを見て司令室の全員が悲鳴を上げて逃げようとしたが、出口に辿り着く前に全員が白い爆発に飲み込まれた。

Side ラーゼ

『敵勢力の全滅と司令部の破壊を確認。ミッションコンプリート』

バイザーに表示された文字と施設にレーザーキヤノンを撃ち込んだことで出来た巨大な大穴を見て展開していたレーザーキヤノンを収納、右手のライフルをリロードして地上に着地する。

ヘルメットを外して頭を左右に振るうと銀髪が暴れて下に沈む。ヘルメットを外したと言つてもAMSのプラグがあるので頭部に被っていたヘルメットが変形し持ち上がりつて垂直になつただけだが。

周辺を見渡していると通信が入ってきた。AMSを通して通信を開くとバイザーにスクリーンが表示され、そこに映つたのはアリスが着ているような青と白のワンピースを着て、頭にウサミニミを装着している女性。この人こそEISの生みの親、篠ノ之束だ。

『やつほー！終わったみたいだね、らーくん。どうだつた？』

「情報通り真っ黒、アタリでした。迎撃に出てきた戦力が異常でしたけど・・・一応迎撃部隊と司令室は破壊しましたから後始末はお願いします」

『それは任せといて・・・けど、らーくん個人にはハズレだったみたいだね』

「ですね・・・けど予想はしましたから」

空港火災の時に黒いEISの襲撃を受けたあの日から2年ほど時が過ぎた。

指定されたポイントで束さんと合流したオレはそのまま束さんと一緒に行方をくらませる日々を送ることになった。あの事故で行方不明とされたオレには問題無かつたのだが、籌を含めた束さんの家族は政府の保護を受けて引っ越してしまつたらしい。

オレと束さんは追つてくる各国の追跡から逃れ続けながら（余裕で）予想より楽しく暮らし、たまにこうして人道的に違法な研究を行つている施設を潰している。

施設を潰す際の戦力はオレだけだが、ネクストの前でこのような連中はゴミ同然だし、オレ自身もこういった下種な研究は大嫌いなので苦でもない。

ちなみに束さんの言つたオレ個人のハズレとはAMSの技術を有している研究施設ではなかつたという意味。

本当にこの世界にアスピナ機関のようなものがあるなら間違いなくネクストとリンクスがいる。漠然とだが、恐らくオレの目標にはなるべく多くのリンクスの協力が必要になる。当面のオレの目標はまずそのリンクスと接触することだ。

『あ、そうだ・・・らいくん、新しいセンサーはどうな感じだった

？』

「完璧ですね・・・照準の誤差も最初よりかなりマシになつたし、

クイック・ブーストにもしっかりと付いて来てくれます

機動性、火力、どれも現代の兵器を遙かに上回る性能を持つたネクストだが、当然ISに劣っている面もある。

センサーや通信機などの内装系だ。ネクストの搭載するセンサーは数キロ先を見渡せるほどの性能を持つていないし、通信に相手の顔は映らない。

一度束さんに相談した結果、解決法として出たのがISのハイパーセンサーの機能の一部をネクストのセンサーに加えること。今回の戦闘で実験を行つたのだが、成果は最高値、文句無しの出来だった。

『そつか、なら良かつたよ···ノブリスには既に搭載してあるから良いとして、あと何機残ってるんだっけ?』

「オルレアとシユーブリスの2機ですね···けどまだ増える予定ですから、すみませんが3つお願いします。戻つたら手伝いますんで」

『この位束さんにとっては楽勝だから問題なしだよ···だからゆっくり帰つてきて大丈夫だよ、代わりにおいしいもの作つてねあと帰つてきたら製造法も教えてあげるよ』

「ははは、わかりました···それじゃリクエストは帰つてから訊きますから、今からそつちに戻ります」

『うん···じゃねえ』

通信が切れ、原形を失つた研究所に静寂が落ちる。目的地までの進

路と距離を再確認、空中に上昇してオーバード・ブーストを作動する。

数秒で音速を突破し、オレは研究所を離脱した。

数時間後、あの研究所は何処からか飛来してきたミサイル群により完全に消滅した。

第6話 天才とリンクス（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

現在、ノブリスとオルレアは第二形態サードフェイズ、シューブリスは第一形態セカンドフェイズで

では、また次回。

第7話 接触（前書き）

少し遅くなりました。

では、どうぞ。

第7話 接触

Side ラーゼ

束さんが拾つた情報を頼りに現在オレはノブリスに乗つて非公式の兵器輸送部隊の場所を目指している。

大まかなプランとしてはオレが輸送部隊に突入して兵器を破壊、その際に対抗戦力がいた場合は無理に相手をせず兵器の破壊を最優先にして終了と同時に離脱する。その後は束さんが輸送の情報を世界に流してグループはお繩に付く、こんな感じである。

実を言えば対抗戦力を含めても皆殺しにするのは簡単だし、その方が楽だ。だが下種共の違法研究所ならともかく兵器を非公式で輸送する犯罪者には大した殺意は湧かない。それに、敵だからといって全て殺してしまったら前世のオレと同じだ。

「・・・そろそろか・・・ん？」

目標を直視できる距離まで接近したのだが、周りには何も見当たらず、レーダーにも反応が無い。ちなみに今の場所は道路も作られていない荒野だ。

（束さんが偽情報を拾つたのか・・・こっちの襲撃が気付かれたのか）

一度束さんに連絡を入れようと思ったが、レーダーが高速で接近する熱源を一つ捉えた。感知された方向をズームしてみると、遠くの荒野に一つの光が見えた。

それはIISではなかつた。はつきりとした姿すら見えないが確信できる。接近する二つの光が背後から零れ落としている緑色の粒子によつて。

「IJの速度とあの粒子・・・・まさか・・・」

光が近付き、バイザーに搭載されているセンサーが二つの光の詳細データを表示した。

『接近速度と』『ゴジマ粒子』の反応からアーマードコア・ネクストと断定・・・・・敵ネクストの機体構成と武装を照合開始・・・・・完了。独立傭兵イエーイの搭乗機、エメラルドラクーン、同機体の共同機、ウイスの搭乗機、スカーレットフォックスと判明』

光の正体・・・・一機のネクストが少し離れた場所に着陸した。

一機は全身緑色の装甲。右手にスナイパーライフル、050ANSRと左手にBFF製の標準型ライフル、047ANNSRを持ち、両の背中には標準型ミサイル、MUSSEL SHELL、肩には連動発射が可能な背中と同名のミサイル、MUSSEL SHELLを搭載している。

もう一機は全身赤色の装甲と逆間接の脚。右の背中には散布型ミサイルのMR-0200、左の背中にはグレネードキヤノン、GRB-TRVERSを搭載、両腕は長いマガジンを装着したマシンガンと一緒にEKLAKH-ARMS。

間違いない。搭乗者までは分からぬが、二機ともオレが前世で見たエメラルドラクーンとスカーレットフォックスにそっくりだ。

だがまったく同じといつわけでもなく、一機のヘッドパーツがオレと同じく口元をバイザーで覆つて口元が見えるような形をしている。スカーレットフォックスの腕部も形が少し違い、肘先全てがマシンガンになっているのではなく手首の先がマシンガンになっているような形だ。というか、どうやってあの逆間接状態を作ってるんだ？あんな姿勢を人間がやつたら間違いなく両足が使い物にならなくななると思うが……。

突然通信が入つてくる。束さんかと思ったが通信先の相手の顔が表示されず、画面は真っ黒のモニターに『SOUND ONLY』と記されている。

『……そつちのネクスト、聞こえてるか？聞こえたら応答してくれ』

若い、少なくとも成人男性ではない声が聞こえてきた。前世で少し訊いたスカーレットフォックスの搭乗者、ウィスの声に似ている気がする。まさか機体だけでなくリンクスまで同じなのか？

ネクストとは確実にノブリストのことを言つているのだろう。今の所相手に交戦の意思是見えないが、いつでも戦闘が行えるように警戒し音声のみで通信に応じる。

「聞こえてる……オレのこと知つててるのか？」

『知らないのか？……「裏」の方じゃ、あんたはそれなりに有名なんだぜ。最近じゃあんたのことを恐れてテロリスト共も大人しくしてる』

知らぬ間にオレも少しばか有名になつていたらしい。まさかテロリストの抑止力にまでなつっていたとは。

「それで……」ひぢらに「何か用か？」

『おいおいそんなに警戒すんなよ。せっかく広い世界で同類同士が再会したんだ、少しばか喜ばうぜ、最も、お前はオレ達のことを覚えていないみたいだが……なあ、イエーイ』

『そうだな』

「……その言い方から察して、お前達はAMSの開発機関の場所を知つているらしいな、ついでに昔のオレのこととも」

これはチャンスだ。こいつらから機関と他のリンクスの情報を手に入れられるかもしねりない。

『やつぱりお前、あの人形みたいなやつだつたか……どうだい？あんたと俺達、互いが欲しい情報を交換しないか？あんたもオレ達に聞くことがあるし、こっちもあんたに訊きたいことがある、ギブアンドテイクだ。……おつとその前に自己紹介だな。このネクスト、スカーレットフォックスのリンクス、ウイスだ』

『エメラルドラクーンのリンクス、イエーイだ』

「……ラーゼだ、ラーゼ……ベルセルク。この機体の名はノブリス・オブリージュ」

一瞬ラーゼ・B・織斑と名乗りそうになつたが、今はまだその名を

名乗るわけにはいかない。

「・・・・本題の前に聞きたいことがある。この辺りを兵器輸送車が通る情報があつたんだが、お前達が仕掛けた偽情報か？・・・それに、オレがここに現れることがどうしてわかつた」

『その情報は本物だ。あなたの言つ兵器の輸送をしてた連中なら俺等が先にやつちまつたよ・・・俺達が飛んできた方に少し行つたら残骸が転がってるぜ？・・・それに、現れることがわかつてたわけじゃない、俺達なりにあなたの行き先を予想して見ただけさ』

『なるほど、オレの襲撃予定地点より先にこいつらが目標を襲撃したわけか。しかも言葉を聞く限り生存者もいないだろう。ライフルを握る手に少し力が入るが殺氣は一切外に漏らさない。

『次はこっちの質問だ。あなたはネクストを使って何度も違法施設を襲撃してきた、なら当然ネクストを整備する施設を持つているよな？』

『・・・・確かにネクストを整備するための手段をオレは持つているが・・・あれば施設というより機材の方がしつくり来るな・・・で？それがどうした』

ネクストも兵器である以上は定期的な整備が必要だ。だがリンクスのAMSを介して機体の情報を保存しているので整備のためには当然専用の施設が必要になる。

その為、ヘラは空港火災から少しの日々が過ぎた時に専用の整備資材を送ってきた。あの時はびっくりした、何しろ夜中に光と共に現れたのだから。

送られたきた資材は何の変哲も無いノートパソコン一つだけだったのだが、そのパソコンに取り付けられていた接続端子をAMSプラグに接続することと、パソコン内に機体の情報を送つてそのまま整備を行うことが出来た。

あのノートパソコンはヘラが手軽な形にしただけで、内臓スペックは恐らくネクストの整備ハンガー数個分に匹敵する。

おまけに、仕組みはわからないが弾薬の備蓄が無限に等しい位あるようで弾薬費の心配も無用、これで雷電やヴォーロークを遼機に付ければ戦争が出来るんじゃないか？

『さうか・・・ビリヤリ俺達はかなりラッキーみたいだな・・・

イエーイ

『問題無い・・・始めよ!』

スカーレットフォックスが前進し、エメラルドラクーンが後方に距離を取り始めた。エメラルドラクーンが右手のスナイパーライフルと左手の標準型ライフル、スカーレットフォックスが両腕のマシンガンを構える。遅れて、耳元にロックオンを知らせるアラームが鳴り響いた。

「・・・一応訊いておくが、何の真似だ？」

『俺達は研究所を脱出できた・・・だがネクストを整備する施設がない俺達はいずれ力を失う、だからお前から奪うのさ・・・寄越せよ、抵抗しなければ無傷で帰してやる』

「なるほど……最初から狙いはそれか……」

『俺達はこんな所で終わらない。俺達はもっと上に行くんだ……。あんたには踏み台になつてもううよ、悪く思つなよ……まさか2対1で勝てるとは思つてないよな?』』

『悪いな』

二機のネクストが臨戦態勢に移り、機体の表面に緑色の膜、プライマルアーマーが展開された。大気中にコジマ粒子が拡散するが、地面の植物には何の変化も無い。オレと同じで無害な粒子に変換されているのだろう。

(「コジマ汚染の心配は無し、周辺に人影は一切無い……オールクリアだな……これなら……）

「心置きなくやれそうだ」

ジェネレーターの出力が上昇を初め、70%、85%、100%に到達、プライマルアーマーを展開して空中にゅうくじと浮遊する。同時にAMSに指示を出して通信を繋げる。

『・・・・・あれ、どうしたの? らーくんの方から通信なんて珍しいね、どうかしたの?』

「束さん、今からの戦闘を開始から終了まで全方位で記録してもらいたいんですけど」

『ん? 別に構わないけど……らーくん、なんか楽しそうだねえ……。・・・録画は任せといて!』

束さんが心から嬉しそうな笑顔を浮かべ、通信を閉じた。楽しい・・・
・そうか、オレは楽しいのか。

初のネクスト戦で、相手は連携が取れる一機、確かに状況は不利かもしれない。

だが、それがどうした？ ヘラはオレを最高のリンクスと言ったのだ。
ならばやれる筈だ。最高のリンクスとその能力に見合ひふさわしい
ネクストがあれば・・・こいつら程度、倒せるはずだ。

『おいおい、まさか戦つつもりか？』

『無謀だな』

「能書きはいらん・・・同時にかかるて来い、2対1で掛からな
きや勝てないんだろ？」

ウイスとイヒーイの笑い声が止まり、一人から怒気が溢れ出す。こ
の程度の挑発に乗るとは片腹痛い。

三機のネクストがそれぞれの武器を構える。向けられる砲口の数は
当然オレの方が多い。

「ああ・・・・始めようか」

スカーレットフォックスとノブリスがオーバードブーストを同時に
起動。音速を超えて接近する一機を見ながらエメラルドラクーンが
スナイパーライフルでノブリスを狙う。

ノブリスが突撃型ライフル、フォックスが両腕のマシンガンを互いの敵に向ける。

今此処に、破壊天使の断罪が開始された。

第7話 接触（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

やつとネクストを出せました。2対1がやりたくてタッグで搭乗するネクストを出しました。赤い狐と緑の狸です。

一応タッグで登場するネクストは他にもいたのですが、ウイン・Dとロイは強すぎる気がするし、ド・スピシャニアは場所が似合わない、P.Q.とブッシュ・ズ・ガンは・・・・ねえ？

ちなみに逆間接のネクストを開拓しているリンクスは、搭乗者の足を膝立ち状態で固定して、AMSを使って足を動かしている設定です。

タンク型の場合は足を長座体前屈の体勢にする感じです。

次回は2対1の戦いです。

では、また次回。

第8話 2対1（前書き）

羽屯 十一様から感想をいただきました。ありがとうございますー。

PVが10万を越えました。皆さんありがとうございますー！

今回は初のネクスト戦で2対1。相手は赤い狐と緑の狸。

では、どうぞ。

Side Out

音速を超える速度でノブリスとスカーレットフォックスが互いに接近した。だが、スカーレットフォックスの後方には遠距離主体のミサイル兵器やスナイパーライフルを持つエメラルドラクーンがいる。

互いに射撃武器を構えながら接近する状況で先手を取ったのはスカルレットフォックスだつた。両腕に装着されているマシンガンが凄まじい連射速度で銃弾を吐き出す。

ガトリングガンやマシンガンのように高い連射速度を持つ兵器はネクストのプライマルアーマーを急速に減衰させることが出来る。

プライマルアーマーが無くなればネクスト本体の装甲など、タンク型でもない限りノーマルと大した差は無いので即座に大きな被弾を負ってしまう。しかも今はオーバーブーストを使っているのでプライマルアーマーが少し減衰している。

だがノブリス、ラーゼは微塵も脅威を感じていない。

マシンガンから放たれた弾が到達する前に、ノブリスがスカーレットフォックス（以後フォックス）の視界から突如消えた。

「…なに！？」

「後ろだ！」

エメラルドラクーン（以後ラクーン）からの通信を受けてフォオックスがクイックターンで後方へ旋回。すると、先程まで自分の正面にいたはずのノブリスがオーバーブーストで後退するラクーンに距離を詰めている。

先程ノブリスはオーバーブーストを発動したまま連續クイックブーストでフォオックスの側面を通り抜けてそのままラクーンの方へ向かつた。接近主体のフォオックスより先に遠距離主体のラクーンを叩くことにしたのだ。

「俺をシカトかよ・・・舐めた真似しやがつて・・・！」

フォオックスもオーバーブーストを使ってノブリスを追うが、少し距離が遠く、速度でも負けているせいで距離が縮まらない。

フォオックスは両腕のマシンガンを降ろし、右背中の散布型ミサイルMR-0200と左背中のグレネードキャノンGRB-TRVER-Sを起動させ、グレネードを撃つた。

ノブリスは発砲音を聞いて左にクイックブースト、グレネードの爆発と爆風を完全に回避した。だがそこに追撃として散布型ミサイルが襲い掛かる。

ノブリスはオーバーブーストを解除してクイックターン、地面に落下しながら右手のライフルを連射してミサイルを撃ち落とす。だが迎撃しきれなかつたミサイルがノブリスのプライマルアーマーと周辺に着弾し土煙が霧散、ノブリスの足が止まる。

「イエーイ！」

隙を逃さずフォックスがグレネード、ラクーンが背中と肩の標準型ミサイルMUSSEL SHELLを放つて追撃する。ノブリスは一瞬で爆炎に覆われた。

「終わつたか……悪くない動きだったが、あんな重いもん背負つてりや遅くもなる」

「そうだな」

フォックスとラクーンが勝利を確信して爆炎に近付く。散布型を含めたミサイル数十発とグレネードの直撃、普通に考えればプライマルアーマーが消滅し本体に大きなダメージを負っているはずだ。

そう、普通なら。

「…………つ！イヒーイ！」

「あ？…じ…つ！？」

イエーイの声を聞いて振り向いたウイスの目の前にはレーザーブレードを振り抜く寸前のノブリスがいた。そのまま直撃すればプライマルアーマーを貫通してフォックスの装甲を焼き切るだろう。

「なつ！…・・・くつ！」

激しく動搖しながらフォックスは逆間接の有する高い跳躍力を使ってレーザーブレードを寸前で回避した。プライマルアーマーが切り裂かれたが本体に損傷は無い。

ノブリスは即座にクイックターンで反転、フォックスの背中を狙つて右手のライフルを連射する。

精確な標準で放たれたライフル弾はプライマルアーマーを失ったフォックスの装甲を確実に削る。だがそれ以上の攻撃を許さず、ランがミサイルを放つてノブリスを引き離す。

ノブリスは即座にクイックブーストで離脱するが、ライフル弾はフォックスのグレネードを破壊した。フォックスは即座にグレネードをパージして離脱、誘爆の被害をギリギリ逃れる。

「ちくしょう・・・どうなってんだ。確かにさつき・・・」

「・・・・」

「少し危険だつたが・・・想像以上の出来だな」

動搖を隠せない二人とは対照的にラーゼは物静かな様子でノブリスの装甲を見ている。純白の輝きを放つ装甲には一見大きな損傷は無いように見えるが、良く見ると左肩の部分に熱で焼けたような黒い損傷がある。

あれだけの爆発を受けての損傷はそれだけだった。

ラーゼが所有している全てのネクストはヘラの手によつてFBSメモリ改造が全項目フル改造状態になつていて。その項目の中にはプライマルアーマーの防御力を高める整波性能も含まれる。頭部から脚部までに至る全てが、だ。

よつてノブリスのプライマルアーマーの防御力は基本状態の数倍、

タンク型の装甲にも匹敵するほど堅牢になっている。

先程ラーゼは性能試験としてわざとミサイル群とグレネードを受けたのだ。下手をすればプライマルアーマーが剥がされ装甲が吹き飛んでいたというのに。

「それじゃ・・・本番と行こつか

ライフルをリロードしてオーバーブーストを起動。ノブリスがフォックスとラクーンに急接近する。

近付けまいとフォックスは両腕のマシンガン、ラクーンはスナイパー・ライフルと標準型ライフルを連射して弾幕を張る。

だがノブリスはオーバーブーストを起動させた状態で連續クイックブーストを使用、最低限の被弾（被弾といつても全てプライマルアーマーに止められたのでほぼ無傷）で弾幕を突破した。

突撃型ライフルが放たれるが、フォックスは上に跳躍、ラクーンはクイックブーストで回避する。そのまま一機の間を通り過ぎるのかと思われたが、ノブリスはオーバーブーストを停止させインターバルを置かずにクイックブーストでラクーンを追撃する。

ラクーンは左手のライフルを連射するが、全て堅牢なプライマルアーマーに阻まれる。

急接近したノブリスが通り過ぎ様にレーザーブレードを一閃、ラクーンはクイックブーストを使ってギリギリ後方へ回避したがスナイパー・ライフルの銃身が両断された。

ラクーンの隣を通過したノブリスは体を右に反転、ラクーンの背後を取つて再びレーザーブレードを振るう。ラクーンも回避を急いだが背中にある左右両方のミサイルを両断される。それよりミサイルポッドが爆発、肩部分のミサイルも巻き込みラクーンが大爆発に包まれた。

「イエーイー！」

爆煙が晴れると、その場に膝を着き、緑色の装甲が数箇所吹き飛んでいるラクーンがいた。だがノブリスのセンサーが生体反応を捕捉しているので搭乗者のイエーイはまだ生きているのだろう。

（至近距離であれだけの爆発を受けたのに搭乗者がまだ生きている。・・・何にせよ好都合か、これなら手元が狂つても少しは大丈夫そうだ）

エネルギーを回復させるためにノブリスは地上に着地、メインブースターを吹かせてフォックスに接近する。強力なKP出力によつてエネルギーが瞬く間に回復し、2、3秒過ぎた時には既に3分の2ほどが元に戻つていた。

突然噴射音が聞こえ、地上を移動するノブリスの前方からミサイル群が降り注ぐ。

ノブリスは即座に回避行動を取るがクイックブーストを使つていないのでミサイルが次々と着弾した。プライマルアーマーによつてダメージはないが、直撃を受けたので濃度が少なからず減衰する。

フォックスが追撃に両腕のマシンガンを連射、減衰したプライマルアーマーを削り切ろうと接近する。

「もうつた！」

「甘いな」

だがノブリスはエネルギーの回復を終えクイックブーストで離脱、空中から接近するフォックスへと向かつて距離を詰める。

至近距離ではミサイルを使えないで両腕のマシンガンが向けられるが、ノブリスはフォックスの左肩をライフルの銃身で殴りつけ強引に体勢を崩す。ノブリスは空中で体勢を崩したフォックスの腹部にクイックブーストの加速を加えた右足で蹴りを打ち込む。

「なっ！・・・馬鹿な・・・」

ネクストの基本に存在しない攻撃の驚きと物理的衝撃を受けてフォックスは空中に落下。姿勢制御のためにオートブーストがフル稼働するが、クイックブーストの急加速を加えた蹴りの力を相殺しきれず背中から地面に墜落する。

「ぐつ！・・・く・・・そ・・・」

「チエックメイトだ」

何とか機体を起こそうとするが、フォックスの頭部に銃口が突き付けられた。目の前には両背中のマルチレーザーキヤノン6門と突撃型ライフルを構えるノブリス。その姿はまるで断罪の裁きを下そうとする天使のようだ。

本来、腕と背中の武装を同時に使用するには多大な精神負荷を伴う

が、AMS適正が化け物レベルと言えるラーゼは汗一つ搔かずにそれをこなしている。

至近距離でライフルと6門のレーザーキヤノンを避けきるなど絶対に不可能。ラーゼが発射命令を下せばフォックスはレーザーキヤノンで溶解し、ライフル弾の連射で粉々になる。

ラクーンのように搭乗者の肉体は守られるかも知れないが、ネクストが損傷した時に起こるAMSからのフイードバックの痛みに精神が耐えられるかはわからない。

「2対1でこんな圧倒的に……」「冗談だろ……」

ウイスが悪夢を否定するよつて呟く。

2対1で、しかもラーゼはネクスト戦はこれが初めて、勝率が完全にウイスとイエーイに傾いていたこの状況でラーゼはノブリスの損傷を軽微に抑えて勝利した。今のラーゼの実力ならカラードのオーダーマッチでランク1桁まで辿り着くことも可能だろう。

「殺しはせん……聞きたいこともあるいからな」

ラーゼの言葉で抵抗をやめてフォックスは力を抜いて背中から地面に倒れる。交戦の意思を無くしたらしい。頭部パーツが変形しトイイが素顔を晒した。明らかに今のラーゼよりは年上に見える青年だ。

ノブリスもその様子を見てマルチレーザーキヤノンを収納、同じようすに素顔を晒す。

「予想通り……やつぱりお前か……年下に負けるとはな……」

「単純に相手が悪かった、それだけだ……さて、お前らのおかげで聞けなかつたが、質問に答えてもらおう」

「二つ目は、AMTSの技術を研究してゐる機関の場所だい？」

まずラーゼが知りたい情報はAMTSの技術をこの世界に広めた根源だ。それが分かればこの世界でどういつ流れでアーマードコア・ネクストが生まれたのかも分かる。

「機関つて、アスピナのことか？場所の暗号がまだこの機体に残つてたはずだ、送るから手を出せ」

「どこに行つてもアスピナはアスピナつてことか……束さん、お願いします」

『お任せなさい！』

フォックスがノブリスの手に触れ、転送されてきたデータを束が回収し解析を始める。

「二つ目だ、そこにまだリンクスとネクストはいるのか？」

これが次にラーゼの知りたい情報。ラーゼの目的の為にはまず他のリンクスの協力が必要なのだ。

「俺が知ってる限りで最高クラスの実力者が確実に10人以上いる。ついでに言ひならあの研究所にいるリンクス達には反乱を防ぐためにネクストの展開の妨害と電気ショックを起こす首輪が付けられたんだ。トップクラスの実力を持つ奴らは特に監視の目が強かつた。んで、オレとイエーイはそいつらに監視の目が引き付けられる時に首輪を外して他のリンクス達に混じって施設を脱走したってわけだ。たぶん今から2年くらい前だな」

「・・・・最後だ、お前とあっちの相棒、これからどうする?」

「俺はともかく、イエーイの機体は完全に『臨終』だ・・・・とりあえずは何処かの街を目指してから考えねえとな」

「それに関しても聞きたいんだが、何での爆発で搭乗者が生きているんだ?ネクストの機能の一部なのか?」

「ラーゼとウイスの視線の先には膝を着いたまま真っ黒の煙を纏っているラクーン。戦闘なので仕方ないと想えるが、上半身の装甲が半分近くが吹き飛んでいる様子を見るとラーゼも少し罪悪感を感じる。」

「機能の一部つていうよりあつて当たり前のものだな。ISに絶対防御があるみたいにネクストにもリンクスにも搭乗者の命を守る保護システムがあるんだよ。まあ酷い損害を受けた場合の最終手段に近いがな」

「叩きのめした後にお詫びつてのもおかしいが・・・オレ達の所に来るか?寝床と飯もあるし、お彼らの機体も修理と整備が出来る。本当に何者だ?ISの開発者の篠ノ之 束と繋がりがあつてトップ

クラスの操縦技術と整備施設まで持つてゐるなんて充分異常だろ・・・
そもそもさつきの情報を聞いて何するつもりなんだ？」

「ああ、言つてなかつたか・・・なに、単純だ」

ラーゼの顔が自然と笑みを浮かべる。その表情は何かの楽しみを必
死に堪える子供のようだった。

「リンクス達を助け、ある企業を潰す・・・んで、いつか名前と
幸せを取り戻す」

第8話 2対1（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

チート機体の前では2対1の戦力差も無力でした。もちろんリンクスの方もチートだからこそ出来たのですが。

ふと思つたのですが、整波性能を全部フル改造にしてアサルトアーマーやアサルトキヤノンを直撃させたら威力が恐ろしいことになるのではないか。雷電一撃で倒せたりして。

では、また次回。

第9話 アスピナ機関、襲撃（前書き）

更新遅くなりました。

では、どうぞ。

第9話 アスピナ機関、襲撃

S i d e O u t

中東の砂漠地帯に大きな研究施設がある。

その機関の総称はアスピナ機関。現在はどの国家にも秘密裏にアーマードコア・ネクストとAMSの被研体であるリンクスの実戦データの収集し、新たなリンクスを作り上げている。

どの国家にも秘密裏に動いている以上、この施設のステルス性能は超強力。

だがその施設は現在、業火と爆煙が吹き荒れ、砲弾やミサイルが飛び交っていた。

それらが向かう先には3機のネクスト。赤、緑、純白の色をした3機は反則的な急加速と防御を駆使して襲い掛かる敵を急速に減らしていく。

ここアスピナ機関はネクストとリンクスを開発しているだけあって他とは違う防衛戦力を有している。

その戦力の一つは逆間接に橙円形のコアと大型の機関砲やライフルを搭載した兵器、マッスルトレーサー、通称”MT”。もう一つはネクストよりもごつく見える装甲にマシンガンやミサイルとそれぞれ様々な武装を搭載した二足歩行型機動兵器、アーマード・コア。ネクストが出現した今では”ノーマル”と呼ばれている。

この一つはE-Sに及ばないが、旧世代の兵器よりも高い性能を有している。

その兵器がかなりの数で猛攻撃を浴びせているのにネクスト3機の進行速度はまったく衰えない。

プライマルアーマーによる堅牢な防御とクイックブーストの慣性の法則を無視した急加速、これらを有しているネクストにはノーマルやMTなど、余程高い戦略や連携を使わない限りは脅威にならない。

そして、そのネクストを駆るコンクス達は・・・・・。

「つおつ！？あぶねつ！・・・・くそ、2年間戦車とかへりしか相手にしてなかつたから腕鈍つた！おいイヒーイ、ちゃんとミサイルで弾幕張れよ！」

「その前にミサイルを撃つてくるノーマルをちゃんと沈めろ・・・・お前が避けているだけのせいでプライマルアーマーがやばいんだ・・・・むつ！？くそ、当たったか

「おい、お前ら　　自分から付いてきてなんで苦戦してんだよ・・・・頼むぞ？中に入るより先にノーマルとMTにやられたなんて笑い話にもならん」

3機の内の2機は一杯一杯で互いに文句をぶつけていた。だが残つた1人は余裕を思われる口調で2機の様子に呆れている。

どこか緊張感を感じさせない会話を続けている中でも、3機に襲い掛かる砲弾やミサイル群は進行を食い止めようと勢いを緩めない。

Side ラーゼ

2年ぶりに戦つたノーマルとMTに苦戦しているウイストイヒーイに呆れながらも、オレは突撃型のライフルを連射して固まっていたMT5機を蜂の巣にして、正面からマシンガンを連射しながら接近してきたノーマルを通り過ぎ様にレーザーブレードで両断する。

爆散したMTやノーマルからは悲鳴も血飛沫も上がらない。少し前に気付いたが、どうやら無人機を自動操縦で動かしているらしい。便利なものだ。

しかもこのノーマル共、ネクストと同じようにサイズが小さくなっている。MTも同じだ。サイズで圧倒されないのならネクストの勝利は揺るがない。

ウイス、イエーイの二人と交戦してから数日後、オレは束さんが解析してくれたアスピナ機関の施設へ向かうことにした。

そんな時にウイスとイエーイが自分達も付いて行くと言つてきた。確かにスカーレットフォックスとエメラルドラクーンは修理を終えて完全に元通りとなつていて、この二人がわざわざ危険地帯に付いてくる理由はない。

そう言つたのだが二人は”助けてもらつた礼だ”と言つて引き下がらなかつた。結果、今遼機として一緒にいるのだが・・・はつきり言あつ。じいつ、使えねえ。

二人の機体は修理を行つたので調子は言葉通り”万全”。オレと交戦した時に溜まっていた機体の負荷も全て取り除いたので、今なら

あの時より数段良い動きが出来るはずだ。

だが今の一人は万全となつた機体でなんとノーマやＭＴに苦戦してやがる。どうやら理由は2年間通常の兵器群としか戦つていなかつたため、単純に腕が鈍つたから。敵の強さではなく、多数を同時に相手する戦闘の仕方を忘れているのだ。

だが、それでも二人はリンクス、本当に少しづつだが勘を取り戻して動きの無駄を減らしている。

「しかし数が多いな・・・」

すでにかなりの数を沈めたはずなのだが敵の勢いはまったく衰えない。このままだと相手の全滅よりこちらの弾切れが先になるだろ？

ウイスとイエーイの話では、この施設は正面ゲートから進むと徐々に地下へ降りていく仕組みらしい。正面ゲートは肉眼でも目視できるが、ノーマルとＭＴが集まつて守りを固めている。

あれを突破して中に侵入すれば自動制御で動いているやつらは施設内で迂闊に発砲できないはずだ。

「ウイス、イエーイ・・・道を作る、オーバーブーストの準備をしや」

返答を聞くより先に両背中のマルチレーザーキヤノンを展開。敵ではなく閉じられているゲートに照準を合わせて発射する。

6発の高出力レーザーが同時に放たれ、進路上にいたノーマル及びＭＴ群を溶解させながらゲートに命中。大爆発を起こして隔壁が吹

き飛び、ゲートまで道が出来た。

即座にレーザーキャノンを収納し、同時にオーバーブーストを起動。音速をぶつちきってゲートの中に突入した。数秒後にはオックスとラクーンも辿り着く。

「お前ら、残弾はどれくらい残ってる」

「全部まとめて6割つてここだな イエーイ、お前は？」

「ミサイルを撃ち過ぎたな 4割と6部、といつといひだ」

ミサイルで弾幕を張っていたイエーイは空中からノーマルを叩いていたウイスより自然と弾薬を多く消費していた。まあいな、半分は勘だがこの先はおそらくネクストを相手にする。しかもトップクラスの実力者をだ。今のままでは一人とも弾が完全に足りない。

「……仕方ねえ、ラーゼ、お前はこのまま先に進め 僕達はここに残つてノーマル共を引き付け」

「……限界が来ればすぐに離脱する。心配は無用だ」

「……わかった。けど自分から陽動を引き受けたんだ、最低でも3時間は引き付ける。束さん、一人のオペレートを頼みます。じやあな」

『任されたよおーーー!』

「おい! 陽動に課題押し付けるつて、お前鬼か! ? ? ? つて、おい! 」

ウイスの非難を無視して先に進む。通路は決して広くないが、充分余裕を持つて動ける。原作にあつたB7のコジマプラントの通路に近いかもしれない。ただゲームとは違い、ここでクイックブーストを使えば間違い無く壁にめり込んでしまうだろう。

迎撃システムとして無人のMTが数機何度か現れるが、攻撃は全てプライマルアーマーが防いでくれるので余裕を持つてレーザーブレードで沈めていく。

（さて、オレの予想通りならそろそろネクストが駆り出されてくるはずだが、出来ればここでの研究者が無能なのを願うな）

Side Out

「くそつーどうなってるんだ！？・・・2年前に逃げ出したメンバーの二人だけでなく10年近く前に姿を消したあの『人形』までいるだと！？しかもあの機体、奴が逃げ出した時に紛失した一つではないか！」

地下の通路を数人の白衣を着た研究員が早歩きで移動している。先頭にいた研究主任が怒鳴っているが他の研究員はそれぞれ耳のインカムから次々と聞こえてくる報告に返答している。

「・・・主任！内部に侵入した機体の進行は一向に止まらず、外で戦闘中の戦力はすでに68%が失われました！」

「当たり前だ！貴様らも”此處の人間”ならわかっているだろう！アレ（ネクスト）はそういう兵器なのだ！」

研究員の慌てるような報告を聞いた主任は怒鳴り声で返答する。ヤケになつてゐるわけではなく、本当にくだらないと思つ質問をされたからだ。

怒鳴られた研究員は一瞬肩を震わせて小さくなつた。

主任の言うとおり、此処の人間なら誰でも知つてゐる。アーマードコア・ネクストが持つ圧倒的な性能を・・・そしてネクストが兵器として完成する過程で最も深く関わつてゐるのがアスピナ機関だ。

「・・・しかし主任、どうしますか?このままではあの『人形』が・・・」

「わかつてゐる・・・ノーマルではあの化け物に太刀打ちすら出来ん・・・ならば、化け物には化け物だらう?」

やがて一つの部屋に辿り着く。自動で開かれた扉の先には入院患者のような服を着た若い男が一人、透明の軍用装甲版で作られた監獄の中にいた。暗闇が深いせいか顔は良く見えない。

入ってきた研究者達に気が付き、男が目を向け立ち上がつた。男の首元には真っ黒の機械的な首輪が填められてゐる。ウイスガラーゼに話した、ネクストの展開の妨害と反乱鎮圧のための電気ショックを起こす二つの機能を持つた文字通りの首輪である。

「主任!・・・まさか”これ”を使つおつもりですか!?!?」

「何か問題があるのか、報告で見た限り実力はかなりの物なのだろう?」

”これ”と呼ばれても男の表情はまったく揺らがない。呼び方に慣れたのか、それともまったく興味が無いのか。

「お前に任務を『』える・・・現在この施設に3機のネクストが攻撃を行つてゐる。まずお前は地下を進行中のネクストを撃破しろ、外のネクスト2機はその後だ・・・質問や希望はあるか?」

「・・・ネクストの使用許可と敵ネクストの詳細データを希望する」

「よからず・・・首輪を外せ、そのあとにデータを『』える」

主任の命令に従い、研究員の1人が監獄の扉を開けて専用の携帯端末を操作して男の首輪を外した。

だが、この時気付くべきだった。過去にこの施設で多くのリンクスが反乱を起こしたという事実を。

「・・・礼を言つよ」

男が呟きと共に研究員に拳を突き出した。拳は研究員の顔面にめり込み、その体を壁まで吹き飛ばす。男は凄まじい速さで走り出し、主任の傍にいた残りの研究員を一発で気絶させる。

「なつ！？・・・き、貴様・・・！」

「何を驚いている、2年前にも同じようなことがあつただろう？・・・
・・だが感謝するよ、貴様が無能なおかげでよつやく自由を得られた。
・・さて、少し質問に答えてもらおうか」

男が発光と共に全身を装甲で覆い、両手と両脇中に武装を出現させた。間違いなくネクストの姿である。

「ひつ！・・・や、やめろー！」から脱出しても、貴様のネクストはいざれ朽ち果てるぞ！」

「それがどうした・・・そんな理由で実験動物に戻るほど頭は死んではいない・・・殺されたくなれば質問に答えろ」

Side ラーゼ

「けつこう下に来たはずなんだがな・・・ウイスに貰ったマップだと、もう少しで研究員の居住スペースだな」

通路とリフトを何度も通り、ようやく人間がいそうな場所まで来た。もひゞタやノーマルも出て来ないので楽に進めている。

「ん？・・・隔壁が降りてゐる」

進路上の通路が無数の隔壁で遮られた。スキャンしてみると、隔壁は奥まで無数に続いている。

隔壁が降りていらない道を見つけてマップと照らし合わせると、行き先はネクストの戦闘データを取る広い訓練室に繋がった。

「・・・誘導されてゐる、と見るべきか・・・仕方が無いな、どうせ避けられない道だ」

覚悟を決めて通路を進む。訓練室のゲートが開き、中へ入った直後にドアが閉まった。

訓練室は壁の全てが真っ白だった。これでは訓練室と言つより感染症の患者を隔離する部屋のようだ。

その時、オレが通つたゲートとは正反対の位置にあるゲートが開いた。レーダーが熱源を一つ感知、以前の時と同じくバイザーに詳細データが表示される。

『ネクスト反応を感じ……敵ネクストの機体構成と武装を照合開始……完了。カラードランク1、オツツダルヴァの搭乗機、ステイシスと判明』

その機体はオーメルの標準機、ライールをベースとした軽量二脚型の機体構成で、深い青色の装甲を纏い、歪な前傾姿勢を取つていた。

右手に突撃型ライフル、AR-0700と左手にレーザーバズーカの異名を持つた試作型レーザーライフル、ER0705が握られ、右の背中にPMミサイル、MP-0901、左の背中には負荷低減型のレーダー、RDD03-PANDORA。

「初めてだな、人形……放つても構わなかつたのだが、追つて来られても面倒だ。ここで死んでもうとしよう……」

両手の銃をオレに向かながら空中に浮遊するその正体は……紛れも無い『最強』の存在だった。

第9話 アスピナ機関、襲撃（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

予定ではM-1とノーマルは、技術が世界中にばら撒かれてテロリストなどの主戦力になる予定です。やばい、黒い無人EISやノーマルなどのせいで敵だけ強くなっている気がする。

そしてラーゼの次の相手はなんと、ランク25、26からぶつ飛んでランク1のオツツダルヴァ・・・本名、水没王子です。フィールドは屋内なのでどうやっても今回は水没しません。

では、また次回。

第10話 最強（前書き）

すいじくお久しぶりです。

やつとテストが終わったので投稿することが出来ました。あと、どうでもいいことかもしれませんのがやつとHISの7巻を読み終わりました。

今回の相手は水没王子です。

では、どうぞ。

第10話 最強

Side Out

無数のノーマルやMTを相手にしていたエメラルドラクーンとスカーレットフォックスは残り少ない弾薬を節約しながら戦闘を続けていた。

逆間接の高い跳躍力により敵の空中を取つたフォックスは左背中のグレネードと右背中の散布型ミサイルを発射。

グレネードがノーマル4機とその近くに居たMT6機を、ばら撒かれた複数のミサイルが戦車部隊を吹き飛ばした。

「おい！ 内部に突入したラーゼから何か連絡は無いのか！？」

即座に放たれた対空砲火をクイックブーストで回避しながらウィスが通信に声を飛ばす。

『まだ何も来てないよ···それより増援でノーマルが着たから氣を付けてねえ』

「ウイス、しばらく対空砲火を弱らせるからそつちを頼む」

エメラルドラクーンが両背中と両肩の標準型ミサイルを同時に発射した。

それは上空のフォックスに目を向けていた敵のど真ん中に着弾し、対空砲火の密度を弱らせた。その隙にラクーンのスナイパーライフ

ルと標準型ライフルが放たれ、敵を打ち抜く。

その間にフォックスはオーバーブーストで増援に現れたノーマルに急接近、上空から両腕のマシンガンを連射してノーマルを蜂の巣にする。

すぐにその場から離脱しようとすると後方から迫ったミサイルがプライマルアーマーに着弾し、減衰した部分を狙って放たれた戦車砲がフォックスの左肩と右足の装甲を少し抉つた。

「があ！・・・くそつ」

AMSからのフィードバックにより肩に激痛が走るがウイスは歯を食いしばって耐え、オーバーブーストでイエーアイの元に戻る。

イエーアイのラクーンも損傷したのか胴体の左胸部と背中が僅かに溶解していた。

「APは60%以下・・・腕が鈍ってるのもあるが、流石に疲れてきたな」

「そうだな」

『体力だけじゃなくて弾薬もやばいんじゃない？・・・らーくんの指定した3時間まであと数分だし離脱したらどうかな？・・・あ、私はちょっと取り込み中だから離脱は自力でお願いねえ』

それだけ言って束は通信を終了した。自分が興味を示す特定の人間以外には生死すら無関心になる束の人格を理解している2人は心の中で”言われなくても”と答える。

ラクーンとフォックスは敵群に囮掛けて両背中の武装を同時に発射。隊列が乱れたのを確認して上空に上昇、対空砲火が開始されるより先にオーバーブーストでその施設から離脱した。

「あの女の人格は充分に理解したつもりだったが……理解してても腹が立ちやがる」

「そうだな……しかし”取り込み中”と言っていたが、一体あの状況で何をしていたんだ?」

「知るかよ……知りたくもねえ 僕達は指定された時間通りに巡回をやつた。後はラーゼを待つだけだ」

吐き捨てるような相棒の言葉を聞いてイエーイもその話を止め、黙つて飛行を続けた。

・
その頃内部に侵入したラーゼのノブリス・オブリー・ジューは……

「ぐつ……く……そがつ……！」

訓練室の真っ白な床に片膝を着いていた。

ローゼンタール社最高のネクスト、破壊天使の異名を持つたその機体の純白の装甲は各所に爆発の黒煙を焼付け、弾痕の穴を刻んでいた。機体各所からは火花が飛び散っている。

「なるほど、技術者共は馬鹿だが無能ではなかつたか……知らぬ間にここまで機体の性能が上昇していたとはな」

素直に感心する声を上げて空中からノブリスを見下ろすのは、ライルフレームをベースに構成されたオツッタルヴァの搭乗機、ステイシス。

「まだまだ・・・！」

AMSを通して全身に走る激痛に耐えながらラー・ゼは機体を立ち上がり、オーバーブーストで急接近して左手のレーザブレードを突き出す。

しかし光刃が辿り着くより先にステイシスはその場からクイックブーストで姿を消した。

目で見るより先に、左腕に手応えを感じなかつたことでラー・ゼも即座にその場からクイックブーストで離脱する。次の瞬間、ノブリスのいた場所にステイシスのライフル弾が当たる。

ノブリスは上昇を開始して突撃型ライフルを連射。だがステイシスは高い空戦適性によつてそれを容易く回避し、空中を超高速で移動し続ける。

ノブリスも連続クイックブーストによる超スピードで対抗し、空中で銃撃戦を繰り広げる。

しかし・・・・その拮抗は長く続かなかつた。

ステイシスの右背中に搭載されたP.M.IIミサイルが左右から迫る。ノブリスは迷わずクイックブーストで前進、ミサイルを振り切る。

しかし、そこを狙つていつの間にかノブリスの頭上を取っていたステイシスのアサルトライフルが放たれ、数発の弾丸がノブリスのプライマルアーマーを貫き右肩の装甲に弾痕を作った。

「認めよう。確かに貴様の実力は高い・・・機体の性能に振り回されず、それを完全に制御する技量も持っている・・・だが・・・」

オツツダルヴァの言葉を聞き入れず、ノブリスは空中で体を前に倒して強引に右へクイックターン。空中で背中を地面に寝かせたような体勢を取り、頭上にいたステイシスに突撃型ライフルの照準を合わせる。

ステイシスはその動きに一瞬驚いたが、すぐに左手のレーザーバズーカの異名を持つた試作型レーザーライフルをノブリスに向ける。

二人共、同時にロックオンが完了するより先に引き金を引いた。連射されたライフル弾と一筋の赤い閃光がすれ違い、互いの標的に迫る。

命中を知らせるように爆発音が響く。その音源はノブリスの頭部とステイシスの低負荷型レーダー。

「・・・ネクストとの戦闘に貴様自身が慣れていない

「ぐ・・・が、ああっ！..」

頭部パートの左側が爆発を起こし、破片がラーゼの左側の額を切り

裂いて血が飛び散る。

しかも激痛のせいで機体制御が上手くいかず、ノブリスは背中から地上に激突した。

(つー・・・やばい！・・・急いで体勢を・・・)

脳が激しく揺さぶられ吐き気が込み上がるが、ラーゼは肉体や機体の損傷を無視して一刻も早く立ち上がるつもりする。

だが上半身を起こそうとした瞬間、右腕の付け根に衝撃を感じ、体の内側を鋭い何かに搔き乱されたような激痛と共にノブリスは再び地面に叩き付けられた。

「があああああつーーー！」

痛みに耐えきれずラーゼは声を上げる。

「HSとは違ひネクストの保護機能に絶対は無い・・・許容限界の物理エネルギーをぶつければ容易く碎け散る」

ノブリスの目の前には右腕のライフルを突き出したステイシス。そのライフルに搭載されている鋭利な刃がノブリスの右腕に突き刺さっている。

「しかし、空中であんな動きを実現させるとはな・・・・・リンクスよりも曲芸士の方が向いているのではないか？貴様は」

まったく疲労を感じさせない声でオツヅダルヴァは軽口を叩く・・・いや、本当に疲労していないのだろ？

オツツダルヴァの言う通り、ラーゼはアナトリアの傭兵の経験を持つているが、ラーゼ自身がネクストの戦闘にまだ慣れていない。経験があつてもそれを実施されるのはまた別なのだ。

対して相手はゲーム内ではカラードランク1だつた存在。自惚れなど存在せず、最強と堂々と名乗れる存在なのだ。

だが、不利になっている原因はそれだけではない。ステイシスの機体性能、特に機動性方面がノブリスを上回っているのだ。

考えられる原因是此処の研究者が急ピッチでチューンを施したくらいだ。

機体性能とパイロットの根本的経験、この二つだけでラーゼは自然と不利になる。

「中々悪くなかったが、他を待たせているのでな・・・ここ今までだ」

レーザーライフルがノブリスの左胸部に押し付けられ、銃口に光が収束する。このままレーザーが放たれれば確実にラーゼの心臓を擊ち抜くだろう。

だが、この時オツツダルヴァは気付かなかつた。爆発した頭部パックの隙間から見える血塗れたラーゼの左目がまだ死んでいなかつたことに。

オツツダルヴァは知らなかつた。目の前の少年が弱肉強食を現した戦場で生き続ける為に常に止まることなく進化を続けていたことを。

「ぐつ・・・なにつ・・！」

ステイシスが指に力を込めるより先に、腹部に大きな衝撃が走りそ
の体が後ろに吹き飛んだ。ノブリスが左足でステイシスの体を蹴り
飛ばしたのだ。強引に刃を抜いたことで傷口から血が吹き出す。

ノブリスは仰向けに倒れている体勢からクイックブーストを使って
一瞬で起き上がり、間髪置かずに吸気音を響かせてオーバーブース
トを起動。ステイシスに猛スピードで接近し、頭部を後ろに大きく
傾ける。

「お返しだ」

にやりと口元に笑みを浮かべたラーゼはそのまま頭部を勢い良くス
テイシスの顔面に叩き付けた。所謂頭突きである。

その衝撃でノブリスのヘッドパートの装甲が歪むが、強度で劣るス
テイシスの頭部は突起部分がへし折れ、装甲のほぼ全体が酷く損傷
していた。

「くっ！・・・こんな・・・馬鹿げた攻撃を・・・」

イエーイの時と同じく予想外の攻撃にオツヅダルヴァが動搖し、頭
部に感じる衝撃に意識をぐらつかせている。

常識などクソ食らえと言わんばかりの戦場で生きてきたラーゼにと
つては殺し合いに馬鹿も天才も存在しない。逆にこういった何でも
有りの生き汚い戦い方はラーゼの意識にじょっとしたやる気を投入
してくれる。

ノブリスは両背中のマルチレーザーキヤノンを起動して発射。ステイシスはクイックブーストでその場から離脱して容易く避ける。

だがノブリスの狙つた先はステイシスではなくその足元だった。大爆発が巻き起こり、爆炎と爆風を周囲に撒き散らす。それを施設のシステムが感知して天井のスプリンクラーが起動し、かなりの濃度で水が降り注ぐ。

(イエーライの情報には大助かりだな……後は……)

ノブリスがもう一度レーザーキヤノンを発射。降り注ぐ水を熱で蒸発させ、訓練室の中が水蒸気で満たされる。ステイシスのレーダーが破壊されているので、互いの視界が一時的に死ぬ。

(スプリンクラーの水を使って視界を殺し、その状態からの奇襲が狙いか)

ラーゼの狙いを見抜き、意識を集中させるオツツダルヴァ。自分の居場所を教えないようにブーストでの上昇は抑えることにした。

右腕がまともに使えなくなつた今のノブリスに残された武装はレーザーブレードとマルチレーザーキヤノンのみ。

しかし大出力のマルチレーザーキヤノンなど撃てば発砲音が聞こえた途端にステイシスはクイックブーストで回避できる。よつてノブリスの攻撃手段はレーザーブレードに大きく絞られるのだ。

(何処から来る…………つ！…………右か！)

リンクスとして積み上げられた経験が本能に助言し、ステイシスは

両手の銃をその方向に放つ。

煙の向こうから着弾音が聞こえ、正体を現す。

爆散したそれは、ノブリスに搭載されているマルチレーザーキヤノンの片翼だつた。ノブリスは片方のレーザーキヤノンをページしてそれを投げ付けたのだ。

肩透かしを食らつたステイシスの左腕に突然衝撃が走り、レーザーライフルが手から零れ落ちる。

レーザーライフルに直撃したのはノブリスが持つていた大型の突撃型ライフルだつた。

「あまり調子に乗るなよ人形！！」

怒りの声を上げてステイシスはアサルトライフルを眼を向けずに自分の背後へ連射する。すると、連續で着弾音が響いた後にもう片方のマルチレーザーキヤノンが煙の向こうから現れて爆発した。

「これで武装は後一つ・・・・次で確実に・・・・つ！？」

何か強い危機を感じてステイシスが後ろを振り向いた。そこにいたのはオーバーブーストで急接近しながらレーザーブレードを突き出す寸前のノブリス・オブリー・ジュー。

ステイシスが最後のマルチレーザーキヤノンを破壊した時、ノブリスはその少し後ろにいたのだ。スプリンクラーの水がプライマルアーマーに当たつて居場所がばれないようにプライマルアーマーを解除していた為、ノブリスの装甲には無数の破片が突き刺さっている。

接近速度と距離からステイシスのアサルトライフルは当たらない。至近距離ではP.M.ミサイルは役に立たない。

勝利を確信したラーゼは、叫びながらレーザーブレードをステイシスの胸部に掛けて突き出す。

だがラーゼの確信は、視界を埋め尽くす緑色の閃光によつて残酷なまでに覆された。

第10話 最強（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

オツツダルヴァはメインブースターがイカれて水没しなければ滅茶苦茶強いはずです。

主人公のラーゼの戦い方がもはや不良の喧嘩に似てきている気がする。さらに武装をバージして相手に投げ付けてるし。

最後のやつが何かわかる人は結構いらっしゃると思います。

では、また次回。

第11話 元最強（前書き）

周りが忙しくしてくれたせいで少し遅れました。

では、どうぞ。

第11話 元最強

Side Out

「まさか、ここまでやるとはな・・・」

オツヅダルヴァに油断は無かつた。例え自分がラーゼより優勢でも、絶対的な勝利の確信が無い以上は気を抜けない。ラーゼにはその僅かな油断を突いて逆転できる可能性が充分にあつたのだから。

そう、油断など無かつた。無かつたはずなのにオツヅダルヴァはラーゼに追い詰められた。

アサルトアーマー。防御に使用するプライマルアーマーを攻撃に転用することでの、自機を中心とした広範囲を大爆発で吹き飛ばすネクストの切り札とも言える特殊機能。

使用後はプライマルアーマーを展開できないリスクがあるが、回復を待てば何発でも使用することが出来る。そこに強力な破壊力を加えたアサルトアーマーは、核兵器に次ぐ大量破壊・・・いや、コジマ汚染が撒き散らされれば大量殺戮兵器に位置づけられるかもしれない。

実はこのアサルトアーマー、ステイシスにも搭載されているのだ。ステイシスの高機動とオーバーブーストの出力を殺さぬために一番破壊力の低い物を積んでいるが、破壊力は充分だ。

これが無ければステイシスは完全に終わっていたろう。接近したレーザーブレードは確実に左胸部、つまりは心臓を狙っていた。

本来ならオツヅダルヴァはアサルトアーマーを使う気など無かつた。模擬戦だらうと実戦だらうと、どんな時もオツヅダルヴァはアサルトアーマーを使わない。本当の最終手段として使つてはいるのだ。

それを使わせたラーゼの急成長はオツヅダルヴァに恐怖を感じさせた。“実戦に勝る経験は無い”と言うが、この短時間でのラーゼの成長はそんな言葉で片付けられるレベルではない。

「・・・・だが、今度こそ」

先程のアサルトアーマーは間違いなくノブリスに直撃した。あの近距离ではどうやつても回避は不可能だ。機体もリンクスも無事では済まない。

しかもノブリスはステイシスに接近を気付かせないようにプライマルアーマーを開いていた。アサルトアーマーの前ではプライマルアーマーの防御力も焼け石に水だが、有ると無いとでは受けれるダメージに大きな違いが出る。それが無かつたノブリスの損傷は計り知れない。

消火が終わったのか、スプリンクラーが停止し、視界が開けてくる。ステイシスは破壊された低負荷型レーダーをバージ、メインブースターを吹かして先程落としたレーザーライフルを拾う。どうやら銃にダメージは無いようだ。

センサーが回復し、微弱な熱源を捉えた。バイザーに表示される反応はステイシスの後方、その壁際だった。

ステイシスが振り返ると、その方向に立ち込めていた水蒸気が霧散

し、まるで迷える者を導くよつて一つの道を作つていぐ。

その道の最奥にいたのは、両の翼を失くし、全身に大小の損傷を受け、壁に背中を預けたノブリス・オブリージュ。

純白の装甲は胸部が数箇所が弾け飛び、他の箇所には傷や弾痕、無事な箇所などもはや見えない。その姿はまるで墮とされた天使。ほぼ全身から火花を飛び散らせているその姿から、もはや戦闘は望めないだろう。

いや、むしろ死んでしまったのはリンクス、ラーゼの方かもしけない。

口で説明するのが難しいと思えるほどの酷い損傷。あれを一瞬で受けたといふことはリンクスを襲つたAMSのファイードバックは想像を絶するものだつたはず。最悪ショック死の可能性もある。

破損した頭部パーツから見えるラーゼの顔は力を失つて下を向いている。気絶しているのか死んでいるのか、ピクリとも動かない。

ステイシスはノブリスの前に佇み、剥き出しになつたラーゼの頭部にアサルトライフルを向ける。すると、その敵意に反応したのかラーゼの体が一瞬震え、首が持ち上がつた。

ステイシスを肉眼で見るラーゼの瞳に諦めの色は無い。隙あらば喉元に噛み付く獣のような目だ。しかも意思だけではないらしく、体を起き上がらせ、どうにかして左腕を動かそうとしている。

ステイシスは無言でノブリスの胸部を足で踏み付ける。再びノブリスは背中を壁に打ち付ける。

その衝撃で機体が限界を迎えた。AMSの血圧判断により、最終セーフティが作動した。ネクストの機能が強制停止を起こし、ラーゼを守っていた第二の体が光となつて霧散した。

地に倒れたラーゼの体はボロボロだった。頭部からの出血は未だ止まらず、アサルトアーマーによるものなのか、左脇腹と右足からも血が流れ出している。

「終わりだな・・・もう充分だろう、楽になれ・・・」

再びステイシスのアサルトライフルがラーゼの頭部に向けられる。ネクストが使う武装の威力なら痛みなど感じさせずにその命を絶つだろう。

トリガーに添えた指に力が籠もる。

「つ！・・・何故だ・・・」

しかし、弾丸は放たれなかつた。ステイシスの体が驚きで硬直したせいだ。

「何故・・・立ち上がる・・・」

ステイシスの目の前に体中を血に濡らしたラーゼが立つていった。ネクストの戦闘で敗北し、機体が限界を迎えて、ラーゼに諦める選択肢は無い。

「・・・勝ちたいからだ」

ラーゼが口元に微笑を浮かべる。狂ったわけではない、単純に笑つたのだ。

「それと、いつオレの負けが決まつたんだ？・・・まだオレの体は動くし戦える。それに・・・オレの機体は”一つだけじゃない”・・・」

ピー。

電子音が鳴り、ラーゼが左目の血を拭つた。開かれた左目の網膜には文字が表示された。

『ネクスト、ノブリス・オブリージュがダメージ限界により機能を強制停止しました。現状況を危険と判断し、対応策として”新たなネクスト”の起動を推奨します』

「あつちが最強なら、こつちは前最強で相手をしてやる・・・シユープリス、起動！」

『リンクスの機体選択を受諾。ネクスト、シユープリス、起動します』

「つ！・・・せん！！」

ラーゼの言葉に反応し、ステイシスがアサルトライフルを放つ。ラーゼは怪我の酷さを無視してその場から全力の跳躍、2メートル以上のステイシスの真上を飛び越えた。強化された肉体でこそ為したモノとはいえ、その行動に再びステイシスが驚く。

着地と同時にノブリスの時と同じく全身がコジマ粒子の輝きに包ま

れ、ネクストの装甲が形成される。だがそれはノブリスのような光を纏う純白ではなく、闇のような漆黒の色をした装甲だった。

中心部分に鋭い突起と両胸に一つのボルトが付いた胸部アーマー。高さが頭部に届き、肘部分に大型のユニットが装着されている細腕。

脚部パーツはノブリスより細く、膝に左右それぞれ一本飛び出た突起を装備し、足は爪先に指を一本、後方には一本、踵には鉤爪のようなユニットがあり、太ももの部分にはブースターがある。

ヘッドパーツは上部のみが元のままで、口元の装甲が収納される。それに続いて両目を赤いバイザーが覆い隠す。

頭部パーツ展開と同時にAMSプラグを接続、ラーゼは即座に武装を展開する。

右腕にBFF製のライフル、051ANNR、左腕に突撃型ライフル、04MARVE。左背中には何も無いが、右背中にはグレネードランチャー、OGOTO。最後に両肩部分に一基のフレアディスクエンバー、051ANAMを装備する。

これがリンクス戦争時のランク1、ベルリオーズの搭乗機。レイナード社製のアリーヤフレームを元に他企業の武装を使用したネクスト、シュープリスである。

腰に装備されたスタビライザーによるものかカラーリングの違いか、通常のアリーヤフレームとは異なり刺々しい外見をしている。

展開の完了と同時にシュープリスとステイシスが右腕に持ったライフルを互いに構える。二機の間を展開の余韻で散つたコジマ粒子が

漂うが、一機は少しの距離を保つて睨み合つた状態から動かない。

その状況は知る者が見れば現最強と元最強の対峙に他ならなかつた。

「ネクストを複数所持していたとはな……だが、機体を新しくしても体はどうだ？ 生命補助システムとて完全ではない。あれほど の怪我、保つて30分が良い処だろ？」

そう、ラーゼの怪我は完治したわけではない。生命補助システムによつて一時的に出血と痛みを止めているだけだ。

30分・・・いや、脱出の時間も含めれば15分～20分、その間にラーゼはステイシスを無力化しなければならない。

「上等だ・・・さて、第一二ラウンドと行こうか・・・・・

だがそんなことでラーゼは動搖などしない。制限時間があるならそれまでに勝つ、それだけだ。

互いにライフルを構えながら一機が同時に動き出す。シユーブリスが右、ステイシスが左に、ライフルを連射しながらクイックブーストを行つた。時速800キロ以上で移動していくのに、両者の弾丸は確かに互いの装甲を削つていた。

シユーブリスは右肩、ステイシスは左肩に弾丸を撃ち込まれている。だが、装甲の薄さと損傷の酷さからダメージはステイシスの方が大きい。

先に動き出したシユーブリスは連続クイックブーストで距離を詰め、ステイシスは接近を避けようと空中へ上がり、ライフルで弾幕を張

りながら後退する。

しかしショープリスは弾幕をもろともせず、両手のライフルを連射しながら突き進む。乱射しているわけではなく、確実にステイシスのプライマルアーマーを削り取っている。

「くつ・・・・何故避け切れん・・!」

BFF製のライフル、051ANNRは直撃すればネクストのプライマルアーマーすら貫通する威力がある。ステイシスの高機動を前にしても着弾を可能にするとこりから、BFF製にふさわしく、射撃精度はかなり優秀。

(・・・・段々と動きが見えるようになつてきた)

しかし、弾丸が当たつている原因はそれだけではない。さつきの戦闘で翻弄されたステイシスの動きにラーゼの反応が追い着いているのだ。

左手に持つ 04MARVE(以後マーヴ)は右手のライフルよりも命中精度が低い。だが、それでもステイシスが回避しきれいなのだ、これは武器よりもラーゼ自身の射撃精度の方が大きい。

「・・・・チイ・・・!」

このままではジリ貧になると考えたのか、ステイシスはオーバーブーストでショープリスの頭上を通過し、背後を取つてPMMIサイルを発射する。

ショープリスはクイックターンで急旋回、オーバーブーストで中央

を突破し、先程のようにP.M.ミサイルを振り切る。これでシユープリスは左右と後方への動きを封じられた。

退路を断たれたシユープリスにステイシスが正面から接近、ノブリスの右腕を潰したアサルトライフルの銃剣が突き出された。

だが、シユープリスはクイックブーストで逆に接近し、頭部に迫った銃剣を直撃の寸前に首を傾けてかわした。

「なつ・・・・・！」

そのままシユープリスはステイシスの右隣を通過、ステイシスの背中にマークを連射する。

至近距離で放たれた弾丸はプライマルアーマーを貫き、ステイシスの装甲に弾穴を作っていく。

「ぐつ・・・・おのれ　　」

振り返った瞬間、ステイシスの胸部を大きな衝撃が襲つた。なんとシユープリスはその場で回し蹴りを放つていたのだ。鈍い金属音と共にステイシスは背中から壁に激突する。

「動きが・・違ひすぎる・・・・本当に同一人物か・・・・？」

「無謀だつたな、オツツダルヴァ。先程とまったく変わらぬと思つたか？」

正確な射撃、無駄の無い回避、敵への反応速度、何から何まで先程とは違ひすぎる。たつた数十分の戦闘だけでこれほど実力が上がる

のだろうか？

AMS適正がもたらす才能ではない、ラーゼ自身に眠る”戦いの才能”がこの急成長を実現させているのだ。幼い頃から戦場に身を置き、生き抜くため常に成長を止めなかつたラーゼだから可能なのだ。

立ち上がつたステイシスとショープリスが浮遊を始め、戦場を空中に変える。

クイックブーストの爆音が鳴る度に一機が現れ、そして消える。だが銃弾は絶えず飛び交い、部屋中に無数の弾痕が刻まれる。

そんな時、クイックブーストで移動したショープリスとステイシスが正面で向かい合う状況になった。ショープリスが右手のライフルを、ステイシスが左手のレーザーライフルを構える。

発砲。

ライフル弾と赤い閃光がすれ違い、互いの標的に迫る。

そして数秒後に鳴る爆発音。

ノブリスが頭部を破壊された時とまったく同じだったこの状況・・・

・今回の音源は、ステイシスの左手にあつたレーザーライフルだった。

ショープリスはあの瞬間、レーザーライフルの銃口にライフル弾を撃ち込みレーザーライフルを内側から爆発させたのだ。ちなみにステイシスのレーザーは頭部を狙っていたが、ラーゼはそれを見切り、首を傾けることで回避した。

武装が突然爆発したことでステイシスの体勢が崩れた。ショープリスはその隙を逃さず右背中で折り畳まれた状態のグレネードランチャー、OGOTOを展開し発砲する。

直撃を知らせる大きな爆発音が響き、胸部から黒煙を吐き出してステイシスが完全に体勢を崩す。有澤製のグレネードならばステイシスのプライマルアーマーを消し飛ばし、本体にダメージを与えることは難しくない。

吸気音を鳴らしてショープリスがオーバーブーストで接近、ステイシスの腹部にマーガを深々と突き刺した。

そのまま一機はショープリスのオーバーブーストによつて直進、腹にマーガを突き刺したままステイシスは壁に激突した。

「がはっ・・・・！」

口から血を吐き出すオツヅダルヴァ。ラーゼはそれを冷たく見下ろし、銃身から血が垂れているマーガを勢い良く引き抜く。引き抜かれた腹部からは少なからず血が流れ出す。

ショープリスが右手のライフルを持ち上げ、銃口をステイシスの頭部に密着させる。これならステイシスのアサルトアーマーが発動するより銃弾が頭部を吹き飛ばすほうが早い。完全なホールドアップだ。

「オレの勝ちだ、オツヅダルヴァ」

「『』ほつ・・・・ああ・・・そして、私の負けか」

この瞬間、ラーゼ・ベルセルクが現在最強のリンクス、オツツダル
ヴァに勝利し、新たな最強が誕生した。

第11話 元最強（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

アーマードコア？の発売日が遂に決まりましたね。

元最強っていうのは4のベルリオーズで、搭乗機のシユープリスのことでもありました。

ちなみにマーガを突き刺したっていうのは4のオープニングでやつてたアレです。オリジナルなのは、そのままオーバーブーストで壁に突っ込んだところです。

ちなみにステイシスのアサルトアーマーは私はゲームで一度も見たことがありません。ミッションだと勝手に水没するし、オーダーマッチだと待っている内にこっちが不利になるし……。

次の更新も少し遅れるかもしれません。

では、また次回。

第1-2話 脱出ヒャウ流（前書き）

お久しぶりです。やっと試験が終わりました。

セツ様から感想をいただきました。

では、どうぞ。

第1-2話 脱出と合流

Side Out

侵入者であるフーゼを誘導するために降ろされた無数の隔壁。

それはもちろん帰り道、つまりは地上へのルートにも張り巡らされている。

そして、誘導された本人のラーゼは、現在それを破壊しながら進んでいる。

ボオオン！－ボオオン！－

「・・・・本当にこっちでいいのか？」

「間違い無い。お前と交戦する前にメルツェルと確認したからな・・・もつすぐだ」

右背中に搭載されている有澤製グレネードランチャー、OGOTOをぶつ放して隔壁を吹き飛ばす漆黒のネクスト、シユーブリスの隣には別のネクストが並走していた。

外見はシユーブリスとそっくりのアリーヤフレームだが、下半身が逆間接になつており、黒のカラーリングがシユーブリスより濃く、間接の各所に赤のラインが刻まれている。

武装も大きく異なつており、シユーブリスが左手に持つマーヴを右手に、ステイシスが持つていたのと同じレーザーバズーカを左手に

持つている。右背中も同じくPMMサイル、左背中には高出力レーザーキヤノンを搭載していた。

そのネクスト操るリンクスの声は、ラーゼと戦っていたオツヅダルヴァとそっくりだつた。まあ、当然だらう、同一人物なのだから。

「……というか、ホントにキヤラが別人だな。一体どっちが本当のお前なんだ？それと、なんて呼べばいいんだ？オツヅダルヴァか？……テルミドールか？」

「……個人的には後者の方が望ましいな……しかし、初めから知っていたのか？私がネクストを二機所持していたことを……」

「予想はしてたが確信は無かつた……むしろ、あの場で交戦したのがお前だつた、そっちの方が予想外だつたな……」

この人物の名は、マクシミリアン・テルミドール。またの名を、”オツヅダルヴァ”と名乗つてゐる。

機体もステイシスとはまったく別の物、その名を”アンサング”といふ。

つまり”オツヅダルヴァ”はラーゼと同じく、別の名とネクストを持つ者だつたのだ。

普段の姿は”ステイシス”を操り、偽りの名を名乗るオツヅダルヴァ。そして本当の姿こそ、今の”アンサング”を操るテルミドールである。

だが、例え偽りの姿だつたとしても、この二人は先程まで殺し合つ

ていた。そんな二人がどうして行動を共にし、これほどまで友好的に会話をしているのだろうか。

それはラーゼがオツヅダルヴァに勝利した時まで戻る。

ステイシスの頭部に右手のライフルの銃口を押し付けたまま、シユープリスはステイシスを見下ろしたまま引き金を引かなかつた。

「じほつ・・・どうした・・・」じままでやつて殺すのに迷いが出たか?」

血を吐きながらの皮肉を聞いてもラーゼに反応は無かつた。ただ銃口を突きつけ、引き金に指を掛けている。

バイザーに隔たれたラーゼの瞳にはステイシスに見せた不屈の闘志は無く、深い思考の海が広がっていた。

やがて瞳から海が引くと・・・

「なあ、オツヅダルヴァ・・・・協力、といつか・・・手を貸してくれないか?」

「・・・・なに?」

そんなことを言い出した。オツヅダルヴァも突然の申し出に呆けてしまっている。

「話してなかつたが、元々オレがここに来たのは……ここにいるリンクス達を救出するためだ。もちろん今も目的は変わつてない。だがな、今ままだと生命補助システムの時間が足りないし、脱出しようにも隔壁を突破するための弾薬が足りない……そこでお前の力を借りたいんだが、どうだ？」

そう、今のラーゼの体には制限時間がある。ステイシスとの一度目の戦闘で負つた傷は生命補助システムによつて誤魔化しているだけだ。

そんな状態で他のリンクスを助けようとすれば間違つて無く時間切れでラーゼの体が動かなくなる。逆に脱出しよつとしても、地上まで何層も降ろされた隔壁が待つてゐる。

一枚一枚の厚さはシューブリスの火力を持つてすれば紙も同然だが、数が多いのだ。どう節約しても先に弾薬が尽きてしまう。

「……貴様の要求はわかつた。だが、この機体状態で私が協力しても足手纏いになると思うが？それに、何故貴様は他のリンクスを助けるような真似をする……そこまで馬鹿なお人好しでもあるまい、目的はなんだ……」

「……確かに目的が無いわけじゃないが、今は単純に同類を助けたいだけだ……それに多分、お前もう一つ自分の機体を持つてたりするんじゃないかな？」

「つ！……何故知つている……」

「その反応から見てアタリか……どうする、協力するか？……」

「

驚きに声を荒げたオツツダルヴァの反応を見ながらラーゼは冷静にもう一度尋ねた。協力が得られない場合、一人ともこの地下から抜け出すことはできない。その事実を理解しているオツツダルヴァは顔を俯かせ、しばらく考える。

「……ひとつだけ、答えてくれ。お前は……今の世界をどう思つ」

「政治の話しか？それとも……”女尊男卑社会”か？……歪んでいて、そんでもって気に食わんな。社会はもちろん、下にされている男共も」

そう答えるラーゼの言葉には、田に見えないモノへの確かに怒り、いや殺意があつた。

篠ノ之 束が生み出したIS、インフィニット・ストラトスが登場したことで、常識が塗り替えられたは何も兵器だけではないのだ。ISが持つ影響力は人間社会の常識までも塗り替えてしまった。

ISを動かすことが出来るのは”女性のみ”。この事実は全世界に『女性=男性よりも立場が上』という方程式を刻んでしまった。

男女平等、などといふのが世の中の基本だったのかもしれないが、今も昔も、実際は世界に平等などほとんど存在しない。

例えば身体能力。これは平均的に男性の方が女性のそれを上回っている。まあ一部では男性に勝る女性もいるが、全ての男女のトータルスペックを比べれば恐らく男性が勝る数が多い。

だがそんな常識的な差もE.Sの力が木つ端微塵に破壊してしまった。つまりはパワー・バランスが一方的に女性へと傾いてしまったわけだ。

その結果出来上がったのが、女尊男卑社会。

ラーゼも適当な国の首都を歩いている時に、女性に奴隸のように扱われている男性を見たことがある。

ラーゼ本人も、態度がデカイ見ず知らずの女性に突然命令をされたことがあった。その際はラーゼが無言で殺氣を込めて睨み、女性は悲鳴を上げながら逃げ出した。

だがラーゼが嫌っているのは社会だけでなく、大人しく従う男性も同じである。本人曰く、媚びるような様子は「家畜以下だな、吐き気がする」らしい。

「……そうか。わかった……それが聞ければ充分だ」

ラーゼの返答を聞いたオツヅダルヴァはどこか満足したような声で答え、その体をコジマ粒子の光で包み始めた。

深い青色の装甲が空中に溶け出し、変わってシユープリスよりも濃い黒色の装甲が展開されていく。それは全身を覆い、やがては武装を形成、一機のネクストを誕生させる。

このネクストこそ”アンサング”である。

「さて……協力の証として改めて名乗る。マクシミコアン・テルミドールだ」

Side ラーゼ

（目標をセンターに入れてスイッチ・・・目標をセンターに入れてスイッチ・・・目標を・・って良く考えたら隔壁狙うのに照準いらないだろ・・・）

砲身の熱を逃すためにOGOTOを収納し、左手のマーヴを連射。数メートル先の隔壁に弾痕で丸い穴を描く。そこへクイックブーストで急接近。くるりと体を右に回転させ、左足で回し蹴りを放つ。鈍い金属音が響き、弾痕で描いた隔壁の穴の部分が綺麗に外れて宙を舞う。

一応言つておくが、退屈だから工夫して遊んでる、というわけではない。こうして弾薬の消費を最低限に抑えなければ協力しても地上まで届かない可能性があるので。

「交代だ」

「了解だ・・・しかし、本当に器用な奴だ・・・そもそもネクストが蹴りを使うか・・・」

後ろに下がるオレと変わつてアンサンブルが前に出て右背中のPPMミサイルを発射、隔壁に大穴を空けて吹き飛ばす。ノルマとして、隔壁を10枚程破壊したら交代、というルールになつているのだ。

「なに言つてんだ。常識に縛られた戦い方なんてしてたら生き残れ

ないだろ？が・・・」

「だからと書いて蹴りを使つか・・・むつ、通信が回復してきたな。
間もなく地上だ」

「合流した途端に”お仲間”がオレを撃たないようにしてくれよ・・・
・・？」

脱出の途中で教えられたのだが、元々テルミドールは仲間と一緒に
ここから逃げ出すつもりだつたらしい。

だが、ウイスやイエーイを含めた大勢のリンクスが逃げ出した事件
のせいで監視が強化され、中々機会がやって来なかつたそうだ。

そんな時、オレがここを襲撃したことによつて混乱が生まれ、研究
者達を出し抜いて自由を得られたそうだ。

テルミドールはオレと戦う前に捕らえられている他のリンクス達を
解放し、先に地上へ向かうように指示を出していた。ちなみにこの
計画は「メルツェル」という仲間と考えた、と言つていたので、こ
こにはO.R.C.Aのメンバーもいることがわかつた。

上手く利用されたようでスッキリしないが、一応は手助けになつた
のだから良しとしよう。

聞いた話だと他全員は協力して既に地上に出たらしい。見覚えのな
いオレを見て撃つた、というのは勘弁願いたい。

「あと4枚ほどで地上か・・・ちつ、ラーゼ、マーヴの弾が切れた。
手伝ってくれ」

テルミードールの言葉を聞き、右手のライフルを持ち上げて発砲。マーヴの時よりも大きな弾痕が隔壁の一点に刻まれ、そこをアンサングの放つたレー・ザーバズー力が撃ち抜き、吹き飛ばす。

次に見えた隔壁をアンサングの左背中のレー・ザーキヤノンが貫き溶解させ、溶解した穴の先にPMミサイルを放ち、奥の隔壁を吹き飛ばした。

「最後の一枚・・・交代だ」

その言葉を聞いて機体を上昇させ、オーバーブーストで溶解させた穴を通りPMミサイルで吹き飛んだ場所をすぐに通過、右背中のOGOTOを展開し、最後の隔壁に目掛けて発砲する。

ボオオン！！

紅の閃光が煌き、爆煙の間から太陽の日差しが差し込んでくる。アンサングがオレを追い越して先に地上へ飛び出た。

続いて地上に出ると、顔面全体に強い日差しの熱を感じる。不快感に顔を纏めるが、すぐにネクストの保護機能が作動し熱を遮断する。

周りを見渡してみると周り一面はただの砂漠だった。いや、センサーに反応がある方を拡大してみると軽く見てもボロボロの施設が見える。どうやらこの出口は施設から離れた場所に通じていたようだ。

「皮肉なものだな・・・」このような見捨てられた大地には悠久の時が約束されているのに、人が生きる場所は酷く歪む

砂漠を見渡しながらテルミドールが呟いた。背中越しで表情は見えないが、そこには少々落胆の気配があった。何に對して落胆しているのかはわからないが。

この世界でここまでレベルなのだ。コジマ粒子に汚染された国家解体戦争後の世界ではどれほど酷いか想像できない。

いや、むしろ想像も出来ないレベルだからこそ、こいつは『クローズプラン』なんでものを実行したのかもしれない。

「…………すまない、気にしないでくれ。さて、メルツェル達と合流しよう。・・・・互いに時間もヤバイか、急ぐぞ」

「了解だ」

二つの吸氣音が鳴り、全身にオーバーブーストの重圧を感じながらオレとテルミドールは施設の方向へ向かった。

「…………んで、合流したのはいいが・・・壮観だなこりや・・・

」

テルミドールのアンサンブルに續いて到着した場所には数十機のネクストがいた。どれが誰の何て名前の機体か分かりそうなんだが、色が多過ぎるせいで目が疲れているのか、それとも”時間切れ”が近いのか、良く分からぬ。

氣のせいだろうか、桜色のネクストがこっちを見ていた気がした。

自分の声に疲労感を感じながら、揺らめく視界にアンサンブルに近付く一機のネクストが映った。

「来たか、テルミドール・・・後ろにいるのがそうか？」

「ああ・・・すまんが、一人分の医療施設の準備を頼む・・・」

「医療施設？何故だ？」

「そろそろ時間切れだ・・・しばらく頼む」

その言葉の意味を頭が理解し、傍で倒れるテルミドールを見て、オレの意識は途切れた。

第1-2話 脱出ヒャウ（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

とりあえずテルミニードールはラーゼと同じく機体を複数所持している設定にしました。

原作時期までもうけようとかな？

では、また次回。

第13話 非公式な存在

Side Out

「ええと・・・必要なデータは転送したよね。荷物はまとめたし・
・・むう、らいくんの完璧な家事能力にお世話になつてたから不安
が消えないなあ・・・よし完璧！流石私！」

誰も居ない、見ていない場所で声の主である女性、篠ノ之束は両手
を腰に当て胸を張る。そのすぐ近くには纏められた荷物一式。

束の目の前の端末には「転送完了」と文字が表示され、他の端末は
全て沈黙している。

束が指を鳴らした。それに反応し、置かれていた荷物が量子変換さ
れ、姿を消す。

別に不思議なことではない。ISの武装使用は量子変換の技術が主
であり、束はそのISの開発者だ。

技術の理解度はもちろん、応用性が他より優れているのはむしろ当
然のことだ。

「わざわざ・・・それじゃあ、らいくんにメールを送つておこつ
と・・・にしても凄いな〜、一度の敗北からあの短時間での実力の
急上昇・・・やつぱりらいくんもちーちゃんの弟だね〜・・・よし
出来た、送信つと・・・」

空中に表示されたディスプレイを消して束は出口へ歩き出す。

だが出口を出る一歩手前で立ち止まり、部屋の中を振り返った。

「またね、らーくん

本人がその場に居たわけではない。だが、何故か束はそう言った。言い終えると、もう用は無いと言わんばかりに部屋を出ていく。

それからその拠点には、物音一つしなくなつた。

Side ラーゼ

「・・・ひつ・・・」

視界が開き、最初に見えたのは真っ白い天井。差し込む明かりに開いたばかりの目を刺激され、視線が狭くなる。背中に感じる柔らかさから、ベッドで寝ているようだ。

「ん？ 目が覚めたか、ラーゼ・ベルセルク」

少し冷たさを感じさせる声が聞こえた。なんだろう、何処かで聞いたような気がする。

声の方に目を向けると、そこにいたのは1人の女性。

艶のある黒髪を背中まで伸ばし、ルビーのような赤い瞳を薄く開いている。

その顔立ちは整っており、かなりの美人に部類される。千冬姉さんのようにクールビューティーといつ言葉が良く似合つてると思つ。

「さて、何から知りたい？ 言つてみる」

初対面での自己紹介などは無く、田の前の女性はそう言つてきた。まあ、せっかくなので利用させてもらおう。

「・・・ 田のは何処だ？ オレが意識を失つてしてからどのくらい時間が過ぎた」

「田のは施設内にある医療施設だ。お前が眠つてからすでに6時間が経過している」

6時間。その程度の時間なら傷が痛むのも仕方が無いか。

「テルミドールや他のリンクス達はどうしてる・・・ これからどう動くつもりなんだ？」

「テルミドールはお前より先に目を覚ました。今は他のリンクスを集めでこれからのこと話を話し合っている・・・ 幸い話を聞く連中が多くつたようだ」

正直驚いた。

リンクスは基本的に群れるのを嫌つてゐるのかと思つていたが、この世界では少し違うようだ。

しかし、一体どんなリンクスがいるんだ？ ウィス達の他にも脱走し

たリンクスはいたから全員がいたわけではないだろうが。

「質問は終わるか？・・・なら少し待つていろ。テルミドールを呼んでくる

「あつ・・・すまん！最後に一つ・・・あんたの名前は？」

出口を通りつとじていた女性が足を止めた。目だけが一いつ朶を向き・・・

「・・・セレン・・・セレン・ヘイズだ」

それだけ言つて部屋を出て行つた。そして名を訊ねた本人であるオレは、その返答に驚きで言葉を失つていた。

「セレン・・・ヘイズだと・・・つ！」

まさかその名をここで聞くとは思えなかつた。

セレン・ヘイズ。”for answer”では独立傭兵たる主人公をサポートするオペレーターだが、リンクス戦争時代の名は違う。

その名は霞・スミカ。かつてのレオーネメカニクス社の最高戦力と呼ばれ、正真正銘オリジナルリンクスの一人である。つまりは、世界を相手に戦つたリンクスの一人だ。

もしかして、氣を失う前にオレを見てたあの桜色のネクストつてシリエジオだったのか？

ぼやけている記憶を掘り返していると、東さんにプレゼントされた

携帯が着信を鳴らした。体を動かしてみると、少しだけ痛みがあるが問題なく動いた。

携帯を開いてみると、メールが1通来ていた。てか、この携帯のアドレス知ってるのって束さんだけだけどな。しかし、なんでネクストの方への通信じゃなくメールなんだ？

『やつほ～らっくん！

唐突なんだけどね、たった今から私らーくんと別れて一人で動こうと思つんだ・・・あ、もちろん理由は説明するよ？

あのね、多分だけど、らーくんが今から何か”大きなこと”をやる予感がしたんだ。だから私はそれに関わらず外側から見物することにしたのだ！

突然かつ身勝手で、理由にもなつてないのは承知の上なんだけどね～～けどほり、その辺は私だから。

てなわけでさよなら～。さつとまた会えると毎回。

追伸

今まで家事全般でお世話になつたお礼に使つてたアジトとそこにあらモノは全部は上げるね～

なんとまた、重大な内容がフランクな文で書かれていた。心の中の驚きが殆ど無いのは・・・うん、相手が束さんだからだろうな。うん、だつて束さんだし（大事なことなので一回言いました）。

しつかし、”大きなこと”ねえ・・・全くと言つて良い程心当たりがないんだが、どういう意味なのか、それとも本当に束さんの直感が叫んだだけなのか。

「・・・すまない。中々有効な意見が出なくてな」

思考の海に沈んでいると、扉が開く音が聞こえた。入室してきたのはテルミドールとセレン・ヘイズ、さらに知的な感じの眼鏡を掛けた男性だった。多分、テルミドールと一緒にいるということは。

「初めましてだな、ラーゼ・ベルセルク。テルミドールの同士、メルツェルだ」

勘みたいなものだったが、やはりこの男がメルツェルか。ORCAの頭脳であり、BIG BOXではヴァオーと共に企業連の部隊を相手に散ったリンクス。

「よろしく・・・しかし、テルミドールの言葉を聞くと、やっぱり話し合いは・・・」

「まあな・・・整備や物資の問題からいつまでもこの基地を拠点には出来んし、バカ正直に普通に暮らせば間違いなくアスピナ機関に雇われた組織が狙つてくる、難しいものだ。・・・いつそのこと全員で全世界規模のテロでも起こして名を売るか？」

そう言われて一瞬、国家解体戦争の再現を思い浮かべてしまつたが、苦笑しながら、やめておけ、と釘を刺す。しかし、確かに難しいものだ。

この基地に残されてる物資には限界があるし、どうやらここではネ

クストの整備が出来ないようだ。だが、問題は施設や物資だけではない。

オレ達は今回の件でアスピナ機関と完全に敵対（元々、敵味方という関係でもないが）した。あくまでも非公式の機関とはいえこんな基地を作っているんだ、きっとかなりの国家権力を持つている。

それを使って秘密裏にオレ達を捕獲、あるいは抹殺に来る可能性は充分にある。この基地内にいるリンクスの合計戦力は全てのIIS、467機分に届く可能性があるほどだ。

そんな危険分子、あるいは貴重な戦力を放つておけば、復讐されるのが怖くて眠れもしない。

加えて言えば、オレ達は世界にとつて非公式の存在。たとえ殺しても不審に思つ人間も悲しむ人間も皆無に等しい。

つまり、このままでは普通に暮らすことさえ難しいのだ。せつかくの自由もこれでは意味が無い。こんな扱いなら脱獄した囚人のほうがまだマシだと思つ。

かと言つてリンクスやネクストの存在を公表しても、アスピナ機関に手を回されて情報を握りつぶされるか、信じてもらえないかのどちらかだらう。

こうなるともう本当にテロでも起にしてリンクスの存在を認めさせるか？

・・・・・ん？待てよ？何だか今みたいな状況を前に聞いたことがあるような気がするぞ。

兵器としてまったく新しい形のネクスト、それを扱える希少なリンクス、しかし技術を普通に公表しても世界は振り向いてくれない。

「…………あ、そうか、ISだ！」

今のネクストは白騎士事件以前のISと似たような状況なんだ。ただ違う点があるとすれば、発表すらしてない、というところだ。

となるとだ、性能はともかくISとネクストはほぼ似た状況にある。なら同じく、”似たような方法”で世界に名を売れるんじゃないかな？

「…………おい、大丈夫か？」

突然沈黙したオレの様子に反応してテルミドールが声を掛けてきた。いかん、どうやらかなり考え込んでいたようだ。

「ああ、大丈夫だ……それよりテルミドール、良い考え方を……」

・

「ビィイイイ！……ビィイイ！……ビィイイ！……

思い付いた。そう言おうとした途端、耳障りな警報が響き、部屋の中を天井から降り注いだ真っ赤な光が包み込んだ。

「…………テルミドール、悪い知らせだ」

耳に付けていた通信機から手を放したメルツェルの顔は真っ赤な室内でもわかるほど青褪めていた。

「各方向から無数のミサイル、MT、ノーマルがこの基地を包囲し押し寄せてきている。どうやらアスピナは予想よりも早く私達を消そうとしているようだな」

「・・・基地はミサイルで消し飛ぶだろう。ノーマルやMTが幾らいても負ける気はせんが、行き先すらまだ決まっていないこの状況で無闇に離脱するのは少々危険だな・・・」

テルミードールの言つ通り基地そのものは降り注いだミサイル群が綺麗に吹き飛ばしてくれるだろう。これは問題ない。ノーマルやMTも同じだ、幾ら数を集めようがネクスト数十機に勝てるわけがない。

問題は包囲網を突破した後だ。恐らくアスピナの狙いは回数を重ねた長期間の包囲攻撃と、休み無き連戦によるオレ達の消耗、そして消耗して後に鹵獲・・・最悪の場合は核まで使つたりしてな。

ネクストは確かに強い。だが、”強い”だけで”無敵”ではないのだ。機体リンクス、いずれはどちらかに限界が訪れる。

まあ、これは”行く当てが無く、オレ達が永遠と逃げ回つていれば”の話だがな。

「脱出するぞ。他のリンクス全員にも伝えてくれ」

ベッドから降り、入り口近くで壁に背中を預けていたセレン・ヘイズを含めた三人に短く言い放つ。

「無論、脱出はする・・・だが包囲網を突破した後は何処へ向かう」

「つい先程オレの物になつたアジトだ、そこにに向かう……居場所を誰にも知られるわけにはいかないから追撃すら出来ないレベルまで敵は潰す」

どうやら時間は待つてくれないらしい。ならやつてやるぞ、ここにいるリンクス全員にオレの力を証明して、次は世界にオレ達の存在を無理にでも認めさせてやる。

「……ほら！ 時間に余裕があるわけじゃないんだ、準備を急げ！」

「……あ、ああ」

少し声を荒げると、テルミドールとメルツェルは耳に装着していた通信機を操作しながら部屋を出て行く。部屋に残されたのはオレとセレン・ヘイズの二人だけ。

「ふつ、年下の子供に指示を貰つとはな……それで？ 私はどうすればいいんだ？ 言つてみろ」

セレン・ヘイズは退出した一人に愉快そうな笑みを浮かべ、オレの方に試すような目を向けてきた。それに対してオレは、少々歪んだ笑みを返す。

「他全員の準備が終わるまで少しあつておきたいことがある。少し手伝ってくれ、これを使えば近い内に面白い結果を出してくればずだ」

そう言ってオレ達が向かったのは、”データ総合管理室”……あ、そういうえば。

「ウイスとイヒーイのこと忘れてた……まいつか、アジトに戻つてくれって通信送つとこ」

Side Out

「……一応作戦を説明するぞ？進行方向に展開されてるMT及びノーマル群を全て掃討後、即座にオーバーブーストで戦闘地域を離脱、敵を完全に振り切る……いいな？」

発進用のゲートからネクスト全機が出撃し、遙か彼方から迫るノーマル群をセンサーで捉えた。

ラーゼの脱出の提案に反対するリンクスはいなかつた。この中の誰一人、まだ死にたくないのだろう。

ラーゼの言葉に返答は無いが、ここにいる全員の答えは言葉にしなくとも理解できた。

「…………行くぞ！…」

ラーゼのシュー・プリスがオーバーブーストを作動し、驚異的な加速を用いて敵軍に突っ込んでいった。それに続いて、他全てのネクストも同じく突っ込んでいく。

突如大きな発砲音が響いた。その音源は銃身がかなり長いグレネードランチャーを背負つたタンク型のネクストだった。放たれたグレ

ネードは敵軍に着弾し、数十キロ離れた場所から肉眼で確認できるほどの大爆炎を作り上げた。

それを引き金に、ネクスト全機が攻撃を開始した。プラズマライフルやレーザーブレード、ミサイル、ガトリング、様々な兵器がノーマルとMTを蹂躪していく。だが、相手は無人機なのか後退する気配はない。

どちらにしても、どちらの勝利で事が片付くのかは明白だった。

数日後、衛星が偶然発見したその場所には、無数のパーティクレータがあり、発見の数日前には一人の老人が夜空を飛翔する無数の緑色の光を見たと言っていた。

第1-3話 非公式な存在（後書き）

「ご覧いただきありがとうございます。」

束とはいつたんこで別れました。

あと、セレンの口調がよく分からなくてかなり困惑ってます。

残ってる、というより味方のリンクスは改めてリストにでもして纏めます。企業が支配する世界じゃないのでここにリンクス達はちゃんと話を聞いてくれます。

では、また次回。

第14話 準備（前書き）

Gatihito様から感想をいただきました。ありがとうございます！

あと、PVが20万を越えました。皆様ありがとうございます！
では、どうぞ。

オールドキング辺りの誤情報を修正しました。

第14話 準備

Side ラーゼ

「・・・・・ラーゼ、少し良いか？依頼に向かわせるリンクスについて意見が欲しいのだが・・・」

「あのなテルミドール・・・そういうのはオレじゃなくてローディーとかネオニダスに相談しろ。オレは”計画”の準備で忙しいんだ」

「むつ・・・そうだつたな、すまない・・・仕方ない、真改と話すか」

降り注ぐミサイルで吹き飛ぶアスピナの施設をバックにした、ハリウッド顔負けの脱出からもうすぐ3年が過ぎようとしている。

今ではオレも世間的には13歳となり、体が徐々に出来上がってきただ。身長もそろそろ170を越しそうなので、これなら前世と同じく190まで伸びるかもしねないな。

逃走先を知られないように敵部隊を完膚なきまでに殲滅し、オレ達はアスピナの追撃を振り切つて”アジト”に到着した。

そして、到着したのはいいのだが、安全を確認して”休んでも良い状況”になつた途端、オレを含めたリンクス全員がその場でぶつ倒れた。

理由は単純、疲れた。

結果的にはなんとかなったが、無限と呼んでも差し支えない数のノーマルとMT、さらにはヘリやら戦車、トドメには爆撃機、それら全部を殲滅して、その後は追つ手を警戒しながらオーバーブーストによる長距離移動だ。体力に余裕のある人間など誰一人としていたかった。

多分オレが最後に倒れたと思うのだが、ネクストが次々と糸が切れた人形のように倒れる光景は少し恐怖を覚えた。その後は全員ネクストの展開が解除され、ぐつすりと眠った。オレを含めて。

そして、先に戻っていたウイスとイエーライに慌てながら叩き起こされ、眠るのを諦めてアジトに残された物を調べることにした。ちなみにウイスとイエーライには邪魔になるから他のリンクス全員に毛布を掛けてやるよといに命令した。

そんで、調べた結果・・・・なあにこれえー。

束さんの私物全般や専用のデータファイルが無くなっているだけで、それ以外は全てそのままで残されている。物資などはもちろん、ISに関する資料やパーツ、さらには試験用に束さんが開発した初期化状態のISコアが十数個ほどあった。当然、最高級の整備施設も残されている。

施設自体の価値もかなりのものだろうが、世界中が欲しがっているISコア十数個の方がよっぽど高価である。

ISコアは完全なブラックボックスとなっているので、その開発法を知っているのは世界中で束さん唯一人だけだ。ISの性能からし

て、一機でも多くのEVAが欲しい、といつのが各国の本音だね。

ちなみにこのアジトの形状だが、地下要塞と云うのが一番しっくり来る形をしている。

基地や施設、などではない、要塞だ。外部から発見されないよう高性能のステルス性能を有しているし、内部のセキュリティーも見てみたがかなり凶悪だ。

今までのアジトは”最低限で生活と研究・開発が行えれば良し”という感じだったのだが、何故か今回のアジトは非常に、いや異常に手が込んでいた。その時の本人は「頑張りすぎちゃった Eベッ」とか言つてたが。

だつて広過ぎるんだよこのアジト。オレも迷わないようになるまでもかなり時間が掛かった。

今になつて思つたが、実は束さんつて未来が見えるんじゃね？

だつておかしいだろ？このアジトの大きさや内部はもちろん、部屋だつて無数にある。全部まとめて見ても、まるで男女混合の大所帯が使用するような設計だ。

束さんがいなくなつてしまつた今は確認する方法は無いが、せつかく貰つたのだ。お言葉に甘えてこれからも使わせてもらお？

施設の状況確認が終わり、他のリンクスも全員目覚め、オレはその全員にある提案、というか、あるお願ひをした。

「オレには帰りたい場所がある・・・だが、そこに帰るにはアスピナや他の敵が邪魔だ。それはお前達も同じだろう? どうだ、手を貸してみないか? うまくいけばお前達も今よりも暮らせるかもしないぞ」

力を貸してほしいというのは本當だが、リンクスは決して善人ではない。この中の何人かはオレの個人事情など知つたことかと思つていることだろう。

だからこそ、自由を得る可能性という言葉でそいつらの注意を引かせてもらつた。これなら余程の奴でなければ協力を前提に考へるはず。悪いが今は一人でもリンクスを犬死にさせるわけにはいかない。結果、利口な奴が多かつたおかげで全員が協力の意思を見せてくれた。さて、まずはネクストの整備プログラムをこのシステムにコピーして全員の機体を整備しなければ。

そんな頃から今までの3年間。オレ達はずっと秘密裏に動き、とある”計画”の為の準備を進めてきた。もちろん、ネクストや生身の肉体を使ったドンパチもかなりあつたがな。

何度も死にそうな目にもあつたが、3年の月日を費やした甲斐あって準備は一通り完了した。

あと、準備を行つていた3年間、他のリンクスの何人かを見つけることが出来た。報告では、遭遇した全員がウイスとイエーイと似た

ような理由で戦闘を仕掛けてきたらしい。

血の氣が多いことだが、結果的に全員無力化され、テルミドールの説得のもと、力を貸すことを約束してくれた。

これでリンクスの人数も増え、戦力も整ってきたのだが、動いてきたのはオレ達だけではなかつた。

実は最近になつてテロリスト連中の中で多用されている兵器がある。

その名はマッシュルトレーサー、通称でMTと呼ばれるそれが破壊活動を行うテロリストの間で頻繁に使用されるようになつたのだ。詳細は不明だが、ISとは違つて足歩行型の機動兵器を見たと言つ報告もある。おそらくノーマルのことだろう。

その兵器の出所はまったくの不明だつたのだが、その兵器を最も使っている組織の名にオレは心当たりがあった。

リリアナ。それがその組織の名前だ。その名を聞いたときの寒気は当分忘れることが出来なかつた。

すぐに協力してくれているリンクスのリストから見てみたが、最悪なことに探していた名前は見つからず、リリアナのリーダーの名前を断定する決定的な材料となつた。

オールドキング。原作では虐殺ルートで主人公と共にクレイドル03を襲撃し、数億単位の人間を歌いながら殺した異端者であり、RCAの一人だ。

その実力はエース級リンクスを集めたORCA旅団の中でも上位に位置するほどであり、アルゼブラベースの逆間接機に、重ショットガンという構成からリンクス戦争時代のN.O、イクバル魔術師と呼ばれたサー・ダナとは師弟関係らしい。

数億人の死者を出すクローズプランでさえ”温い”と切り捨てられるような男だ。歪んでしまったこの世界の現状は奴にとつてさぞかし殺る気を刺激してくれるだろう。

生き残りが一人もいないので、ネクストの目撃情報は無いが、いつかはオレ達と対立するだろう。奴から見てもオレ達の存在は敵とか映らんだろうしな。

Side Out

「・・・GA、オーメル、インテリオルには話を通したし、同じグループやその傘下企業にもおとなしくするように言つたが・・・一応、トーラス変態共の目付け役にセレンを行かせるか？」

「ラーゼ、少しいいか？味方のリンクス全員のリストが出来たんだが・・・」

「ありがとう、メルツエル・・・これを施設から盗んだリストと照らし合わせればまだ発見できていないリンクスがわかる」

メルツエルから渡されたファイルに目を通し、PCに味方になつたリンクス全員と比較を開始させる。

「ところでラーゼ、先程だが、一回目のモンドグロッソ優勝者が決まつたらしいぞ」

ピタリと作業中のラーゼの手が止まる。

「・・・織斑千冬か？」

「いや、違う人間だ。なんでもIIS装備のまま決勝戦を投げ出してどこかに向かつたらしい。おかげで会場はすゞい騒ぎだ」

「なに？・・・確かジュリアスが依頼である近くにいたな・・・
メルツェル、通信を繋いでくれ」

急に真剣な表情になるラーゼ。メルツェルは一瞬戸惑つたが、すぐに頷いて通信を開始する。

織斑千冬が世界大会を放り出してでも優先する存在。それに該当する人間は今ではただ一人、弟の織斑一夏しかいない。

つまり今のこの状況は、織斑一夏に何かあつたということを意味する。

「繫がつたぞ」

モニターが切り替わり、金髪青目の人影が映る。原作ではORCAを作った始まりの5人の内の1人である。

『やあ、ラーゼ・・・私の方でもすでに調べてみたんだが、どうやら織斑千冬の弟が誘拐されたらしいよ、ドイツ軍が情報を提供した

らじいから、もつすぐ黙ざきも収まるだろ?』

「アスピナの仕業つて形跡はあるか?ノーマルやMTなどの情報は?」

『いや、確認できない。恐らく奴等ではないのだろう。』“プラン”の後はわからんが、今は奴等も大っぴらには動けないからな。あと、小耳に挟んだのだが、誘拐された弟、かなり抵抗したらしいぞ?そのおかげで誘拐グループがISを使用、その反応を掘んで場所がわかつたらしい』

『そうか・・・わかった。急な仕事を頼んでもまなかつた、ジュリアス。戻り次第、ゆっくり休んでくれ』

『了解だ、ストレイド』

通信を閉じて、ラーゼは椅子に背中を預ける。メルツェルはその様子を見て、何も言わずに部屋を出て行った。

ちなみに、ストレイドというのはオレのリンクス名だ。これは”道に迷った者”つまりは「迷子」を意味している。原作から取つたといつもあるが、これはオレの境遇からしてぴったりの名前だ。

味方のリンクス全員はオレの名前を知っているが戦場で本名を聞かれるのは少しマズイと考え、今では仕事や戦闘の時にストレイドと名乗っている。

(”プラン”開始間近のタイミングでこの事件・・・偶然か?だとしたら、黒幕は何が目的だった?前回の世界大会優勝者の弟である兄さんを誘拐してなんの価値があつた?)

事態は間違いなく收拾の方向に向かっている。だが、ラーゼはその身に感じる嫌な予感を拭い去ることが出来なかつた。それは、ただ家族を案じる気持ちなのか、未来の不幸を感じ取つた予言なのか、今は誰もわからない。

「いや、事件は解決に向かつてゐるんだ……今は”計画”の達成に集中しよう」

頭を左右に軽く振り、ラーゼは机の上に置かれた計画書を手に取る。「オレ達リンクスの希望『プロジェクト・リヴァイブ』……失敗は許されない」

時を同じくして……

「ほつ、世界最強のＩＳ操縦者が肉親を助ける為不戦敗か……隨分と思い切りがあるが、所詮はそんなものか」

誰も想像できない狂気をその身に秘めた”殺戮者”が、今、動き出そうとしていた。

「まあいい……さて、次の目標は……」

そして、その狂気の矛先は……

「フランス……確かにＩＳショアがトップクラスの会社があつた

な。最近経営が傾いたらしげが、どうでもいい・・・精々、刺激的に殺し気くすや」

再び無差別に振るわれようとしていた。

「I'm thinker to to to to to to . . .」

『迷子』と『殺戮者』・・・・・余命の時は近い。

第14話 準備（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

オールドキングはリリアナの皆さん率いてLet's genocide!!という状態です。

主人公の方は現在仲間達と準備に忙しい状態です。あと、リンクス名はストレイドにしました。

原作で一夏が誘拐された年が分からないので、十三歳の時に誘拐されてもらいました。あと、今の一夏はIS無しでも強くなっています。

ISを使った人は、原作読んだ人は分かるんじゃないですかね？

では、また次回。

外伝1 リンクス名簿（前書き）

高杉ワロタ様、クーロン様から感想をいただきました。ありがとうございます。

現在味方のリンクスとまだ出会っていないリンクスを纏めました。

では、どうぞ。

機体名の誤字を直しました。

外伝1 リンクス名簿

S i d e ラーゼ

「さてと・・・現勢力のリンクスを纏めてみるか・・・一応、わかりやすいように原作のカラーとO.R.C.Aに分けよう」

・カラード

・（『』は機体名）・（　）が付いているのは、一度交戦してテルミドールが説得したリンクス）

N O 2 リリウム・ウォルコット『アンビント』

N O 3 ウィン・D・ファンショ恩『レイテルパラッシュ』

N O 4 ローディ『フィードバック』

N O 6 スティレット『レ・ザネ・フォル』

N O 7 ロイ・ザーランド『マイブリス』

N O 1 2 リザイア『ルーラー』

N O 1 6 有澤隆文『雷電』

N O 1 8 メイ・グリンフィールド『メリーゲート』

N O 2 0 ハイ・プール『ヴェーロノーク』

- N O 2 1 カミソリ・ジョニー『ダブルエッジ』
- N O 2 2 カニス『サーベージビースト』
- N O 2 3 フランソワ・ネリス『バッカニア』
- N O 2 4 ドン・カーネル『ワンダフルボディ』
- N O 2 5 ウィス『スカラーレットフォックス』
- N O 2 6 イエーイ『エメラルドグリーン』
- N O 2 8 ダン・モロ『セレブリティ・アッシュ』
- N O 2 9 ミセス・テレジア『カリオン』
- N O 3 0 チャンピオン・チャンプス『キ尔ドーザー』
(元オリジナルリンクス) N O 1 6 セレン・ヘイズ『シリエジ
オ』
- ORCA
- N O 1 テルミドール『アンサング』
- N O 2 ネオニダス『月輪』
- N O 3 ジュリアス・エメリー『アステリズム』

N 05 真改『スプリットムーン』

N 06 ヴァオー『グレーティッシュア』

N 07 メルツェル『オープニング』

N 010 ハリ『クラースナヤ』

追記

- ・原作のN 05、ジエラルド・ジエンンドリンは施設の記録で死亡が確認されている。機体設計者のレオハルトは現在行方不明。

- ・原作のN 09、ホワイトグリントの搭乗者のデータは施設の記録に存在せず、機体を設計したアーキテクトの情報しか見付かっていない。

「…こんなもんか…んで、これを研究所にあつたリンクス全員のリストと重ねて、まだ遭遇していないリンクスは…」

・カラード

N 08 王小龍『ストリクス・クアドロ』

N 011 ダリオ・エンピレオ『トラセンド』

N O 1 3 ヤン『ブラインドボルド』

N O 1 4 イルビス・オーンスタン『マロース』

N O 1 5 シャニア・ラヴィラヴィ『レッドラム』

N O 1 7 C U B E『フラジール』

N O 1 9 ド・ス『スタルカ』

N O 2 7 パッチ・ザ・ドラッグ『ノーカウント』

• ORCA

N O 4 オールドキング『リザ』

N O 8 トーティエント『グレイグルーム』

N O 9 PQ『鎧士竜』

N O 1 1 プツパ・ズ・ガン『ビッグバレル』

N O 1 2 ラスター18『フュラムソリドス』

S i d e O u t

「あと13人……どういつわけか、全員原作で戦ってる奴なんだよなあ」

一人呟きながらラーゼはへラに貰つた専用ノートパソコンを閉じて席を立つ。

「腹減つたな」・・・食堂行けばなんがあるかな?家事出来るやつが意外に多いおかげで食事は苦労してないけど・・・無かつたら自分で作るか」

欠伸をしながら首の骨を鳴らし、ラーゼは部屋を出て行つた。

外伝1 リンクス名簿（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

まだ遭遇していないリンクスは高確率で主人公と戦闘になる予定です。

味方のリンクスは原作より聞き分けが良い人達なので裏切ることは多分ありません。

では、また次回。

第15話　具現する地獄 前編（前書き）

”レイテルパラッシュュ”様から感想をいただきました。ありがとうございます。

今日は長くなりそなんで分けました。出来れば前半と後半がいいんですけど、中編とか入るかな？

しかも、なんか今回は少し文がグダグダな気がします。

では、どうぞ。

S i d e O u t

フランスの首都、パリ。

大きな雲も無く、太陽が差し込む都市は平和で賑やかだつた。

自然公園などで遊ぶ子供達、買い物を学生達、車に乗つてドライブや旅行に洒落込む夫婦やカップル。

そんな笑顔が溢れる街中、連れの数人と一緒に買い物を楽しんでいた一人の男性が突然足を止めた。

「どうした？」

「いや・・・あれ、なんだろう？」

足を止めた男性が指差す先には、空に浮かぶ無数の黒点が見えた。どんどん近付いているらしく、目に映る黒点は大きさを増していく。少なくとも人間ではないようだ。

よく見てみると、近付いてくるその黒点はパラシユートに支えられて降下をしているようだつた。ISが軍事力の主体となつた今では、パラシユートで降下を行うものはあまりお目に掛かれない。

黒点は遂にその姿がはつきりと見える高度まで降下してきた。気が付けば空を見上げているのは男性達だけでなく、近くにいるほとんどの人間が何事かと空を見上げている。

「あれって……ロボット？」

「何言つてんだよ、ヒュだれり……でも、全部同じトザインなのに武裝は違うな」

「けじや、ヒュならなんでパラシコードで降下して来るんだ？飛べばいいじゃないか……それに、ヒュ（フランス）の主力ヒュはヨーロニア社のやつだろ？あんなヒュ見たことないぞ」

「新型が完成して、実はそのお披露目だつたりして」

「はははは……おこおい、迷惑な話だな」

まったくと畜ひて良いほど危機感を感じず笑う市民に惹かれたように、ロボットはパラシコードを切り離して都市の中に着地した。

至近距離で見るそのロボットは、普通のヒュと違つてかなりゴツゴツとした装甲を持っていた。ヒュの防御力の要は単純な装甲の厚さではなく、絶対防護などのエネルギー・バリアだ。その点から見て、このロボットはヒュにしてはかなり異質な存在だ。

余談だが、エネルギー・バリアの有能性が証明されているので全身に装甲を持つヒュ、いわゆるフルスキンと呼ばれるタイプはかなり珍しいと言われている。

ロボットの手にはマシンガンが握られ、左右の背中部分にはミサイルポッドやグレネードランチャーなどの兵器が搭載されている。

「なあ、やっぱおかしいって……ヒュの武器って確か粒子変

換で扱うんだろう？なんであれは武器を出したままなんだよ

「いや、けどや・・・ISISじゃなかつたとしたら、なんだよこいつ」

その疑問に答えるように、ロボットの一機が動きだした。突然左背中に折り畳んで搭載されていた長い筒状の兵器、グレネードランチャーを開けし、なんの言葉も合図も無くそれを発砲した。

ボオオン！！

一瞬の閃光が放たれ、発砲音が都市内に響き渡る。長い筒状の砲身から放たれた砲弾は、背後に煙を引いて一見の高層ビルに着弾した。着弾。爆発音と共に爆風が四方八方に放たれ、市民の何人かは体制を崩して地面に座り込む。それに続いて何人かの悲鳴が轟き、全員一目散にその場から逃げ出した。

先程まで笑いながら話をしていた人間でも、あのロボットが殺人を行つたのは糸も簡単に理解できたようだ。

だが、彼らは行動するのが遅すぎた。

逃げ惑う人々の背中にロボットは片手に握られたマシンガンを向ける。火力だけならISと同等かそれ以上の兵器。トリガーが引かれれば、人間の体を数秒でミンチにするだろう。そして高層ビルを無言で吹っ飛ばした存在が迷うはずもない。

連續でマズルフラッシュが放たれ、逃げようとしていた人間を絶命させていく。

盛大な血飛沫が舞い、四肢が吹き飛び、痛みによる悲鳴がそれぞれ絶え間なく続いた。

虐殺。そうとしか表現できない行為をロボットは行った。たつた今殺された人間は全て民間人だ。殺される理由などまったく無いのに、為す術なく一方的に殺された。

『・・・・・これは必要な犠牲だ。全ては人類未来のため・・・・・』

ロボットから声が放たれた。それなりに年齢がある”男性”の声だ。ISは女性にしか扱えない。その常識を加えたことで、ロボットの正体がISであることは完全に否定された。

その時、遠方から複数の爆発音が響いた。

住宅街から登る大きな黒煙の数は一つや二つではない、むしろ今も尚増え続けている。

パラシユートによつて都市内に降下してきたロボットの数は軽く見積もつても50以上はあつた。そして、それら全ての人間の行う行動は一つ、虐殺だけ。

数分前まで平和だったパリの街は、今や一方的な虐殺が繰り広げられる地獄へと姿を変えた。

だが、地獄の中で逃げ惑う人々の中、サングラスを掛けた青年が一人、暴虐を行うロボットをよく見ていた。

「・・・・・始まつたか」

Side Out

地獄へと姿を変えたパリの街に向かつて、数十機のISが戦闘機以上の速度を維持して空を移動していた。

カラーリングは全体的にネイビーカラー。膝から下は装甲が薄く、足はスマート延びている。背中部分から伸びるバックパックには4枚の多方向加速推進翼。それぞれのISの腕には既にマシンガンやアサルトカノンが握られている。

デュノア社製、ラファール・リヴァイヴ。

現在被害を受けているフランスの会社、デュノア社が開発した第2世代型のISだ。各国では第3世代のIS開発が進められているが、機体の総合スペックは初期の第3世代型とあまり相違は無い。

現在各国が軍事力として配備している量産機の中では第3位のシェアを持つているが、その数を確立させる特徴は広い汎用性だ。選択した武装次第で遠・中・近の全ての距離に対応が可能であり、クセが無い、量産機の要素をほぼ完璧に満たしてくれている。

「あの、隊長・・・本当なんですか？突然パリの上空に武装組織が現れたって・・・」

「私も初めは信じられなかつたわ・・・本来なら領空に入つた時点でレーダーに発見されるはず。なのに連中は突然パリの上空に現

れた。まるで空中でEISを展開したようだ……」

「でも、その組織が使用している機動兵器から確認されたのは……
・男性の声。つまり、その機動兵器はEISとは別の物」

「それに、なんでフランス……しかも首都を直接襲撃するんで
しょう。目的がわかりませんね」

一人の女性の質問を引き金に、全員が心で思っていた疑問を口にする。

ここにいる誰一人として説明されたパリの状況を信じられなかつた。
今でも怒りの感情より戸惑いの感情の方が大きい。“信じられない”
“ではなく” “信じたくない” のかもしれない。

「とにかく今は急ぐわよ。もしテロリストの目的が虐殺だったら最
悪だわ……ッ！ 散開！！」

先頭を飛ぶ隊長の声は部隊の全員に届き、リヴィアイヴ全機がその場
から弾かれたように離脱した。

次の瞬間、リヴィアイヴが密集していた地点に無数の弾丸が降り注い
だ。隊長の指示が無ければ10機近くがやられていただろう。

離脱したリヴィアイヴ全機がハイパー・センサーの探知に従い、武装を
上空の敵に向ける。

「ほう、避けたか……EISに乗れるだけが才能の全てではない
らしい」

聞こえてきた声は男性のものだった。

そこにいたのは、一機のロボット。見た目は全体的にグリーンの色が入っている。ブリーフィングで見たやつと少し似ているが、全体的に四肢が細く装甲も薄い。一番目を引くのは、膝下からの逆間接の足だろう。

ただ、パリに現れたロボットと同じく両手と両肩に武装を積んでいる。

左手にはロングマガジンを着けたアサルトライフル、右背中にはミサイルポッド、左背中には銃身を置んだチェインガン。これだけでかなりの重武装に見えるが、リヴィアイヴの操縦者達の目を一番引き付けているのは右手に握られている大型のショットガンだ。

細身の外見のせいで異様な存在感を放つそれは、改めて見ても恐怖を感じさせる。直撃を貰えば間違いなく装甲を吹き飛ばされると理解し、隊長を初め全員が警戒を強める。

「流石にノーマルを使つてゐるあいつらじや ILS の相手は無理なんでな・・・悪いがこつから先は通行止めだ。パリの人間を皆殺しにするまで付き合つてもらうぜ・・・運が良ければ絶対防御のおかげで生き残られるかもな」

愉快そうな声を出す男に反応し、リヴィアイヴ全機がトリガーを引こうとする。だがそんな時、全機体のハイパーセンサーが空気中に漂う正体不明の粒子と、新たな敵影に反応した。

いつの間にか部隊を包囲するような形で数機のロボットが空中に浮遊していた。

黒い装甲を纏つたその機体はざっと見て10機以上。異常なまでに肥大化している肩部が目立つたその機体の武装は、ある意味で男性の機体よりも凶悪なものだつた。

右手に持つた長砲身のライフル、これは恐らくかなりの大口径だ。破壊力は先程の大型ショットガンほどではないが、連射力と貫通力を考えれば同じ位に恐ろしい。

そして何より、左腕から輝きを放つて展開されている、分厚く長いレーザーブレード。レーザー兵器という点からその切れ味は想像を絶するものだらう。しかも2、3メートル以上の全高に届く刀身の長さだ、半端な回避では避けきれない。

「無人機だがそこそこはやるぞ？・・・気を付けるんだな」

逆間接の機体が両腕を持ち上げ、周りの黒い機体もレーザーブレードを持ち上げた。対するリヴァイヴ全機も円を作り、それぞれの武器を構える。

そのままの状態で静寂が訪れる。しかし、逆間接の男と隊長の視線が重なり、互いが動いた。

逆間接の機体のアサルトライフル、LABITAと隊長機のリヴァイヴが持つアサルトカノン、ガルムが同時に放たれ、リヴァイヴ全機と黒い機体が空中を駆け抜けた。

「…………どうしよう」

炎上する市街地の中、道路の端にリムジンが一台お釈迦になつていた。車内には黒いスーツを着た男が一人、それぞれ額から血を流して氣絶している。

そして、車のすぐ傍には一人の少女がいた。

背中に届いている美しい金髪と藍色の瞳、将来はかなりの美貌になるであろうその顔は困惑の表情で満ちている。

スーツの男と違つて外見に目立つた傷は無い、精々衣服が少し汚れているぐらいだ。

この少女の名はシャルロット・デュノア。ラファール・リヴィアイヴを開発したデュノア社の社長の娘である。

だがこの少女は、”デュノア社長の本妻の娘ではなかつた”。現在の年齢に至るまで、父とは別に母親と共に暮らしていたのだが、母親の死の後にデュノア社の人間が迎えに来たのだ。

そのままパリにあるデュノアの本社に向かう筈だったのだが、移動中に突然現れたロボットが無差別破壊を繰り広げ、見事にリムジンは巻き込まれ、今に至るわけだ。

「…………どうしよう」

オロオロと動搖した様子でシャルロットはもう一度呟く。

破壊活動を行つていたロボットは何処かに行つてしまつたが、今の
パリはテロの真っ只中だ。まだ少女であるシャルロットに冷静な判
断など出来るはずも無い。

「・・あつ・・・・」

しかし、再び言うが此処はテロの真っ只中。例え状況が理解できな
くても、無差別に死の気配は近付いてくる。

シャルロットの瞳がこちらに近づくロボットを捉えた。こちらに氣
付いているのかはわからないが、死の恐怖を感じてシャルロットは
動けなかつた。

センサーか何かが感知したのか、ロボットの顔がシャルロットをは
つきりと捕捉する。片手に握られたマシンガンが持ち上げられ、大
きな銃口が向けられた。

死ぬ。

そう理解したシャルロットの瞳からは涙が流れ出し、表情が恐怖の
それに変わる。

「イヤ・・・・イヤだ・・・・お母さんつ・・・・・・

ダダダダダダダダ！――！

亡き母を思い、襲い掛かる死を精一杯に否定すると同時に無数の発
砲が響く。

シャルロットは咄嗟に目を瞑つて体を縮こませた。しかし、数秒経つてもその体がロボットの弾丸に撃ち抜かれるることはなかつた。

ボオオン！――！

「えつ・・・・・？」

痛みではなく爆発音が聞こえ、シャルロットは恐る恐る顔を上げる。すると、先程武器を向けていたロボットが全身から炎を吹き出して地面に倒れていた。

何が起きたのかわからず呆然としていると、空気中に漂う緑色の粒子が視界を横切つた。空から降り注ぐその粒子を追いかけると、再び視線が固定された。

純白の装甲を纏い、空中に浮いている一機のロボット。右手には大きめのライフルが握られ、背中には左右両方に翼のようなものがある。緑色の粒子を漂わせながら空に浮くその姿は、まるで本物の天使を思わせる。

「・・・綺麗・・」

シャルロットがポツリと呟くと、突然その天使は視界から姿を消してシャルロットの前に背を向ける状態で再び現れた。

ビクリと肩が震え悲鳴が上がりそうになつたが、それよりも先に目の前の天使が爆発音と共に爆炎に包まれた。しかし、よく見てみると損傷が見当たらず、天使の体が緑色の膜に包まれている。

天使が背中のブースターを吹かせ、その体を前に進める。と言つて

もその速度は凄まじく、ほんの数秒で100メートル以上の距離を移動する。

天使が向かう先には炎上したロボットと同じのが一機。天使を接近させまいとマシンガンをひたすら連射する。しかし天使は一瞬だけ爆音を鳴らしてその場から姿を消し、右、左へと高速移動しながら瞬く間に距離を詰めた。

ロボット2機は怯えたように後退するが、それよりも先に天使の行動の方が早かつた。左腕に取り付けられたユニットが駆動音を鳴らし、金色の光刃を生成する。

天使が流れるように腕を左に一閃。前に立っていた右側のロボットが胴元から両断されるが、その事実を認識する前にもう一機が背後から縦に両断された。

火花を散らし、一機が同時に爆発する。立ち込める炎の中を進み現れた天使の姿を再び見て、自分は助けられたのだとシャルロットは理解した。

だが、お礼を言う前に天使は右手のライフルを量子化してシャルロットの背中と足に手を回し、その体を持ち上げた。所謂、お姫様だつこだ。

「え？・・・あ、あの・・・」

「・・・安全な所に運ぶ。少しの間だけ我慢してくれ

顔を赤くして慌てふためくシャルロットを鎮めるために、初めて天使が言葉を話した。まだ若い、少年とも呼べる程の声だが、冷静に

放された言葉はその正体を一瞬大人だと思わせる。

「・・・・・は、はい・・・」

冷静な声を聞いて落ち着いたのか、シャルロットは頬に赤みを出しながら天使の首に手を回し、機械の装甲を纏つたその胸に体を預ける。

「感謝する」

短く礼を告げ、天使はブースターを吹かせて空へと上昇する。ロボット達からの発見を出来るだけ避けるためなのか、一定の高度に上昇してから天使は移動を開始した。

かなりの高度を上昇したが、シャルロットの呼吸が苦しくなったり、気流による轟風を受けることはなかった。ちなみにその間、天使の周りを浮遊する緑色の粒子の量が多くなったことにシャルロットは気付けなかつた。

少し移動すると、天使はゆっくりと地上に降下する。降り立つた場所は隔壁のようなゲートを備えた一軒のビル。天使がゲートに近付くと、ピピッ！と電子音が鳴り、ゲートが開いた。

「・・・・・ここで待つていて。少しすれば隔壁が開いて中に入れてもらえる」

「あ、ありがとうございます・・・・え、えっと・・・」

「奴らはここまで来ないから安心していい・・・・ではな」

シャルロットを下ろした天使は次の言葉を待たずに背を向けて再び空へと体を浮かせた。

『ストライド、自由時間は仕舞いだ。開始位置に向かえ』

「ちつ・・・了解」

「あの！・・・私はシャル

せめて名を教えようとしたが、天使は背中のブースターから吸気音を鳴らし、爆発的な速度と共に空へと飛び立つていった。

その場に残されたシャルロットは天使が飛び立つていった方向を悲しげに見詰めた。助けてもらつた恩人に名を告げられず、まともに言葉を交わせなかつた。助けてくれたことから酷い人間ではないとわかるが、あの態度には流石に落ち込んだ。

だが、悲しみと共にシャルロットは希望を手に入れた。

”ストライド”。それがあの天使の名前なのかわからないが、それは確かに手掛かりだ。

「ストライド、か・・・・また、会えるかな・・・・」

そう呟いて空を見上げたシャルロットは、頬を赤らめながら嬉しそうに微笑んだ。

「ご覧いただきありがとうございます。」

「フラグが立ちました……いや、まだヒロイン確定じゃないんですけどね？一応候補の一人として……。」

「フランスが大変なことになりました（笑）戦車や戦闘機がやつてこないのは、国土防衛をI.S.に頼ってるから、という設定です。」

「この惨事に主人公、実は暴走寸前です。」

「自律型ネクストはリリアナの誇る数少ない長所です。4で初めて戦つた時のブレードへの恐怖は忘れられません。」

ちなみにこの作品の自律型ネクストはプライマルアーマー展開可能というハイスペックを持っています。予定では他にも色々と……。」

「では、また次回。」

第16話　具現する地獄 中編（前書き）

御酒那 怜牙様、高杉ワロタ様、レイテルパラッシュ様から感想をいただきました。ありがとうございます。

今回で終わらせるのも無理だったんで、中編になつちました。
次回は強制的に後編だけど、纏められるかな・・・

では、どうぞ。

第16話　具現する地獄 中編

Side ラーゼ

『・・・・・気は済んだか？ストレイド』

虐殺という最悪のテロ現場となつたパリ。その都市の中で目を引く建造物、エッフェル塔の数キロ付近でオレはノブリスを解除し、路地裏に身を潜めていた。

耳に付けたインカムからはセレンの皮肉染みた声が聞こえる。多分今のオレはかなり恐ろしい顔をしているだろう。腹の中の怒りを抑えるために握り締めた左手からはポタポタと血が垂れている。

右手でも良かつたが、ライフルの照準に支障が出ると思い無意識に左手になつたようだ。

「気は済んだか？・・・・・随分と笑えない冗談だな。まさか本氣で言つてないよな？」

『・・・・・』

「ふざけんじゃねえぞ！…もうこの都市で何人死んだと思ってる！…それなのにまだ待機だと！？」

『ああ、まだだ。開始にはまだ少し掛かる。それと“何人死んだ”だと？それならお前は今まで“何人殺した”と思っている』

「そういうことじゃねえだろ！…オレがこの手で殺したなら何も言

わねえよ！－黙つてその事実を肯定するし、罪だつて背負つてやる！だが、パリの人達は何で殺された！？何でこれだけ殺されなきやならなかつた！－』

インカムを通して精一杯の怒りをぶつける。狭い路地裏で声が反響するが、今の街の状況で冷静にオレの声を拾える人間など殆どないだろう。

『いい加減にしろ。確かにこの被害はメルツェルの予想を超えたものだが、先程の行動が許されるわけではない。敵ノーマルを2機も破壊し、民間人を救出して非行式のシェルターへ誘導、仕舞いには声まで聞かせてしまつた。もし、あのまま発見され大規模戦闘にでもなれば“計画”そのものが全て水の泡になつていたぞ。・・・お前は自分から志願したんだ。だつたら今は大人しく待機している。10分後に作戦開始だ。いいな？ストライド』

「・・・・了解」

通信が切れたのを確認すると、オレは握り締めた左手をコンクリートの壁に横殴りに叩き付ける。常人離れの筋力によつて壁が奥深くまで砕けた。何でもいいから今はこの怒りをぶつけたかった。

「・・・・ちくしょう」

セレンの言つたことは正しい。オレの言つたことは“自分は悪くない”と言い張る子供の言い訳と同じだ。大局を見ずその場の感情で行動し、全てを台無しにしては意味がない。

わかつてはいる。だが、この地獄を目にして納得など出来るはずも無かつた。死ぬのは戦う人間だけで充分のはずだ。オレは無関係な

人間が殺されるのが最も嫌いだ。

『ストライド、大丈夫か？』

『もうすぐ開始時間だ。開始位置に移動しておけ』

「ジュリアス、ネオニダス・・・・・大丈夫だ、わかつて。そつちはもう配置に着いたのか？」

インカムから新たな声を聞き、座り込んでいた体を起こしながら答える。路地裏からそつと顔を出してノーマルがいないのを確認し、街中を走り抜ける。

頭を切り替えよう。悲しむことなんざ後で幾らでも出来る。今この時、オレにしか出来ないことをしよう。もうこれ以上悲しみを増やさないよ!』

炎上した車や瓦礫が転がっているが、邪魔になるものは全て飛び越えて先に進む。ノーマルに発見されないよう細心の注意を払っているので、この体の身体能力は大いに役立つ。

『私はまだだな。ノーマルの数が想定より多いせいで順調に進めない。アステリズムが使えれば5秒以内で行けるのだがな・・・』

『こちらはあと少しで目的地に着くが、到着時間はお前さん達と同じぐらいだろう。まったく、メルツェルの小僧め、キツイ仕事を押し付ける。作戦開始地点まではネクストを使わず自力で移動しろ、などとは』

どうやら2人もノーマルのせいできちんと進めていないようだ。ネオ

ニダスが言ったように、移動にはネクストを使うなと言われている。だが、リンクスであるオレ達でもノーマルのセンサーを誤魔化することは出来ないし、見つかって逃げ切れる保証も無い。

操縦しているのは人間だが、ノーマルは機械だ。視界がこちらを捉えていなくても距離が近ければ生体反応を探知され発見されてしまう。だからノーマルがその場を離れるのを待たなくてはいけない。

だが、ジュリアスの言った通り数が多い。少し進めばすぐに別のノーマルと遭遇して足止めを喰らってしまう。

ちなみに指定された場所は建物の屋上らしいが、これではその建物にも辿り着けない。

(くそっ！ネクストが使えば奴らの頭上を素通り出来るのに・・・
・ん？待てよ、頭上？)

視線を上に持ち上げる。今オレがいる市街地は同じ高さの建物が並んでいる。一軒一軒の間の距離はそう遠くなく、建物の高さはノーマルの全長よりも大きい。

(地上よりは可能性があるか・・・よし)

近くの家のドアを蹴り飛ばして中に入る。思いつきり住居不法侵入だが、非常事態のため勘弁してもらおう。階段を上り、屋上にたどり着く。思った通り、建物との距離はそこまで遠くない。

屋上の端まで下がり、クラウチングスタートの構えを取る。息を吸い込み、一気に止めると同時に走り出す。よし、この距離なら、いける！！

「・・・・ふつ！・・・」

屋上を蹴り抜く。体が宙に浮き、数秒で隣の屋上に着地する。だが、まだ終わりじゃない。着地の衝撃で勢いを殺さずにそのまま走り抜け、再び跳躍。その工程を何度も繰り返す。

足を止めるな。少しでも速度を緩めれば跳躍に失敗して墜落する。墜落すればすぐさまノーマルに発見され攻撃されてしまつ。

「はつ！・・・ふつ！・・・・・つらあ！・・・ふう、到着だ」

屋上から屋上へと飛び移り続ける作業を続けて数分、肩を上下させながら周りを見渡す。特に大きな音も聞こえないといひ、屋上の上を走り回っていたのは気付かれていないようだ。

『なんだ、やはりストレイドが一番乗りか?』
『ほんの二分もすれば辿り着く』

『ひひひも同じだ。あと2分以内で辿り着く』

『ひひひメルツェル。了解した。ストレイドはネクストの万全な出撃準備を、他2名は開始地点に急行し、到着次第ネクストの出撃準備だ』

『『『了解』』』

通信を終了し、オレはAMSを通して左目の網膜にノブリスの機体情報を表示する。オレのAMSプラグはヘラに貯ったノートパソコンと接続しているので、消費した弾倉を補給する。それが終わって

も時間が余ったのなら装甲の修復を行おう。

最大弾薬数と現在の弾薬数を比べ、必要分の弾薬を充填。先程のミサイルでほんの少し損傷した装甲部分を突貫で修理する。ふむ、この程度の損傷なら内装はともかく外見だけは万全に出来るな。

『ストレイド、聞こえるか?』

「マルツェルか……独断行動の話なら後にしてくれ。ペナルティなら後でいくらでも受ける」

左目の視線を動かしながら作業を行い、マルツェルと話をする。電話をしながら書類を読んでいるのと同じなので大して苦労はない。

『いや、その件なら私が謝罪するべきだ。キミを咎めるつもりはない。本題はセレン・ヘイズからの伝言だ。“戻つたらシユミリーターで徹底的に締めてやる。だから早く戻つてこい”だそうだ』

作業の進行が一瞬止まった。言葉の意味を理解するのに数秒掛かり、理解できた途端にたまらず苦笑が漏れた。まったく、あの女らしい言葉だ。こっちのことは露程も考えちゃいねえ。

ああ、まったくあの女は変わらない。怒りを訴えていた自分がバカに思えて仕方ない。

「はははっ……わかった。なるべく早く戻る……そろそろ時間か。指示を頼む」

『ああ、後は頼んだぞ。……ストレイド、ジュリアス、ネオニダス、待たせたな。これよりプロジェクト・リヴァイブを第2フ

エイズに移行する。全員ネクストを展開、リリアナを殲滅せよ。一般市民の安全はすぐに確保できる、遠慮はいらん』

『『「了解」』』

ゴジマ粒子の光が輝き、全身に純白の装甲を纏う。1秒と掛からずにその工程を終わらせ、ノブリスのメインブースターがオレの体を持ち上げた。他の2箇所からも別のネクストが上昇していく。

白色の装甲を纏った細身のネクストはジュリアスのアステリズム、それと対するような重装甲のネクストはネオニーダスの月輪だ。アステリズムは速さと高火力を両立させ、月輪はトーラス社が作り上げたアルギュロスを基にしている。

突然出現したオレ達をセンサーで捉えたのか、視界に映るノーマル全機がこちらを見上げた。数秒の間を置き、慌てたように敵意を纏つて放たれる無数のミサイルや弾丸。

打ち合わせをしたわけでもなく、ほぼ同時のタイミングでオレ達はクイックブーストで移動。ミサイルすら振り切る速さでその場から姿を消す。

空中に生まれた3つの爆煙。だが、その爆煙が吹き飛ばすはずだった対象はいない。対象であるオレ達3人はそれぞれの武器をノーマルに向いている。

またも同時のタイミングで引き金が引かれる。ノーマル共より圧倒的に数で劣る3つの敵意。だがそれぞれの銃火器に宿した敵意は確実にノーマル数機を撃ち抜き、爆散させた。

「やつと許可が下りてな・・・貴様らには一片の慈悲もくれてやらん。その命、1つたりともこの世には残さん！」

その言葉を最後に、この身はまだ冷酷な死を振り撒く破壊天使と化した。

Side Out

数分前までパリを地獄に変えていたリリアナの人間達は現状を理解できなかつた。

逃げ惑う人間達を殺し、暴力に酔つていた。そんな時、突然センサーが上空に反応を示した。増援かと思い見上げた先にいたのは、空中に浮く3つの機影。

自分達が使つているノーマルとよく似ていてまつたく違うモノだと断言できるその機体は、リーダーである殺戮者と同じものだと、リリアナの全員に一瞬で理解させた。

防衛本能のようにノーマル全機が攻撃を放ち、3機が爆発に包まれたと思つた次の瞬間にノーマル数機が爆発していた。

ライフルを放つたノブリスは浮遊した状態からオーバーブーストを作動させ、ノーマルが密集していいる場所目掛けて突つ込む。ノーマルは弾幕を張るが、ノブリスはオーバーブーストを作動させたまま連続でクイックブーストを使い、糸も容易く突破する。

通り過ぎ様にノブリスの左腕が振り抜かれ、一筋の金色の閃光がノーマル5機を胴元から両断する。ノブリスの背後を狙つてノーマル達が集中砲火を放つが、ノブリスはオーバーブーストを停止させ即座にクイックブーストで急上昇。再び爆音を鳴らし、右に移動すると同時にクイックターンで振り向く。

振り向き様に右手に握られたライフルから発砲音と共に弾丸が放たれ、ミサイル数発と残りのノーマルを正確無比な射撃で蜂の巣にし爆発させた。

戦闘開始からたったの数分で10機以上がやられ、ノーマルの動きには明らかな動搖が見えた。上昇したノブリスを狙つて4機のノーマルが6連装ミサイルポッドを放つ。だがノブリスはその場から移動せず、ミサイルが飛来する方向に体を向けるだけ。

計24発のミサイルが飛来し、ノブリスが爆煙に包まれた。ノーマルのパイロット達は喜色を浮かべたが、その表情は数秒で驚愕に染また。

晴れた爆煙の中には、目立つた損傷を一箇所も負つていらない姿で悠然と浮遊するノブリス。自身の見ている光景が信じられないノーマルのパイロット達はノブリスの全身を覆つているプライマルアーマーの輝きに気付かない。気付く前にクイックブーストで急接近したノブリスのレーザーブレードでノーマルは両断された。

『そんな……あり得ない。なんだあの防御力は……！』

『怯むな！我らはこのような暴力に屈してはならない！』

『そうだ！リリアナ万歳！全ては人類未来のために！！』

通信が混乱し、リリアナの通信が半ばオープンチャンネルのようになれる。その声は当然、3人のリンクスの耳にも届いている。だが殲滅の勢いは衰えず、むしろ勢いが増す。

『……胸糞悪いことこの上ないな。メルツェルに“3機目”とアサルトアーマーの使用許可を頼んでみるか? 少しはこいつらも黙ってくれるだろ?』

『同感だが落ち着いてくれ、ストレイド。そうなるとネオニダスのアサルトキヤノンまで使う羽目になるぞ。市街地に無数のクレーターが出来るなど洒落にならん』

『このような奴らにそんなものを使ってやる価値はない。それにだ。あの機体はお前さんのエース機体だろ? こんなところで見せるべきではない。まあ、気持ちはわかるがな』

ラーザは最初、ノブリスにアサルトアーマーを搭載しようと考えていた。あれはプライマルアーマーを搭載していないノーマルを効率良く駆逐するにはちょうど良い兵器なのだ。

だが、その考えはメルツェルとテルミードールにより即却下された。市街地のど真ん中で全方位に圧倒的な破壊力を振り撒くアサルトアーマーなんぞ使用すれば被害が計り知れないと、まったくの正論だ。嫌悪感を隠さないリンクス3人はテンションがMAX状態のリリアナの連中を凄まじいスピードで殲滅していく。

ノブリスは空中から、密集しているノーマルに真上や側面からライフルで奇襲を仕掛け、即座に接敵してレーザーブレードで残りを沈

める。

アステリズムはノーブリスを上回る速度で移動し、反撃する暇など与えず左手のハイレーザーライフルと右背中のレールガン、HLR7 1 - VEGA と RC01 - PHACT でノーマルを撃つ。

動きすら捉えられないのだ。レーザーライフルやレールガンなど回避できるはずもなく、1発の射撃でノーマル数機が溶解し、吹き飛ばされる。

攻撃が掠りもしないノーブリスとアステリズムとは違い、月輪にはノーマルの砲火が当たっていた。

全て直撃を受けているわけではなく、距離とタイミングを見切つて7割ほどの攻撃を回避している。残りの3割も堅牢なブライマルアーマーと装甲に完全に止められ、損傷と呼べるのはまったくない。

その様子に恐怖を感じたノーマルは後退しようとするが、致命的な隙を逃さず放たれた左手のプラズマライフル、FLUORITEと右手のハイレーザーライフル、CANOPUSが即座に息の根を断ち切る。

目にも留まらぬ高速移動、鉄壁の防御力、ノーマルを数発で仕留める火力。戦力差を物ともしない圧倒的な戦闘能力を振るうネクストを前に、リリアナ連中は再び恐怖のどん底に叩き落された。

『だ、ダメだ・・・・葉が立たない・・・!』

『バカな！相手はたつたの3機なんだぞ！？』

『分散しては各個撃破されるだけだ！全機集まれ！リーダーが戻るまで持ち堪える！』

生き残ったノーマル全てが一箇所に集まり、全方位を警戒する。防御に徹した陣形、ISが相手でも簡単には崩せないだろつ。しかし、その陣形は3人のリンクスにとっては都合が良かつた。

『いたぞ！』

センサーが反応を示し、ノーマルの全機が反応先、上空を見上げた。

そこには破壊天使、ノブリスが1機だけで空中に浮遊していた。胸部アーマーから放出されたコジマ粒子が周囲に漂わせ、ノーマルの集団を見下ろしている。バイザーで表情はよく見えないが、少なくとも笑顔を浮かべているとは思えない。

『撃て！撃ちまくれ！…』

叫ぶような命令の後にノーマル全機が全ての火器を放つ。だが破壊天使はその場から動かず、プライマルアーマーで全ての攻撃を受け止める。

俯き気味だった顔が少し持ち上がり、破壊天使の羽が兵器へと姿を変えた。マルチレーザーキヤノンの発射口全ての照準が密集してい るノーマルに合わせられる。

『マズイっ！…に、逃げ…！』

直感で危険を感じ取ったのか、ノーマルはその場から逃げようとする。だが、破壊天使はもはやリリアナの連中に慈悲をくれてやるつ

もりはなかつた。

「消え失せろ」

底冷えするような低い声。その言葉が死刑宣告となり、6つの白い閃光が放たれた。

着弾した裁きの光は大爆発と共に暴虐とも言える破壊力をもたらし、空間全体を振動させる。余波として炸裂した白い光の奔流は広範囲を飲み込んだ。

光の奔流が収まると、着弾点には大きめのクレータだけで、ノーマルが1機も残っていなかつた。爆散したか、それとも蒸発したか。どちらにせよ、元々索敵能力の高いノブリスのレーダーには何も反応が無い。全滅したのは確実だろ。

マルチレーザーキャノンを収納し、近くのビルの屋上へと着地するノブリス。すぐにアステリズムと月輪も合流する。

『相変わらず凄まじい破壊力だな。お前の射撃は正確だから恐ろしいものだ』

『これでも出力は抑えてある。一箇所に集中させて撃てば破壊力は充分だ。それに、単純な破壊力ならネオニダスのアサルトキャノンのほうが上だろ』

『確かにそうだが、アレは少し速度が足りないな。簡単に直撃せられるのはシユミレーターでもあまり無かつた。そういえば……トーラスの連中がお前にもデータ採取を頼もつかと言つていたが』

『やめてくれ、想像したくも無い外見と性能になつちまう。しかし、これで終わりか？随分とあつけない気が……ツ！』

3人の第六感が何かを感じ取り、同時にその場からクイックブーストで離脱する。それはまさにトップランカーのみが実現できるような洗練された回避運動だった。

だが、3人の耳に聞こえたのはその動きを褒め称えるような拍手ではなく敵性存在のロックオンを知らせるアラーム音と無数の発砲音。その直後、真上より無数の銃弾が降り注いだ。その威力はノーマルのものより強力で、ビルの屋上を数秒で穴だらけにした。

システム感知よりも速く移動した3機は別のビルへと着地、屋上の地面を装甲で覆われた両足で抉りながら強引に減速する。減速しながら3機はそれぞれの火器を上空に向けた。

「こいつは驚いた。つい先程奇襲に失敗したんで、工夫を加えてみたんだが。まさか今のタイミングで避けられるとはな」

視線の先にいたのは総数、13機のネクスト。空中に浮遊したまま左手に巨大なレーザーブレードを展開している自立型ネクストは死神の集団にも見える。そして他とは外見が異なる1機がいる。

アルゼブラのパーティを主体となっており、右手に対ネクスト戦用の大型ショットガンを装備した逆間接のネクスト。オールドキングのネクスト、リザだ。

その姿を見て、ライフルを握るラーゼの右手に力が増した。バイザーに隠された目には明確なる殺意が渦巻いている。

「よつ、『首輪付き』……随分と変わったみたいじゃねえか」
対する殺戮者は、己に向けられた殺意を感じたかのように笑みを浮かべ、ラーゼを視界に捉えた。

第16話　具現する地獄 中編（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。

主人公、セレンさんにハツ当たりしてしまい反省しています。戻つたら地獄を見ること間違いなし。

今回も主人公には遼機がいます。前回とは実力が違いすぎてもはや規格外のレベルですが。

ところで、ノブリスの羽レーザーをアサルトキヤノンに代えた姿を考えてみたのですが・・・何かイヤだな。

あと、ノブリスの戦闘描写がわかりにくかつたらプロモの戦闘シーンを思い浮かべてください。イメージ的には、ほとんど同じです。

“プラン”の詳細説明が未だほとんど無くてスイマセン。次回で説明できると思います。あと古王の呼び方の理由も。

では、また次回。

第17話 具現する地獄 後編（前書き）

お久しぶりです。滅茶苦茶遅くなつてしまひました。

では、どうぞ。

あ、やうだ。どうでも良いくさび、／＼にマークライトとカラサワが出るらしいのでとても嬉しいです。

第17話　具現する地獄 後編

Side Out

上空に浮遊する13機のネクストとそれを三角形状の配置で見上げる3機のネクスト。詳しく分ければオールドキングのリザと12機の自立型ネクスト。それを見上げる3機はラーゼのノブリス、ジユリアスのアステリズム、ネオニダスの月輪だ。

武器を構えるラーゼ達とは対照的にオールドキング側は武器を構えていない。それよりもオールドキングはラーゼとの会話に気を向けている。

「首輪付きだと？・・・随分と捻りの無い呼び方だな」

『おいおい、昔の自分と一緒に間違つて記憶まで捨てちましたか？アスピナの施設にいた頃、俺はいつもお前をそう呼んでただろうが“魂”はアスピナ機関で過ごしていた頃の記憶を知らない。本人は皮肉のつもりで言つたのだろうが、それは事実だ。ラーゼの

『なんだ、マジで記憶飛んでんのか？一切の感情が無く、その瞳はこの世界を見ていない、だが命令には忠実に従う。お前は“自分”という概念を一つも持つていなかつた。俺達に付けられたあの首輪がお前以上に似合う奴はいなかつただろうな』

昔のことを語るオールドキングの口調は何処か楽しそうだった。だが、ラーゼは奴に首輪付きと呼ばれた別のリンクスを知っていた。その人物がしたこと、その結末を知っているラーゼは首輪付きとい

「名前で呼ばれて良い気分にはなれなかつた。

「オレ自身は『めんどな』あまり氣分の良い呼び名じやない……とこ'うか、武器を向けられてるのに随分余裕だな」

『話をせずにぶつ放すほどお前等は無能じやないだろ。それに、まさかと思つが一撃で仕留められるとは思つてねえよな?』

ラーゼ達3人とオールドキングの距離は直線距離でおよそ200メートル。ネクストの兵装でも目標に着弾するまでは最低でも1秒、遅い場合は2秒掛かる。クイックブーストで距離を詰めても同じくらいだらう。

加えて、ネクストにはプライマルアーマーがある。ノブリスのライフルでは零距離で撃ち込まない限り致命傷にはならない。アステリズムと月輪のハイレーザーライフルならばダメージは『えられるだろうが、簡単に当たるほどオールドキングの実力は低くは無い。

(背中のこいつなら……いや、武装を開いてる間に逃げられるだけか……)

ラーゼは一瞬背中のマルチレーザーキヤノンに目を向けたが、すぐに無理だと理解して視線をオールドキングに戻した。ジュリアスとネオニダスもラーゼの様子を見て動かない。

そんな時オールドキングが動き出した。

「まあ、話をしても結局は殺し合つことになるがな……街の生き残りを殺すにしても、お前等が連れてきた部下共をやつてくれたせいで人手が足りん」

言葉の後に、空中で沈黙していく12機の自立型ネクストが駆動音を鳴らして動き出した。ラーゼ達のバイザーがコジマ粒子の発生を知らせた。全機がプライマルアーマーを開いたのだ。

「そつちも俺を見逃すつもりはないだろ？なら……始めようぜ」

12機の自立型ネクストが一斉に右手に持つライフルを持ち上げた。自律制御を担当しているA.I.が一瞬で照準を定め、間を置かずに即発砲する。ちなみに12機の照準は……全てノブリスに向かっていた。

「え？ ……ちょっと……何でだあ！？」

予想外の展開に一瞬思考が凍結したが、ラーゼの反射神経にAMS プラグが反応し、ギリギリのタイミングでクイックブーストの回避が間に合つ。

自立型ネクストの5機が大型ブレードを開き、ノブリスに急接近した。残りの機体は絶えず集中砲火を続けている。

流石に反撃する余裕がなく、ノブリスは12機の自立型ネクストを連れて徐々に後退していく。

「（。 。 ） ジュリアス、ネオニダス、オールドキング

ジュリアスとネオニダスは、まさかラーゼだけに照準が往くとは思わなかつたのか呆然としていたがすぐに我に返つて後を追う。ただおかしなことに、オールドキングはその場からまったく動かない。

「おかしい・・・攻撃対象は自己判断に任せたが、まさか全ての機体があいつを狙うとは・・・」

こんなはずじゃなかつた、という風に誰にも聞き取れない声で呟いた言葉には、確かな罪悪感が宿つていた。敵とはいえ、この展開はオールドキングが望んでいたものと何かが違つ。とても重要な何かが。

Side ラーザ

一言だけ言わせてほしい・・・・・・・・・・・・どうしてこうなつた！？

いや、確かにオレは敵だけど・・・・この扱いはいくらなんでも酷くない！？普通に考えれば12機を他と均等に分けて4機位で襲つてくる流れだろこの場面は！！

12対1とか、何これ怖い・・・・いや、「冗談抜きの現在進行形でマジ怖いよこれ。

A.Iの正確な射撃と当たれば即死のブレードの猛攻。12対1といつ圧倒的に不利な状況でオレは迫り来る攻撃を凌ぎ続ける。

一点に集中すれば数秒でノブリスのプライマルアーマーを貫く無数の砲火を連續クイックブーストで避け続け、タイミングを見てライフルを発砲し妨害する。振るわれる大型ブレードには自分のレーザ

一ブレードで受け流してロースを逸らすといつ離れ業で避け続けている。

出力ではじつが圧倒的に負けてるので、ブレードが拮抗していられるのは2秒程度。小さなミスでも、それで直撃を貰えば致命傷を負う一瞬の作業だ。

AMS適正の成せる技?否だ。AMSの役割は究極的にリンクスとネクストを神経接続で繋げることであり、この回避法は慢心ではなく、オレの集中力と反射神経が可能にしている技だ。ブレードの扱いで右に出る者がない真改でも、この回避法は何度も出来るものではない、と言っている。

まあ、弾切れでも起こさなければ出力が上のレーザーブレード相手に近接戦闘なぞやらんだろうし、そもそも今のオレの状況そのものがレアなんだがな。

ジュリアスとネオーダスもオレを追つて来ているだろうが……。
来てるよね?

追いついてもこの状況じゃタイミングが難しいだろう。よし、少し調子に乗つてる自動人形共に少し炎を据えてやるか。

大型ブレードを振るつてくる自立型ネクストは全部で5機。一見休むことなく迫るブレードの猛襲なのだが、対応している中で気が付いた。こいつら、AI同士でフォーメーションを組んで攻撃し、それと同じ工程を何度も繰り返している。つまり、全機がそれぞれ同じ動きで何度も攻撃しているのだ。

とすると、良く見れていれば攻撃のチャンスがあるはずだ。

左から迫る首元を狙つた斬撃。受け流しをやめ、意識を大型ブレードの刀身ではなく、その矛先に集中させる。最高のタイミングを見極め、矛先に左腕のユニットから生成された金色のレーザーブレードを左逆袈裟に振るい跳ね上げる。

高密度のレーザーが衝突し、一瞬だけ凄まじい火花と閃光が迸る。だが所詮は一瞬、すぐにそれは消滅する。そして閃光が消滅すると、大型ブレードの刀身は本来のコースから大きく上に逸れていた。

オレのブレードの出力ではどうやってもこいつらのブレードに正面から張り合えない。単純なパワーでは負けていないがほんの2秒の間に押し切るのは難しい。

そこで狙つのがブレードの矛先だ。大剣のような大型武器でも矛先の軌道を変えてしまえば、その斬撃のコースは大きく狂う。実際、矛先は刀身よりも軌道が逸らしやすいのだ。

休む間もなく反対側から右腕を狙つた横薙ぎの斬撃が来る。再び矛先に意識を集中させ、振り上げた左腕のレーザーブレードを叩き付けるように振り下ろす。

巨大な刀身は再びその行き先を大きく狂わされ、オレの右腕の肘関節を狙つたはずが右足の爪先を僅かに掠るという結果に終わる。

続いて、正面から迫る機体がブレードを持ち上げ、唐竹に振り下ろそうとしている。攻撃のパターンが同じなら、次は後方から2機が間を置いての攻撃が来るはず。

ここだ。ここが連携を崩せる点だ。

持ち上げられたブレードが振り下ろされ、前方に傾き始めた瞬間に前方へクイックブースト。一瞬で斬撃の懷に入り込み、左腕を一閃。手応えを感じるよりも先に右足で膝を放つ。

「・・・・・はっ！－！」

自立型ネクストの左腕が肘の先から両断され宙を舞い、ノブリスの右膝が胸部装甲の外面を破壊して深く突き刺さる。これだけの近距離ならばプライマルアーマーは役に立たない。

右足を引き抜き、右手に握ったライフルを装甲の内部に突き刺す。即座にライフルのセーフティをフルオートに切り替え、突き刺したまま引き金を引く。右手に絶え間無く振動が伝わり、装甲の中でマズルフラッシュが輝いている。

2、3秒で装甲を貫通し、自立型ネクストのカメラアイから光が消える。オレは突撃型ライフルから手を放し、機能を停止させた自立型ネクストの右手から長砲身のライフルを奪う。そして、もはや用済みとなつた自立型ネクストをオレの後方、つまり背後から大型ブレードを構えて近付いてくる2機目掛けて蹴り飛ばす。

機能が停止しているのは気付いているだろうから恐らく奴らは斬り捨てるだろう。だが、そいつには少し役に立つてもらひ。

拝借したライフルを構え、蹴り飛ばした敵の背中、メインブースターに狙いを集中して発砲する。今さらだが、ゴジマキャノンじゃなくて実弾ライフルなんだな。

しかもこれ、ノブリスのライフルより装弾数も威力も上じやないか

?見た目は、MR-R100Rに似てるな。

命中と共に空中で機体が爆散。後方から接近していた2機は爆発に巻き込まれた。これなら少しの間足が止まり、近距離で爆発を受けたのでプライマルアーマーも少なからず減衰しただろう。

集中砲火を行つてゐる残りの自立型ネクストにライフルを発砲し牽制、それと同時進行で両背中のマルチレーザーキヤノンを起動。照準を付けず、自立型ネクストが密集している場所目掛けて計6発の閃光が走る。

敵は散開するが、1機だけ回避が間に合わず爆発する。これでやつと2機か。やはりゲームのようにはいかんな、考えていたよりも疲れる。

放火が途切れたのを確認し、マルチレーザーキヤノンを収納して背後へクイックターンで振り向く。方向転換終了と同時にオーバーブーストを起動。爆発で足止めを喰らつた2機目掛けて急接近する。

2機はオレを迎え撃つよつに大型ブレードを構えるが、あれほど巨大なレーザーブレードだ。振るうよりも先にオレが近付くのが速い。

「・・・・お、らあ……」

クイックブーストでさらに加速。左腕のレーザーブレードで左の敵の胸部をぶち抜き、同時に右の敵の頭部を衰えぬ勢いで放った右足の蹴りで粉碎する。

突き刺さつたままのレーザーブレードを横へ振るつて敵を両断し、頭部を失つたもう1機が体勢を整える前にクイックブーストで接近、

同じく両断する。そのまま急降下し、EN回復の為にビルの上に着地する。

「これで4機か。

空を見上げると、先程レーザーキャノンの発砲で散開した敵が体勢を整えて空中で再び右手のライフルを構えている。その中にはオレにブレードで近接戦闘を仕掛けてきた5機の内の1機もいた。どうやら単機で来るほどバカではないようだ。

上昇とクイックブーストの信号を送ろうと頭の中で意識する。しかし、オレが動き出すよりも前に敵共の後方から飛んできたレーザーが敵を2機貫いた。オレに攻撃を集中させていた自律型ネクスト8機は慌てたように後ろを振り向く。

オレは視界で確認せず、バイザーに表示されているレーダーに目を移す。8機の敵に接近する2つの友軍シンボルがある。先程のはアステリズムと月輪のハイレーザーだろう。

『すまん、遅くなつた。あとは私達で引き受ける』

『にしても、流石だのう。12機の敵を相手にしながら既に4機を落としたか』

「大したことじやない。この程度セレンの奴なら、自動人形に何を手間取つている、とか言つて説教してくるよ・・・まあ、とにかくそいつらの相手は任せた。オレには別の相手が残つてゐるんでな」

通信を終了し、もう一度レーダーへ目を移す。集まつている8機の自立型ネクスト、それと交戦する友軍のネクスト。だが、もう一つ。

敵性勢力を示す赤いシンボルが残っている。

その場所は・・・・・・・・・オレの真上。

B.i.i.i.i.i.i!-!

耳元でロックオン警報が鳴るよりも先に脳から電気信号が走り、ブースターが爆音を鳴らした。純白の装甲を纏つたオレの体は一瞬で音速の壁を突破し急加速する。

だが、オレの聴覚はブースターの爆音と共に大きな発砲音が鳴ったことに気が付いた。そして、気が付くと同時に急加速中のオレの左肩が重い衝撃に襲われ、AMSによるフィードバックが痛みとなつて痛覚を刺激した。

「ぐう！・・・・ちつ・・・・」

やられつ放しで済ます気は無い。軽い痛みを無視してライフルを発砲音が聞こえた方向へ放つ。放たれた弾丸が少し届いたのか着弾の反響音が耳に聞こえた。

不意打ちは喰らつてしまつたが、姿を捉えたのなら当てるのは難しくない。だが、どうやらダメージはオレの方が上のようだ。機体の損害報告を見ると、左肩の先端装甲が少し吹き飛んで掲げている。

『今のも少し掠つた程度か。まったく、反応速度なりマジで獸並だな』

呆れた声でオレを見下すのはオールドキングのリザ。クイックブーストと同時に聞こえた発砲音の正体である対ネクスト用のショット

ガン、SAMPAGUITAが異様に目立つ逆関節の機体は攻撃の手を止めない。

左背中のローゼンタール製チエインガン、CG-R500を起動させ、無数の弾丸をシャワーの如く降り注がせる。オレはバッククリックブーストで後退して即座に上昇する。

オーバーブーストで突撃しながらライフルを連射し、左腕のレーザーブレードを起動させる。集中的に当たらなければあいつのチエインガンはノブリスのプライマルアーマーを突破できない。

それは当然あいつも承知の上なのだろ？。チエインガンの弾幕を止めず、ショットガンの照準をオレに向けてくる。当たればプライマルアーマーを吹き飛ばされ装甲が吹き飛ぶだろ？。

だがオレは回避を行わず、クイックブーストで真っ直ぐリザへ突っ込み左腕のレーザーブレードを突き出した。爆音の後に発砲音が響き、散弾が当たった右肩に衝撃と激痛が走った。

だが、やられっぱなしではない。こちらのレーザーブレードはリザの右背中に搭載されていたハイアクトミサイル、POPLAR01に命中した。

突撃するような接近だつたため、ノブリスはリザに激突する。全身に重い衝撃が走るが、オレは歯を食いしばってリザの腹部を蹴り飛ばし即座に離れる。その後、リザが慌てたように背中のハイアクトミサイルをパージしたが、間に合わずすぐに爆発した。

レーザーブレードが命中したことによって搭載されているミサイル全弾が爆発したのだ。あの近距離ではプライマルアーマーも役には

立たなかつたはず、確実に生身の肉体に傷を付けられたはずだ。

『……いつてえな、くそつたれ。普通あそこは避けるだらうが・・・』

「はつ・・・マニュアル通りに動いてネクストに勝てるかよ・・・」

爆煙の中から現れたリザの装甲は左半身が硝煙で真っ黒に染まっていた。爆発を受けたのは左肩か、出来れば右肩と一緒にショットガンを潰したかつたが・・・。

オレも右肩に喰らつたショットガンのダメージで右腕はそう長く動かない。オールドキングも左腕を満足に使えないだろうが、主力兵装のショットガンが残っているので不利なのはオレかも知れない。

・・・・・いや、待てよ。確かあのショットガンの弾数は1080発のはずだ。残弾にはまだまだ余裕があるはずなのに、なんであいづはショットガンをあまり使ってこないんだ?

・・・・・ああ、そうか。恐らく他の戦闘で弾薬を消費したんだ。相手はフランス政府のIS部隊が妥当なところか。よし、ショットガンの残弾が切れ掛けているなら勝機は充分ある。

同時のクイックブーストでその場から姿を消し、互いにライフルを撃ち合う。だが、互いに腕が満足に動かないのとともな照準が付けられず、うまく当たらない。

「どうしてこんなことを、と聞くのは無粋か?」

『いや、それでもねえさ。むしろお前がそんな質問をする方が意外

だ』

クイックブーストで肉薄してレーザーブレードを横薙ぎに振るうが、上下の運動に優れる逆間接の急上昇で回避される。オレはそのままリザの真下を潜つて背中にライフルを近距離で発砲する。

ライフル弾がリザの装甲を穿つが、その命を絶つより先にお返しでショットガンが絶え間無く連射される。プライマルアーマーが一瞬で消し飛び、それでも威力が劣れない散弾がノブリスの装甲各所に弾痕を作る。

『アスピナの施設を抜け出して、俺は今の世界をこの目で見た。女尊男卑、だつたか？思考が他のよりいかれてる俺にも歪んでると思える世界だつたな。・・・いつ頃だつたつけか。街中で男を奴隸みたいに扱つてた女がムカついてよ。その女を殺して、変えてみるかつて思つたんだよ』

「それがどうして大量虐殺に繋がる。この地獄で死んだ者にはもう男も女も何もないぞ」

『簡単な理屈さ。人が大量に死ねば国が動く。そうすれば戦力としてIJSが駆り出される。やつてくるIJSを全部ぶつ壊しちまえば女は偉くなくなる。そういうことさ』

近距離を保つたままライフルを発砲してレーザーブレードで振るう。リザは残弾を惜しむ様子など欠片も見せずショットガンを連射する。互いにクイックブーストで攻撃を避け続けるが、少しづつダメージが蓄積していく。

ライフルとショットガンが交差するように狙いを定め、クロストリ

ガーのような状態になつた。迷い無くトリガーを引くが、どちらも弾丸が発射されず空砲音を鳴らした。どちらも弾が切れたのだ。

左腕のライフルはすでにオレがブレードで斬り落としたので残つた武装はチェインガンのみ。

だが、オレとオールドキングは基本の行動など関係無しに、右手に持つたライフルとショットガンの銃身を互いにぶつけた。簡単に言えば銃身で殴つたのだ。弾が切れた銃火器の使いようなどこれくらいしか思い付かない。

「単純すぎるし穴だらけだ。例えお前が現存する全てのISを破壊したとしても、ISコアの開発法を知っている篠ノ之束が生きていればISは無くならない」

「なら篠ノ之束も殺せばいい。女もう一人殺すぐらい大したことはない」

「大したことはない、か。その過程で死んだ人達は大いなる犠牲つてやつか？」

「違えな。人を殺すのに犠牲も大儀もねえよ。俺はただ殺してるだけだ」

互いに弾く勢いで距離を取る。すぐさま急接近して、オレはライフルを右薙ぎに振るい、オールドキングは重ショットガンを縦に振り下ろす。銃身同士が再び衝突し、轟音を鳴らす。

そのまま隣を通り過ぎよつとしたが、オレは背筋に強い寒気を感じてオーバーブーストを起動し、その場から急速に離れる。

直後、コジマ粒子の閃光と共にリザを中心としたアサルトアーマーが放たれた。ノブリスのプライマルアーマーが一瞬で減衰し、左半身と背中を高熱で焼かれたような激痛が襲う。

オレは両背中のマルチレーザーキヤノンを開け、お返しとしてぶつ放す。アサルトアーマーを使用した直後なら奴も今は丸裸のはずだ。

しかし、アサルトアーマーの発光とコジマ粒子の乱流のせいで照準がまともに定まらなかつたせいでリザに命中したのは6発中1発のみ。それでも一発だけで破壊力は大きく、僅かに当たつただけでリザの左肩を装備ごと溶解させた。

これでもう奴に残っている武装は弾切れのショットガンとアサルトアーマーのみだ。ショットガンは近付かなければただの重りだし、アサルトアーマーは距離を取つていれば簡単には当たらない。

しかし、やはり原作ORCAのNO4、テルミニドール程ではないが強い。ショットガンの残弾にまだ余裕が残されていたら少しやばかつたかもしれません。

「まだ続けるか、オールドキング？」

「……なるほどねえ、有能な人形が感情を持つば強くなるか……んで、どうすんだ？その物騒な翼で俺を殺すのか？」

「もちろん殺してやる。楽に死ねると思うな……だが、その前にやることがあるんでな。殺すのはその後だ」

「ああ？俺を殺すより優先することがあんならお前等何しに来やがつたんだ」

オールドキングの問いかけにオレは返答せず、左手の人差し指で真下に広がるパリの街を差す。オールドキングは数秒街を見下ろしたが、何もわからず僅かに首を傾げた。

だが、何かに気が付いたのか今度はバイザーに光を点して再び街を見下ろし、オレが教えたかつたものが何なのか気付いた。

生きている人間だ。

数十機のノーマルの大群が虐殺を繰り広げた街の中、無数の死者が生まれたと同時に、同じ位の逃げ惑う生者がまだ残っているはずだ。だが、今のパリ市街には生者が一人も見つからない。

生きている人間がいない。違う、それなら市街には山のように大量の死体が転がっているはずだ。だからこそオールドキングはオレの教えたかったことを理解し、バイザー越しにオレを睨み付けた。

「テメエ・・・・ツ！？・・・そういうことか！お前等、俺を戦闘に集中させるために実力を抑えてやがったなあ！！」

一発で正解を導き出したのは見事としか言い様が無いが、気付くのが遅すぎた。もう街中でこいつらが殺せる人間は一人もいない。

まったく、流石はテルミドールとメルツェルの選抜メンバーだ。思つたいたよりも速く仕事を終えてくれた。

初めて聞くオールドキングの怒りの声。確かに負の感情が籠められ

たその声に対しても私は口元に笑みを浮かべて答えた。

「なんだ、本気だと思ったか？・・・悪いな、メルツェルの指示で時間を稼げって言われてな。殺すの我慢するのは大変だったよ。・・・ああ、そうだ。どうせなら本当の目的を見せてやるよ

AMSを通して所有するデータバンクの中からある映像を選択して再生する。今のノブリスはISに使用されている技術の幾つかを導入しているので、スクリーン通信の応用で映像を外部に映すことも出来るのだ。

空中に表示されたスクリーンの中に映っているのは、ノイズが入ったモノクロ映像の中に揺らめく一枚の黒い旗。その旗にはアルファベットが縦に4つ描かれ、『ORCA』と書かれている。

『諸君、お初にお目にかかる。我らの名はORCA旅団。私は組織団長、マクシミリアン・テルミドールだ』

第17話　具現する地獄 後編（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

申し訳ありません。試験のせいであつたく投稿が出来ませんでした。
あと、やっぱり今回で最後まで纏めるのは無理でした。しかも後半
少しグダグダな感じがする。

最後に映した映像はゲームの作戦説明と同じで、旗が出てくるアレ
です。

次で本当にこの事件は終わらせたいと思います。えと、後編の次だ
から・・・終編とか？

主人公、自立型ネクストにモテモテです。オールドキングも予想外。
だが、この程度で主人公の力は全てじゃない。まだまだ強いし、強
くなっています。

では、また次回。

第1-8話 ORCA旅団、設立（前書き）

ギャラリー様から感想をいただきました。ありがとうございます。

更新遅くなってしまってすいません。

あと、身勝手ながらキャライメージ大きく変えました。

では、どうぞ。

第18話 ORCA旅団、設立

Side Out

突如流された映像。どういうわけか、それは政府と代表的な企業の情報ラインのみに放送された。

『まず、このような形でしか話を持ちかけられない無礼を詫びよつ。胸を張つて大通りを歩ける立場ではないのでな、失礼する。

現在この映像は、各国の政府と大規模企業のトップクラスのみに伝わるよう配慮している。情報統制でミスをしなければ、民間人に不要な混乱は起きないだろつ。

この映像を見ている組織ならば、今パリで起きている悪夢のようなテロは知っているだろう。もし心の中で納得が出来ていらない者の為に言おう、これは事実だ。今までに、映されている通りテロは行われている。

そして、このテロを実行したテロ組織、リリアナが使用した機動兵器がIS^{インフィニッシュ・ストラクツ}とは異なるものだというのも分かつているだろう。

この機動兵器は”アーマードコア”、一般的な呼称ではノーマルと呼ばれている。IS程の性能ではないが、操縦訓練をすれば男性でも乗りこなせる兵器だ。この兵器の登場が今の世界にどういった影響を及ぼすかは、言つまでも無いだろう。

さらに、リリアナの指導者である男が使用した機動兵器、これは”アーマードコア・ネクスト”。操縦する人間の実力次第ではIS数

十機分の戦力となるだろう。また、リリアナの指導者と交戦している白い機体は我々ORCA旅団のメンバーだ。

ここまで言えば気付いただろうが、私達はそのネクストと操縦者を現段階で30近く戦力として所有している。ただ、テロを起こしているリリアナを我々は明確な敵対勢力と認識しているので、奴らとは敵対関係にある。奴らの仲間ではないと心から誓おう。

とは言つても、所持している戦力からして恐らく我々も警戒されているのだろう。

さて、よひやくここで本題だ。

私達が今回テロ組織を撃退し、このような情報を流したのは、我々の存在を知つてもらうためだ』

黒い旗が退けられ、新たに表示されたのは一つのデータファイル。

そこには、リンクスやネクストについての詳細。さらにはAMS、その理論を構築したアスピナ機関についても書かれている。

『このデータは映像終了の1時間後に転送されるようになつていて。情報は全て事実なので、幾らでも調べてくれて構わない。ちなみに、情報を流している対象はその組織が善に偏つていると判断したところのみなので、くれぐれも我々の期待を損ねる真似はしないでほしい。

現在、ノーマルの設計データはリリアナによって全世界に流れ始めている。これを他のテロ組織が主戦力とすれば、恐らくHSだけでは戦力が足りないだろう。

そこでだ、私達ORCA旅団はそういうたテロ行為に対しても戦力の提供を行おう。簡単に言えば、世界の火消しを担う傭兵になるのだ。

ただし、そちらの国家に所属するわけではない。私達の戦力は新組織“企業連合”が各企業に分配し管理することになっている。参加企業のリストと組織の詳細は後で送る情報に載せよう。

私達が戦力の見返りとしてまず求めるものは、我々ORCAの存在を社会組織として認知すること、さらに企業としての利益といったところだ。

これらを最低基準として守ると約束するなら、協力的な企業、国家には国防の戦力の他に今まで見てもらっていた戦闘で使用したネクストの兵器情報とORCAが独自に研究を進めたIS技術の提供を考えてもいい。

だが、送られたデータを悪用するような組織が生まれた場合は我々は自らの力を持つてケジメをつけに訪れる。その時は、生存者の希望は捨てた方がいいかもしだんな。

こんなところか……とりあえず、私達の方から提供できるものは一通り説明した。長々とした説明ですまない。

もちろん、我々の言葉を信用出来ない組織もあるだろう。そういう組織が軍事戦力を連れて我々を殲滅に来てもおかしくはない。しかし、我々は傭兵だ。自分達の行いにはケジメをつけるが、決して正義の味方ではない。敵対勢力に対して我々の容赦はあまり期待しない方がいいだろう。

拒むも受け入れるのも諸君の自由だ。どちらを選ぼうと私達は構わない。そうなれば私達は自由でテロの筋を潰していく。例えこの世界の全てにを拒まれようと私達O.R.C.Aは戦つ。では、よく考えてくれ』

Side ラーゼ

「…………お前ら、正氣か?」

映像を見終わったオールド・キングが半ば呆然としたような様子で口を開いた。

「少なくともお前よりは大丈夫だな…………」

「俺にはそとは思えねえな。こんなことしても世界がリンクスやネクストの存在を簡単に受け入れるわけがねえ、最悪世界中を敵に回して袋叩きだ。俺でもわかるようなことをお前らが考えなかつたとは思えねえな…………しかも、さり気なく俺達がノーマルの設計図を横流ししたのもバラしやがつて」

「虐殺テロに比べたら小さな問題だらうが。…………もちろん考えたさ。だけど、これ位に無茶な方法でも使わないとオレ達はアスピナのせいで世界に名を売ることが出来ないんだよ。戦力や情報、提供できるものを可能な所まで提供して、後は世界の反応に委ねるしかない」

そう、オレ達の行動は本当は欠陥だらけだ。成功を保証する要素が

一切無く、結果は全て相手次第、これでは神頼みも良い所だ。

当然最初はメルツェルが猛反対したのだが、他に手段を探そうにも思いつかず、結局この方法で実行することになった。

これは失敗が許されない作戦だが、最悪のケースもちゃんと想定してある。もし成功しなかつた場合は味方が企業連のみの状態でアスピナ機関を相手にしなくてはならない。

そうなつてしまつと言つまでも無く不利な状況だ。結果的にオレ達の存在を世界に知らせることが出来ても、出来うる限りその事態は避けたい。

「まあ、まずはお前をここで殺すとするわ。まさか生かしてもらえるとは思つてねえだろ?」

マルチレーザーキャノンの照準を向けたまま左腕のレーザーブレードを起動させる。生憎とこの男を見逃してやるつもりは欠片も無い。どんな理由があつても、オレはこいつのしたことは認められないし気に入らない。

「そりゃそりゃ……だが俺もそう簡単には殺されてやらねえよ・
・・・逃げさせてもうつぜ」

オールドキングが口元に笑みを浮かべたと同時に通信が届いた。今の状況では恐らくジュリアスかネオニダスだろう。

『ラーゼ! 残りの自立型ネクストが全てそちらに向かっている! なんだか様子がおかしい、急に私のアステリズムを振り切るほどの速度を出した・・・!』

『私とジユリアスもそちらに向かっている、くれぐれも気を付ける』

自立型ネクストがあのアステリズムとジユリアスを振り切つただと
?何の冗談だ、それは。アステリズムのスピードは軽量機でもトッ
プクラスなんだぞ。

その時、バイザーに表示されたレーダーが後方から急接近する熱源
を感知した。その速度は並みの出力のオーバーブーストを超える程
のものだ。

「くそっ・・・・！」

クイックターインで後方に急旋回すると、4機の自立型ネクストが大
型ブレードを作動させてこっちに接近している。4機の速度は本当に
に馬鹿げていて、まるでステイグロのような突進力を感じさせる。

左右の内、右のレーザーキャノンの照準を定め、4機の自立型ネク
ストを狙つて発射する。距離が開いているので、当然回避される。
だがすぐに回避した内の1機に左のレーザーキャノンを放つ。

回避の行動パターンが単純な奴らなら恐らくこれで落ちると思った
のだが、狙つた自立型ネクストは左腕の大型ブレードをその場で振
るい、レーザーキャノンを刀身で受け止めた。

「はつ！？・・・・どんな回避プログラム組んでんだよ！・・・・・
ちつ・・・！」

結局迎撃が間に合わず、4機の自立型ネクストを1機も落とせない
まま接近を許してしまった。

左右それぞれの角度から迫る計4つの斬撃。それらの攻撃は全て、先程のものとは比べ物にならないほどに速い。まるで駆動系の回路や神経の動き全てが早送りになったような感じだ。

捌くのは流石に難しく、クイック・ブーストで高速移動して全てのブレードを回避する。攻撃を外した自立型ネクストはそのままリザの前で止まり、クルリと反転して盾のように並んだ。

今レーザーキヤノンを撃つても先程と同じ方法で無効化されるので、防御を突破する手段が無いオレは自然と動きを止めた。だが、何もしないわけではない。即座に防御の陣形を作った4機の自立型ネクストの解析を行う。

『……解析完了。先程の戦闘で取得したデータと比較した結果、コジマリアクター や駆動系などの全てに数倍の出力増大を確認。しかし、冷却系の処理が追い着かず機体内部の温度が増大中。およそ6分ほどで自壊する可能性大』

解析結果を消して周囲のコジマ粒子濃度を調べてみると、確かに濃度が上昇し続けている。数分で自壊するほど出力を底上げしたとなるとプライマルアーマーの強度も上がっているだろう。

「驚いたか？詳しい仕組みは知らんが、何でも機体のリミッターを外してAIにリンクスの動きを再現させるシステムなんだよ。アスピナの連中も役に立つもんを作ってくれたもんだ……数分で壊れちまうが、その分性能は段違いだ。ほら、俺が逃げるまで遊んでやれ」

鎖から解き放たれた獣のように4機の自立型ネクストがライフルを

撃ちながら突撃してきた。リザは身を翻し、オーバーブーストで正面反対の方向へと飛んでいく。

「くそっ！・・・待ちやがれ・・・」

即座にオーバーブーストで追いかけよつとするが、円陣を組んだ自立型ネクストの包囲攻撃のせいで先に進めない。回避を捨ててリザにマルチレーザーキヤノンを撃つてみたが、射線上に割り込んだ自立型ネクストのブレードで阻まれる。

オレは内心の焦りを抑え込み、舌打ちしてジュリアスとネオニダスに通信を繋ぐ。

『ラーゼか、今お前の戦闘を肉眼で確認できる距離まで来ている。あと数秒で援護出来るだろ』

「ならお前等はこいつらの相手を頼む。オレはオールドキングを追う」

『無理だ、ラーゼ。奴は最初のオーバーブーストでかなり距離を稼いだ。あれでは私のアステリズムでも追い着けない。速度で劣るお前のノブリスでは尚更だ』

「いや、VOBを使えばまだ間に合つ。奴の武器はもうアサルトアーマーしかない、追い着ければ仕留めるのは簡単だ」

正式名称、ヴァンガード・オーバード・ブースト。

ネクストが使用する大小様々な十三個のブースターで構成された巨大増設ブースターだ。これを使えば時速約2000kmでの高速長

距離移動が可能になるので、オールドキングに追い着けるはずだ。

『ダメだ、ストレイド……それは許可できない』

突然通信に割り込んできたメルツェルの声。オレはどうこうことだ！と怒鳴ろうとするが、四方から遠慮することなく襲い掛かってくるライフル弾とレーザーブレードの回避に意識を傾けられ、言葉を遮られる。

『タイムリミットが近い。もうすぐ第2陣として送られたE.S.がそちらに到着する。ただちに自立型ネクストを全機破壊、そしてすぐに離脱しろ。今の我々が“国家”と接触のは好ましくない』

「ならあいつを……オールドキングを見逃せつか……ここであいつを逃がしたら、あいつは絶対にまた大量の人間を殺すぞ！ V.O.Bを使えばまだ追い着けるんだ！」

通信中のオレに自立型ネクストが攻撃を仕掛けようとするが、到着したアステリズムと月輪が攻撃を仕掛けて妨害する。

『却下だ。たとえバージしたV.O.Bの残骸を粒子変換で回収出来たとしても、我々の手の内を一つ晒してしまう。この先の為、これ以上ネクストの機能を知られるわけにはいかないのだ。わかつてくれ、ストレイド……頼む』

「つー……了解つ……！」

メルツェルの歯を食いしばるような懇願の声を聞き、頭が冷水をぶちまけられたように冷える。あいつも出来るのならこの場でオールドキングの息の根を止めたいたいのだ。だが、大局を見るのならここは

耐えねばならない。

オレは通信を閉じ、VOBの粒子変換命令を中断する。

「…………あくしょん」

これじゃあ、勝ったのか負けたのかわからなくなる。こんなことならさつさとオールド・キングを殺しておくれべきだった、と後悔が湧き上がる。

あいつを逃がしちまつた責任として、オレがあいつを仕留めないとな。

『ラーゼ、そっちに2機向かってだぞ!』

後ろを向くと、全身の3割ほどが自壊を始めている自立型ネクスト2機が前後で距離を開けながらこちらに向かってくる。オレは左腕のレーザーブレードの刀身を発生させ、オーバーブーストで正面から接近する。

「まあ、とりあえず今は……」

前方にいる機体がブレードを横倒しにしながら近付いてくる。オレは速度を緩めず、レーザーブレードを腰溜めに構えて突撃する。

そして、衝突まであと3秒といった所でオレは前方にクイックブーストで急接近し、左腕を勢い良く振り抜いた。

光の軌跡を残し、大気を切り裂いた金色の刀身は敵の大型ブレードがオレに触れるよりも先に自立型ネクストの胴体を半分に両断した。

余程の危機的状況で無ければリスクを警戒して滅多にやらない芸当なのだが、何故か今はやれると確信が持てた。

「……出来ることからやつていいくとしようが」

爆発音を背後に聞き、オレは意識を残りの1機に向ける。装甲の隙間からオーバーヒートの赤い光を溢れ出させながら接近してきたもう1機は大型ブレーードを突き出してくる。

ブレーードが届くより先に、オレは機体を左にスライドさせ右手で作った拳を放つ。大型ブレーードの刀身はノブリスの右肩の上を僅かに掠めて通り過ぎ、オレの勢いが乗った右ストレートは自立型ネクストの頭部を笑える形に歪めた。

オレはそのまま自立型ネクストの左腕の手首を右手で掴み、左膝を梃子にして肘の関節を粉碎する。足搔くように右手のライフルを向けてくるが、トリガーが引かれるより先にノブリスの左腕が振るわれ、レーザーブレーードが右腕を両断する。

左腕を持ち上げ、全ての武装を失った自立型ネクストを縦に両断する。レーダーを見る限り、すでに残りの2機はジュリアスとネオ二ダスが沈めたようだ。

『離脱するぞ、ストレイド』

コクリと頷き、3人同時にオーバーブーストを作動させ予定の海中の回収ポイントへ向かう。表示されたレーダーを見ると、どうやらパリに包囲網を作るほどの余裕はなかったらしく近くには何の反応も感知されない。

「作戦終了か……民間人の避難を担当した人員も無事に離脱で
きているといいが……」

『メルツェルとテルミドールが直々に選抜したのだ、心配は無用だ
ううう……それにしても少し疲れたな、早く合流ポイントで拾
つてもらつてシャワーでも浴びたい気分だ』

『今日は長い作戦だつたからのう。ORCAにとつては本当に大変
なのはこれからだが、ジュリアスの言つ通り、今は少し休みたい・
・・・・そういえば、人員と言えばラーゼ、企業連やORCAの人
員を確保するためにクビになつた軍人や技術者を雇う案を出したの
もお前さんだつたな』

「ああ。ISは確かに今までのどんな兵器よりも優秀だつたが、そ
れが理由で今までのエースと呼ばれたパイロットや天才と呼ばれた
技術者をクビにしたのは明らかにバカな失態だ」

確かにISの性能は圧倒的なものだつた。しかし、主力とする兵器
が女性専用の物に変わつたとしてもそれは今まで名を馳せた男性の
実力が低くなつたわけではない。

なのに、殆どの国家はそんな人達を迷うことなくクビにしてしまつ
た。戦闘のプロである彼等の意見はISの開発においても貴重なも
のだというのに。

んで、そんな人材を放置しておくのはありえない、ということ才
は3年の準備期間の内にその人達を企業連とORCAにスカウト
する提案を出した。

職を失つていた男性の方々は喜んで承諾し、今ではその実力を充分

に発揮してくれている。まあ、その中にトーラスで実力を発揮した人がいたのは驚いたが。あの変態共は「ジマ関連以外でもぶつとんだ思考を持つてるからな。

合流ポイントまであと1・2・3分ってところか、オートパイロットの機能でも作るか？

頭の中で設計図を思い描いていくが、オレも疲れているようで思事がうまく纏らない。ダメだ、まずは戻って休もう。他のことは全部その後に考えればいい。

それから合流ポイントで潜水艦に回収されるまで、オレ達は無言で海中を潜行し続けた。

Side Out

何の前触れも無くパリを襲った、テロ組織リリアナの大量虐殺事件。これは“白騎士事件”に劣らない、いやそれ以上の大事件となり、その恐怖は世界中に恐怖を刻んだ。

そして、この事件でリリアナの戦力をほぼ壊滅させたORCA旅団と国籍を問わず多数の企業が提携しているという異例の組織、企業連。

企業連はORCAに続いて組織の設立を世界に公表した。

基本は3つのグループに分けられていて、G.A.、インテリオル・ユ

グローバル・アーマメント

ニオン、オーメル・サイエンス・テクノロジー、この3つを初めてして参加している様々な企業は今まで聞いたことの無い名ばかりだつた。

もちろん、そんな組織の存在を気に喰わないと思う連中もいた。その連中は早期に国の圧力を掛けで組織を飲み込もうとしたが、傘下企業の中には世界へ大きな影響力を持つ企業がいたのを知らず、逆に飲み込まれてしまった。

しかし、揺るがない組織基盤を持つ企業連とは違い、ORCAはリンクスやネクストの力を恐れられて干渉を避けられていた。世界の敵として認識されなかつただけありがたい状況なのだが、少なくとも受け入れられたわけではないようだ。

組織の存在自体はすぐに世界中へ知り渡ることになった。テルミドールも組織の存在についての情報には何の指定もしなかつたのだから。

だが、警戒されているというのにORCA旅団は映像で言っていたように独自でテロの現場や裏組織の活動拠点を発見、その国家に対して『～～な作戦を実行します』通告を送り、即座にネクストで襲撃するという行動を繰り返していた。

勿論その場に追跡の足跡を残すようなヘマはせず、可能な限り秘匿して事態を收拾していた。しかも壊滅させた組織に拘束されていた、ようは売られた人間達を保護し、ちゃんとした場所に預けるなどのアフターケアで第二の被害を防いでいた。

当然そんなことをしていれば自然と周囲に存在を知られてしまうので、気が付けばORCA旅団は世界に知れ渡る傭兵部隊となつた。

民間人には死者を出さず、何らかの利益のために戦うのではない。そんなスタイルを貫き通して活動するORCA旅団は表向きではないが、徐々に国際的な信用を手に入れ、未だ少数だが企業連を通して依頼を頼む中小企業が出始めた。

パリの虐殺テロから2年の月日が流れた。ORCAと企業連のおかげでリリアナの暴虐から守られたといつても、建築物などの被害も甚大なものだつたパリ市街は企業連の多大な援助のおかげで復興することが出来た。

だが世界各地では、ノーマルを手にして暴れまわる犯罪者が増え始め、その中でも大規模な組織を壊滅させていくORCAの活動は徐々に増えていった。

そんなある日、日本を通してIS委員会に重大な知らせが届いた。

ISを動かすことが出来る“男性が2人”現れだと。

その情報は驚愕と共に世界中へと伝わり、政府は至急の措置としてアラスカ条約に基づいて日本に設置されたIS操縦者育成用の特殊国立高等学校、通称IS学園にその2人を入学させる決定を下した。

そして、ORCA旅団に企業連を介さず届けられた1通のメール。そこに書かれていた依頼内容は実に不可解なものであり、また無視できるものではなかつた。

ORCA旅団から選び抜かれた現状トップクラスの実力を誇る最強のリンクスはIS学園へと赴くこととなり、数年ぶりの会合を体験する。

第18話 ORCA旅団、設立（後書き）

「ご覧いただきありがとうございました。」

何だかやつちました感が消えてくれません。現実でこんなやり方しても絶対に成功しませんよね。

つか、私自身はつきりとは見つけられないけど、これ絶対何処かに穴あると思う。

けど、この作品では成功したことになっています。この作品の世界は良いモブキャラが多いんです。

とりあえず、そんなわけでようやく原作に追い着きました。ん？おやおや？と思う人もいるでしょうね。

あ、それと、突然なのですが感想の方で何人かの方々から「主人公の機体にサバーニヤって要らなくね？」と言われて、私自身も考えたのですが・・・・サバーニヤ、消すことにしました。

お恥ずかしい話ですが、サバーニヤを出した理由って正直言うと劇場版の「乱れ撃つぜええ！！」に惚れたからなんですよね・・・。今思うとネクストと分けて使うのはかなり難しいと思う。

番外編辺りで女神に消してもらって、代わりになんか貰おうと思っています。機体とか、万能PCのアップグレードとか。

その辺りで何かリクエストがある人は感想辺りで教えてください。

機体の場合は“4”か“for answer”的、欲を言えば“for answer”寄りでお願いします。つい最近、“4”的データが死ねばいい友人に消されてしまい、機体構成とパーティ名を調べるのが困難なんです。

では、また次回。

外伝2 注文変更と小さい矛盾（前書き）

f - s a i g e t s u様、ギロ様、ギャラリー様に感想をいただきました。ありがとうございます。

今回は原作突入ではなく、外伝です。

では、どうぞ。

外伝2 注文変更と小さい矛盾

Side Out

「ふう・・・・・つたぐ、あいつら、徹夜で大騒ぎしやがって。しかも成人組みの殆どが酒飲んでハイテンションってどうこいつ」とだよ・・・・・」

ORCA旅団本部の地下要塞。ラーゼは薄暗い自室のベッドに座りながら1人愚痴を言っていた。

プロジェクト・リヴァイブが終了し、ラーゼ達3人は帰還と同時にすぐ休んだ。ただ、ラーゼだけは疲れが取れた途端にセレンに連行され、シユミレーターで地獄を見せられていた。

それから数日後は世界の反応を見る期間に入り、リンクスの全員は本部で待機していた。レジヤー施設などで時間を奴らもいれば、シユミレーターで自分の腕を磨く者もいた。

だがそんな中、セレブリティ・アッシュの搭乗リンクスこと、ダン・モロがあることを口にした。

「計画の結果はまだわかんねえけどさ、成功するにしろ失敗するにしろ、俺達が全員集まるのって少なくなるだろ?だからさ・・・・・パーティでもやらねえか?」「

その言葉にリリウムやカニス、ウイスやイエーイなどにも広がり、最終的にはロイヤやワイン・Dまでもが賛成した。

テルミードールやメルツェルはその提案に最初は渋ったが、今後集まる機会も殆ど無くなるという言葉に同感し、旅団長の許可の下でパーティーの開催が決定した。

シユミレーターで模擬戦や訓練をしていたラーゼや真改、ジュリアスなどの上位リンクス組は許可が降りた後に知ったのだが、断る理由は無いので了承し手伝うこととした。

まあ、リンクスの中には当然こういったものが好きでなかつたり苦手だつたりする者もいる。

例を上げるなら、リザイアやカミソリ・ジョニー、スティレットなどの協調性が少ないメンバーが筆頭である。それと、少し以外なことにセレンは賛成側だった。

結果的にパーティーは開かれ、ORCA全員参加の飲んで食つての大宴会となつた。

だが、開始から約1時間後、惨劇が始まつた。

軽い気持ちでワイン・ロとセレンが飲み比べを始めたのだ。2人は決して酒に弱いわけではなく、むしろ強い方だった。しかし、この2人は負けず嫌いの性質があり、幾ら酒に強かるうと限界は存在する。

中々終わりが訪れない勝負に嫌な予感を察知したロイが2人に声を掛けたが、すでに遅かった。2人は完全に酔つており、すぐさまロイを酒で溺れさせた。

そこからはもう伝染病の拡大と相違無かつた。メイ・グリンフィー

ルドやフランソワ＝ネリス、さらにミセス・テレジアが潰され、リウムやエイ＝プールまでもが飲み込まれた。

乗り気ではなかつたメンバーもすぐにセレンとワイン・Dに補足され、沈められた。

そのまま女性陣の暴走は止まることを知らず、魔の手ならぬ酒の手は男性陣までをも侵略した。

ダンやウイスなどの青年組みはもちろん、テルミニドールやネオニダンといった成人組みさえも全員酒に飲まれてしまった。当然ラーゼも被害を受けたが、前世譲りなのか幾ら飲まされてもまったく酔いはしなかつた。

それからパーティーは長時間に及び、他に意識がある者は酒が回つてハイテンションになり、頭のネジが緩み始めた。

ヴァオー、有澤、ネオニダンの3人は仲良く肩を組んで盛大に笑い合いながら酒を飲んでいた。騒音が絶えない宴会の中で「まだまだ行けるぜ！－メルツェエエル！」という3人の言葉が響いていた。

まあ、名前を言われた当の本人は当の昔に酔い潰れて床とキスしていたが。

他にも、何処で覚えたのか知らないが、真改が半裸でじょうずくいを踊り始めたり、ドン・カーネルとチャンピオン・チャンプスがコンビで一発芸を繰り広げた（まったく笑いはなかつたが）。

そして最後にパーティーを強制的に終了させことになつたのが、スリーサイズがリアルにワングフルボディーのセレン、ワイン・D、

メイ、ジユリアス、4人のストリップショウだった。

最悪なタイミングで青年組みは目を覚まし、半裸に近かつた4人の姿を見て鼻血を噴射、大量の出血と共に一度目の気絶を体験することになった。

パーティーは言葉通りの血の海に沈み、医療班は総動員で出血多量の男性陣と急性アル中一步手前女性陣の介抱を行うこととなつた。

ちなみにストリップ4人組はぶちぎれたラーゼの鉄拳制裁によって強制的に医務室へ運ばれた。

こうして、ORCA旅団のパーティーはラーゼ一人を残して全員が医務室に運ばれるという結末で幕を下ろした。

「そういえば空港火災の時から連絡が無いな。こっちからの連絡手段つてないのか？」

叶う可能性が低いと承知の上でノートPCを広げて電源を入れようとした。だが、人差し指が電源ボタンに触れる瞬間に画面が一瞬フラッシュを放ち、PCが勝手に起動を始めた。

『やつほー！おっひさー、ラーゼー。』

画面に映し出されたのは金髪緑目の人。画面の向こう側で陽気に笑っているこの女性こそ、ラーゼに力と第一の生を与えた女神である。しかも前回会った時と違い、服装が何処かの国の皇女が着るような美しい儀礼服へと変わっている。

「…………久しぶりだな。前に会った時と服装が大分違うようだが、何かあったのか？」

『あはははっ……思い付きで売り始めた商品がバカ受けしてね…………それで？私と連絡を取りたかったみたいだけど、どうしたの？』

ラーゼは溜め息を吐きながら画面越しに女神と目を合わせる。

「久しぶりに会って結構失礼なこと言つたが、お前がくれた力について頼みがある。憶てるか？保留の2つの枠の内一つを使ってお前が選んだ機体、サバーニヤだ」

『もちろん憶えてるよお～…………でもその様子だと、どうやらお気に召さなかつたみたいだね』

「使つてはみたんだが…………あの機体、まるで國家規模の軍隊を単独で相手にするような装備が殆どでノーマル群が相手だと加減が効かないんだ。ネクスト相手だとQBとかの機動性で圧倒されちまうしな…………あと、最終的な理由で言えば、やっぱりリンクスの体にはアーマード・コアが一番しつくり来るみたいだ」

一度だけサバーニヤを使用した戦闘があつたのだが、その時の戦場は爆撃の後のような有様に成り果ててしまった。

ノーマルの武装やメインカメラのみを破壊しようとライフルを撃つてみると、ビームの出力が大きくカメラや武装どころか機体まるごと爆散をせてしまった。

ならばとGZNミサイルを放つてみても、一発の威力と総発射弾数が予想より大きく戦場にあつた施設は全部綺麗に吹き飛んだ。

幸い民間人には被害は出なかつたが、次も同じ様にするのは無理だとラーゼは思った。

機体性能は決して悪くないのだ。むしろ総合的な性能を見る限りはアームズフォートだつて容易に沈めることが出来る。トランザムと呼ばれるシステムや太陽炉、全てのエネルギーを担つGZN粒子、恐ろしいと感じるほどだ。

だが、それでもリンクスであるラーゼに最も馴染むのはアーマードコア・ネクストなのだ。ネクストの扱いにすっかり馴染んでしまつた今のラーゼにサーバーニヤまで扱わせるのは恐らく不可能だ。

『うーん……やっぱり純粹種だからってネクストとガンドムを両方乗りこなすのは無理か。それで? サバーニヤは消すとして、代わりに何かリクエストはある? 少しはサービスするよ』

「すまんな……代わりのリクエストとしてアームズフォートのデータを頼みたい。だけど全部というわけじゃない。そうだな…
・・ランドクラブ、マザーウィル、グレートウォール、ステイグロ
を頼みたい」

『元々キミが選ぶはずのものなんだから構わないよ。でも、4つでいいの? 全部欲しいっていうのも不可能じゃないよ?』

「いや、全てのアームズフォートを開発したら最悪戦争の火種になる。ランドクラブやステイグロは移動や物資の運搬として使って、あと2つは非常事態の時の戦力として保管しようと思う」

AMSという才能がなければ機能しないネクストとは違い、アームズフォートは多数の凡人によって安定した戦力と性能を確保してくれる。

だがラーゼはランドクラブの拠点防衛能力やステイグロの海上走行能力を戦闘以外でも生かそうと考え付いた。

ランドクラブは陸地、ステイグロは海上、この分担ならば物資が足りていない地域を世界規模で援助することが出来る。それに、これを移動用の足に使えばミッションの度にVQBで長距離飛行をしなくて済む。

もちろん、戦闘でもかなりの成果を發揮してくれるだろう。ステイグロは単機だけでもIS数機を相手にできるほどの海上戦闘能力があるし、ランドクラブも2、3機揃えれば中隊規模のノーマル部隊と正面から張り合える。

『・・・・・わかった。うん、了解。数日後にキミのノートPCに送つておくな。でも、新しい機体とかは欲しくないの？あと一つ願いの保留が残ってるけど・・・』

「オレ個人の戦力はまだ大丈夫だ・・・・・オルレアにシュー・プリス、さらにはホワイトグリントまであるからな」

『あれ？ノブリスが抜けてない？』

「ああ～・・・ノブリスは今、ちょっとな・・・今まで一番使ってきたせいか、長期間のフルメンテナンスが必要だつて言われちまつた」

『ありやりや・・・それはまた・・・』

ネクストを初めて起動させたあの日から、ラーゼはかなりの頻度でノブリスを戦闘に使用していた。

『万能』をコンセプトとしているノブリス・オブリー・ジューの性能はどんな環境でも扱いややすく効率が良かつたため必然的に戦闘で最も多く使われるようになつた。

だが、万能をコンセプトにしてもいる機体も度重なるラーゼの高度な操縦による負荷によってガタが出始めてしまつたのだ。整備班一同の話だと、長期間に渡つて格納庫に封印した方が良いそうだ。

『まあ、キミが必要無いならそれで良いよ。欲しい機体とかが見つかつたらこのノートPCを通して連絡頂戴。この私、ヘラ様がキミの願いを叶えちゃうよー！』

「ああ、その時は頼むよ・・・そりゃれば、突然で変なこと訊くんだが・・・お前つて本当に“女神ヘラ”なのか？」

普段通りの口調で気軽に尋ねたラーゼの質問に、女神は明らかな動揺を見せた。肩をピクッ！と大きく震わせ、一瞬で青褪めた顔から汗が流れる。

『ビ、ビビビビビビしていきなりそんなことを！？ 一体ビツしたの

！？』

「いや、お前の方がどうした。今一瞬で顔面蒼白になつたぞ、大丈夫か」

『そんなことはいいから……どうしてそう思ったの？』

本当に気軽に気分で尋ねた質問に予想外の反応で返され、その剣幕にラーゼはPCの画面から僅かに顔を離す。

「あ、ああ……思い出したんだが、お前オレにキスした時フーストキスって言つてろ？よく考えたらヘラつてゼウスの妻だし、初めてつていうのはおかしいって思つたんだよ」

十数年間まつたく氣付かなかつた小さな矛盾。その手の本を読んだのなら誰でも知つていること。

気付いても何かが起つるというわけではないので今までラーゼは頭の隅に追いやつたのだが、これを機会に疑問を口にしてみた。

その結果、青褪めていた女神の顔は凍り付き、ポカンッと口を開けて呆然としました。

『あは、あはははは……つまり私、普通に自分で地雷踏んただけ……ひっ、自分で自分が恥ずかしい……』

今度は顔が真つ赤に染まり、ラーゼに見られぬよう顔を背ける。顔の変化の忙しさにラーゼは軽く吹き出してしまつが、女神は心の内の羞恥心と戦つていてるせいで気付かない。

『

はあ～、何だか散々だなあ～。・・・・・　そうだよ。白状すると私はヘラジじゃない、私は神話に殆ど関係も無いただの女神だよ。ふうんだ』

「いや、別にお前がヘラジやなくともどうとも思わねえよ・・・・・お前がオレにもう一度人生をやり直させてくれたのは変わりないだろ。今でも感謝してるよ」

苦笑を浮かべながら嘘偽り無い本心を述べるラーゼ。

あの雨の日、ただ殺すことしかしてこなかつたラーゼにとって、今までの人生は充実感に満ちていた。戦いから無縁の生活を送っているわけではないが、前世とは何かもが違う。

「けどさ、くらじやなくて神話に関係の無い女神なら、お前の本当の名前ってなんなんだ？」

「え、私の名前？・・・・・私の名前は・・・・・マリス・・・・・HTルリア神話のマリスじやなくて、ただのマリスだよ・・・・・

ラーゼの質問に赤らめた顔を逸らして答える女神、マリス。少しでも恥ずかしさを隠すため、すぐに胸を張つて、参ったかぁーーと叫ぶ姿にラーゼは微笑を浮かべた。

「マリスか、良い名前じやないか。これからはせめてもう少しあ

『

「いいでしょ。アーランドンと来おいつー。」

「お前、わざわざからテンションおかしいぞ

「うう、だつて……思い出す度にあの時の自分が恥ずかしいんだもん。へラつて名乗つておいて初めてとか……うう~」

赤みが引かない顔を両手で覆いながら頭を左右に振り回すマリスはそのまま倒れて地面をゴロゴロと転がり始めた。

「まあ、あんまり気にするな。オレだって10数年間氣付かなかつたんだからな……といひで、本物の女神へラつてそっちにいるのか?」

「うん、いるよ。でもね、もしかしたら私の時より驚くかもよ?一言でいえば……うん、女神様より女王様の方がしつくりくるね。冷たい眼差しで鞭持つてるし……あ、被害は主にゼウス様ね」

「…………人間の思想美学って、こうも簡単に壊されるもんなんだな」

それから数時間、ラーゼは薄暗い部屋の中でノートPCを通じ、マリスと話し続けていた。画面越しでも2人の顔には確かに笑顔があり、楽しげがあつた。

だが、ラーゼの部屋の前を通りかかった人間がその会話を微かに聞き、ラーゼが過労で幻聴を聞いているのではないかと誤解。すぐに医療班が緊急出動し、ラーゼを医務室に強制連行した。

ちょうどマリスとの会話を終えた途端に医務室に連行され、状況の理解が追い着かなかつたラーゼは流されるままに医者から休むよう言われた。

よく分からぬが、元から休むつもりだつたラーゼは深く考えずす
ぐに眠り、溜まつていた疲れを一気に消化。数日後にマリスから送
られてきたAFの設計と配備の準備に取り掛かり始めた。

気の済むまで休ませてもらつたおかげで疲れが完全に無くなり、ラ
ーゼは生き生きとした様子で作業に取り組んでいた。

ただ唯一、回復したリンクス達にAFの説明をしている時にその場
にいた全員がラーゼに申し訳なさそうな視線を向けていたのが気が
かりだつた。

しかも視線だけでなく、全員がラーゼに気を配るよつた態度まで見
せるので、気がかりを通り越して不気味だつた。

それから、整備班の何人かが口にした「最近ストレイドが仕事を任
され過ぎたせいで過労になり、部屋の中で幻聴と会話していた」と
いう噂を当の本人が耳にしたのは数日後の話だつた。

外伝2 注文変更と小さい矛盾（後書き）

ご覧いただきありがとうございました。

今回は皆さんに酒に溺れて暴れる話でした。くそつー・テルミドールがまるで空氣じゃないかっ！

リンクスだつて人間なんで、酔つ払つたら乱れるということです
承ください。

リクエストがあつたので、今回で消えたサバーニャの代わりにAF4つを頼みました。一応作者が個人的に好きなものです。これのどれかが変態魔改造を受けるかはまだ未定です。

機会があればサバーニャを使用した時の話は外伝で書きたいと思つています。

あと女神様、実はヘラじゅありませんでした。唯の女神です。

では、また次回。

第19話 動き出す世界（前書き）

ギャラリー様、ケンス・ハムナー様から感想をいただきました。

僅かにですが、今回から原作です。

では、どうぞ。

第19話 動き出す世界

Side Out

上空を飛ぶ1機の旅客機。

ジェット音を鳴らす外とは違い、機内は音と揺れを最小限にして心地良い空の旅を約束している。

その機内にいる人間は、操縦席を除けばファーストクラスに座っている6人のみ。

その内の1人、ラーゼ・ベルセルクは手元の資料を見ながら「コーヒーを飲んでいた。

現在で年齢が15歳となり、顔立ちはかなり整い、180に届くその長身は鍛錬を怠らなかつた努力に報いる程に筋肉の付いた体をしている。

一通りの内容を読み終え、ラーゼは資料を仕舞つて軽く息を吐く。それは外野から見れば、何処か疲労感を纏う溜め息にも見えた。

「ラーゼ兄様、何処か気分でも悪いのですか?」

そんなラーゼに言葉を掛けてきたのは1人の少女。

色が少し薄い金髪を背中まで伸ばし、緑色の瞳を持つその容姿は美女と呼べるもの。穏やかそうな雰囲気で話しかけたこの少女の名はリリウム・ウォルコット。

普段は礼儀正しくおしとやかな少女だが、戦場では軽量二脚型ネクスト、アンビエントを駆り敵を殲滅する上位ランカーだ。リンクスとしてのその才能はORCA内でラーゼを抜けば随一かもしない。

「うなんですか？長旅で疲れが出たのかもしませんね」

そして、リリウムの後ろに付いて来たもう一人の少女はエイ・プール。搭乗機はミサイル兵器を主に使用するヴェーロノーク。

こちらの少女も同じく美少女と呼べる顔立ちをしており、背中に届く銀髪をポニー・テールにして瞳の色は青い。リリウムのよくな“お嬢様”という程ではないが、こちらも基本は礼儀正しく優しい。

リンクスとしての実力はリリウムに劣るが、容赦の無い悪夢のようなASミサイルの弾幕は戦場での支援機として大きな実力を發揮する。

「ふふ、多分違うわね。疲れてるならわざわざ資料なんて読まないでしょ」

席に座りながらファッション雑誌を読んでいた美人の女性、メイ・グリンフィールドは微笑を浮かべながらラーゼの席に視線を移す。

こちらは腰まで届く緑髪と翡翠色の瞳を持ち、その体は全体的にスタイルにかなり恵まれている。

機体名はメリーゲート。重量二脚型で、ミサイルを中心には高い火力を持っている。その機体構成からなのか、メイ本人は戦闘で正面からの打ち合いを好んでいる。

「確かに……それに、そう簡単に疲れるような鍛え方をしていないだろう。なあ、師匠？」

背中まであるブルネットの髪と薄い青色の瞳を持つ美女、ウイン・D・ファンションは読んでいた小説から視線を外して窓の外を眺めているセレン・ヘイズに声を掛ける。ちなみに両名ともスタイルは抜群である。

もちろん彼女もリンクスであり、機体名はレイテルバラッシュ。EN武器を主体にした高火力の軽量一脚型ネクストは、ラーゼの知る原作では“GAの災厄”と呼ばれ、前線の兵士にはプラス・メイデンの蔑称で呼ばれていた。

「当然だ。この程度で疲れるくらいなら私との鍛錬でとっくに死んでいる。大方、今回の依頼についてまだ不満があるんだろう」

そして最後の1人、セレン・ヘイズ。こちらは原作のオリジナルリンクスの1人であり、レオーネメカニクスの最高戦力と呼ばれた古強者だ。

美女5人に男1人。いつもならこの状況をあまり気にしないラーゼだが、これから仕事内容と場所のことを考えると少し気が重くなる。

「別に不満は無い……ただ、少し肩身が狭いと思つただけだ」

「仕方無いだろ？。“依頼主”がお前を直接ご指名なんだ。それに、後からロイも合流する」

「数ヵ月後に、な」

今この場にいない男性リンクス、ロイ・ザーランド。

ワイン・Dの恋人であり、ラーゼが男性陣の中でかなり親しい1人である。

機体は希少価値の高いアルドラの標準機、HILLBERTに重火器を搭載したマイブリス。その腕は原作の独立傭兵の中で最高と呼ばれる程だ。

一見掴み所が無く空とぼけた男に見えるが、さりげなく相手を気遣う温厚な心を持っているのをラーゼはよく知っている。

そんな親しい友人も今は此処にいない。

ラーゼは溜め息を吐きながら、こうなった経緯を良く思い出してみた。

Side ラーゼ

数十日前。

引き受けた依頼を終わらせ迎えのヘリが来るまでの数日間、オレは出発前に予約を入れておいた滞在先のホテルに到着し、任務完了の報告をするために通信を行つた。

もちろん盗聴されないようにするため暗号通信だ。

別に他の人間、現地でのオペレーターや指揮官に頼んでも構わないのだが、オレはこうして毎回自分で行っている。

「ストレイドよりBIG BOXへ・・・・//ミッション完了。これより回収ヘリ到着まで潜伏地点にて待機する。オペレーター、そちらからの指示はあるか？」

『BIG BOXよりストレイド・・・・報告を確認。ミッション成功、お疲れ様でした。団長より、ストレイドは任務が完了次第“集会所”に顔を出せとのメッセージを預かっております。回収についての詳細もそちらの方で話すと』

「テルミニーラルが？・・・・了解したオペレーター、通信終了」

通信を切り、オレはヘッドセッットを外して部屋に用意されている口ヒーを作り始める。

え？なんで突然口ヒーを作るかって？これから絶対に喉が乾くからそれを潤す為にだよ。あれ？なんだよ、くそつ、インスタンクトローヒーしかねえじゃん。まあ、有るだけ良いか。

ちなみに余談だが、今話していたオペレーターは原作で企業連のミッションでブリーフィングを説明する女性だ。初めて声を聞いたときはかなり驚いたものだ。

オレはロイヤカニスと同じく独立傭兵の立場なので、あらゆる企業のオペレーターと話したが、全部原作と同じだった。原作と違うのはブリーフィングだけでなくミッション中のオペレーターもやってく

れることだらうな。

あと、本部の名前は原作と同じくBIG BOXとした。こちひは別にGAの施設ではない。

コーヒーの湯気が立つカップを持つて再び椅子に座り、ヘッドセットを掛け直す。そして記憶の中にある周波数を入力して再び通信を開始する。

「…………よし、団長血脉お呼びとは珍しいな。緊急の要件か?」

『来たか・・・・・まずは任務ご苦労だった、ストレイド。そして、質問の答えはYESだ。少なくとも私やメルツェルの一存で判断を下せる用件ではない』

『すまん、遅れた。セレン・ヘイズだ・・・・・今の会話を聞いたが、全員を呼んだのか?』

『いや、今回のメンバーは私とテルミードール、そしてお前達を含めて11人だ。他には・・・・リリウム、ウイン・D、ロイ、エイ＝プール、メイ、真改、有澤だ』

『・・・・・オレ達を含めて類似点があまり見つからないリストだな。現在依頼を受けていないリンクスか?』

『安心しろストレイド、数分もしない内に全員揃う。理由はその時に聞かせてやる』

メルツェルの言葉に無言で頷き、オレはヘッドセットを付けたままコーヒーを口に運んで窓の外に見える市街の景色を眺めた。

通信機を見ているよりはずっと気が晴れるし、こういった見物も悪くはない。

あと、オレは立場が立場なので一応狙撃手とかの警戒もしている。まあ、マテリアルライフルクラスの狙撃銃でもなきやこの体に致命傷を負わることは叶わないが。

そんなことを考えながら数分後、全員が席に着いた。

『ま、緊急とはいへ急な召集を詫びよ。みなそれぞれ任務で忙しいだろう』

『ま、確かに。時差のおかげで俺のいる所は真夜中だ』

『私と師匠の方は夕暮れだな』

メルツェルの言葉にロイが気軽な声で返答し、ワイン・ロガがそれに続く。

この“集会所”はオレ達リンクスだけが使用できる専用回線だが、リンクスは基本的に世界各地で活動しているので今回のよつた集会の時は時差などが問題になつてくる。

『私とリリウムの所は・・・・昼だけど猛吹雪だわ』

そういえばお前ら今回の仕事北国だっけ。

『私と真改の方は・・・・早いものだ、桜が咲き始めている』

お前等は移動するんじやなくて“日本担当”だつたよな。つか、桜が咲いてる風景が見えるつてどんな場所で通信してんだお前等。

『ええーと、私の方は・・・・スコールが吹き荒れています』

「いや、お前今何処にいるんだよつ！？」

ついエイ＝プールの答えに声を出してしまつ。スコールがある所なんて、何処で仕事してるんだ？

『・・・・とにかく、今回集まつてもらつた議題を話そう。現在よりおよそ3時間前、ORCA本部に1通のメールが届いた。中にはメッセージと依頼内容が書かれていた』

『その内容にも驚いたが、それ以上の問題点は依頼主だ。依頼主の名は・・・・篠ノ之束だ』

『・・・・つ！？』

テルミードールがその名前を口にすると、オレを含めた他のリンクスは一瞬驚愕で言葉を失つた。

他ならぬHSの創造主の篠ノ之束。世界中の誰もが認める天才がORCA旅団に接触してきたのだ。

オレとしては、何故束さんがORCA旅団に依頼のメールなどを送ってきたのか不思議でならない。少なくとも、オレ個人に良い事が

起きるとは思えないな。

『…………篠ノ之束とは、驚いたな。ISの開発者たる天才が傭兵集団に何の用だ?』

『書かれていた要求内容はかなり漠然としたものだった。原文が少し……アレだったので、勝手ながら私が翻訳した方を話す。

1つ、ORCA旅団及び企業連に所属するリンクス数名を3年間IS学園の生徒、または職員として所属させる。

2つ、上記で選出したリンクスはIS学園の治安維持に協力する。だが、警備や防衛の全てを担えというわけではなく、死者を出さなければ一切の行動に指定や制限を付けない。

ただし、有事の際には“篠ノ之篠”“織斑一夏”“織斑千冬”的安全を絶対的に優先する。

3つ、選出メンバーにはストレイドを必ず加える。

以上だ』

『…………』一同

再び言葉を失つた一同。

恐らく全員が思つてゐるだらう。篠ノ之束は何をしたいのだらうか、と。

IS学園の防衛戦力を頼むだけなら分かるが、選出したメンバーを

生徒、または職員に所属させる意味がわからない。

『 といふか、今さらだけど 3 つ目おかしくね？ 何でオレだけ指定されてんの？ 他とは別の意味でオレも何がしたいのか訊いてみたい。』

『 ・・・・えっと、ごめん・・・・これって、何が目的なの？ まったくわからないんだけど』

『 恐らくメイ様だけでなく、この場の誰一人として理解出来ていません。・・・・そもそも I.S 学園はこの依頼について存知なのでしょうか？』

『 それについては我が調べてみたが、どうやら学園だけでなく I.S 委員会の方からも許可が降りたようだ。下準備は万全、ということなのだろう』

『 しかしでも調べてみたが、真改の調査結果と同じだった。しかも下準備だけでなく逃げ道を塞ぐのも上手いらしい、報酬が前払いでの届けられた』

『 そういうえば先程 G.A 本社からに大量の資金が送られてきたが・・・

・・まさかアレか！？』

『 ああ。企業連側には莫大な資金、ORCA には資金と完全に初期化された I.S コア 10 個が送られてきた。まったく、前払いとはいえこんな物を貰つては喜びよりも恐怖を感じるな』

『 何が恐怖だよ・・・・企業連側がその金を使つてることはない断る気はないんだろ？ たくつ、オレの意思は無視かよ。まあ、こんな報酬出されれば仕方ないとは思うが・・・・』

すでに退路が無くなつてゐることに溜め息を吐くと同時に、この状況を心の何処かで満更でもないと思う感情があると少し自覚する。

I.S学園に行けば、十中八九あの3人、千冬姉さんと一夏兄さん、そして幕に会うだろう。やり方が強引かつ滅茶苦茶だが、束さんなりに気を利かせたのだろうか。

リンクスの皆にはオレと織斑姉弟の関係を話してあるので、何も言つてこないのも気を使わせているのだろう。

『・・・・依頼を受けるのは理解した。そして、察するにその依頼に向かうメンバーはこの中から選ぶのだろう? 先程ラーゼが訊いていたが、メルツェル、何を基準にこのリストとなつた』

『簡単だ、セレン・ヘイズ。日本語を理解し、他者とのコミュニケーションを自然に出来る。さらに事務作業をまとめてこなせる。この条件に該当し現在長期の行動が可能なリンクスを選んだのだ』

『なるほどね。それで・・・・他には誰が行くんだ? ラーゼは既に決定だが、少なくともあと3人は女が必要だと思うぜ。I.S学園つてのは女が殆どなんだろう?』

『なんだロイ、氣を使うわりに立候補しないのか? ちなみに私と師匠は行くぞ。3年というのは少し長いが、興味がある』

『そいつは残念・・・・悪いが、俺はこれから少し一人で動いてアスピナの情報を探ることになつてんだよ。そっちに行くのは構わないが、合流できんのは数カ月後だな。真改や有澤の旦那はどうだ? あんたら純粹な日本人だし適任だろ』

『私はこれでも社長だぞ？3年も仕事から離れられるわけなかろう』

『我もしばらくはアメリカでマフィアの掃討を請け負うので無理だ
おい、何処が長期行動可能なんだよ。日本人2名がすでにスケジュー
ール埋まつてんじやねえか。』

テルミドールとメルツェルはそう簡単に本部を離れられないし、こ
れでもうオレの他に連いてくる男はない」とことになる。

『他はどうだ？目的地では依頼の他にもすることがあるのでな、人
数はなるべく多くしたい』

『私とリリウムは構わないわよ。まったくつてほゞじやないけど、
他の依頼を受ける機会が少なくなるんでしょう？それに面白そうだ
しねつ、日本の学校つて』

『はい。私もマイ様と同じく、参加させていただきます』

『あつ、私も行きます。学校つて興味がありますし・・・・ニニ
から早く離れたいです』

エイ＝プール、お前は是非そうしなさい。代理にはウイストイ＝
イを送つとけばいいだろ。

『では、メンバーはラーゼ、ワイン・D、セレン・ヘイズ、リリウ
ム・ウォルコット、マイ・グリンフィールド、エイ＝プール、そし
て後から合流するロイ・ザーランドの7人でいいな？』

『それと、この場で所属を決めるぞ。リリウム、エイ＝プールの二人は学生、他の全員は職員だ』

『あれ？ ラーゼさんは学生側じゃないんですか？』

「あのな・・・オレは“男”だぞ？ 生徒として所属しても意味がないだろ？』

『あつ！？ そ、 そうですね』

ネクストに乗るリンクスはあまり関心が無くて偶に忘れるが、ISは“女性にしか動かせない”。

だからこそ今の社会、女尊男卑の社会が出来上がったのだ。まあ、今になつてはノーマルやMTを武装勢力が手にしたせいでパワーバランスは曖昧だがな。

『それもあるが・・・ラーゼには他にせいやつてもいいことがある。IS学園ならお前の考えた“新しいIS”の稼動テストや調整が好きなだけやれるだろ？』

『新しいISつて・・・“TYPE-N”か？ 確かにテストや調整は出来るが操縦者が・・・なるほどね、その為の女性陣でもあるつてわけか？』

『・・・・何の話だラーゼ。話から察するに、お前がIS関連の何かを思い付いたようだが』

『その詳細は後でデータで転送しそう。それと、女性陣の諸君は日本に向かうまでの数日間、ISの操縦と知識を身につける為に本部

に戻つてもうう。迎えは既に向かつたので明日には戻れるだらう。
ラーゼ、お前は・・・

「わかつてゐよ、メルツェル。オレもとりあえず本部に戻つて必要な資材を揃えるさ。技術者も何人かは必要だからな」

『・・・・・では、今回の会議は一先ずここまでだな。国際的な信頼が増してきたと言つても、我々ORCAの立場はまだ安心を許さない状態だ。各自、自分の務めを果たしてくれ・・・本部にてまた会おう。人類に・・・』

『・・・・黄金の時代を』

そんなことがあつて数日後の今に至るわけだ。

あの後オレ達は本部に帰還し、女性陣はISの鍛錬や学習、オレは技術部で機材を始めとする様々な物資の用意、連れて行く技術者の選抜などをしていた。

女性陣の方は少し忙しかつたようだが、準備を終えたオレの方は時間に余裕があつたのでAFの運用や配備状況などの話し合いに出席していた。

ステイグロ2機とランドクラブ5機、現段階でロールアウトしたこのAFは予想以上の成果を上げてくれた。

直線速度ならOBすら上回るステイグロは物資運搬船やミニシジョン

の際の移動艦として活躍し、現場へ物資を運ぶのがかなり楽になっている。

ランドクラブは主に自然災害や内戦の被害にあつた村の救援と支援を行つており、救助チームや民間人の一時的な宿泊場所として役立つている。

ただ、ステイグロは当初その活躍の代償としてかなりの整備コストが掛かっていた。

全体的な成果と比べれば釣り合いも取れるのだが、削れるコストならばなるべく削った方がいい。

そこで、現在ロールアウトした2隻のステイグロの内1隻、ステイグロの2番艦は変態技術者共の協力も得て、本来の設計にかなりの改良を加えている。

大々的には推進や航行のシステムと搭載武装の方面に力を入れてあるが、最も特徴的な改造は“動力部の心臓を初期化状態だったISコア3個に任せている”ところだ。

高度な自動成長及び処理能力や莫大なエネルギーを生み出すISコアを3つ使用し、ステイグロの心臓部としたことで、ステイグロ2番艦はほぼ整備要らずの航行時間を発揮できるようになった。

その中で不便な点があるとすれば、ISコアが搭乗者として登録した女性3人の内2人がいなければステイグロ2番艦はジェネレーターのエネルギーで通常通りのスペックしか発揮できないことだ。

最初は流石に無理かと考えていたのだが、束さんが放棄していった

データの中に同じ様な設計理論を見付け、何とか実用化することが出来た。

とはいってもアコアをこれ以上消費するのはかなり痛い損害なので、他のAFには別の改良を考えなければならないだらうな。

・・・・・話がずれたな。

まあ、そんなことがあってオレ達は今日日本に向かっているわけだ。

到着後はそのまま車に乗りEIS学園に直行、学園側の職員達と今後のことについての話し合いだ。恐らくその話し合いの席で千冬姉さんと会うことになる。

会えるのは単純に嬉しい。だが、同時に今まで何の連絡も出来なかつたオレに姉さん達が怒つていなかと不安を感じる。

(自分でも情けないとと思うが・・・・・これっぽっかりはなあ・・・
・・・姉さん、会った瞬間に殴り掛かつて来たりしないよな・・・・
・殴られても自業自得だけど)

溜め息を吐きながら無意識に肩を縮んでしまう。

親に怒られるのを怖がる子供ってこんな感じなのか？

自分がこんな子供のような一面を持つていたのに驚きながらも、オレは不安を感じ始めた。

この時、オレは意識が思考の海に沈んでいたせいで、不覚にもカメラを激写するメイとそれを手伝うリリウムの姿に気付くことはなか

つた。

『お客様、まもなく着陸態勢に入ります。席へお座りになり、ベルト締めてお待ちください』

心中に不安を感じながらも、時間は残酷にも進み続けるようだ。
やめよう。今怖がつたって意味が無い。現実の結果を受け止めなきやな。

「わあて、久々の日本だな」

Side Out

「・・・・・本当なのか・・・・・それは・・・・」

『本当も本当だよちーちゃん！私がちーちゃんに嘘を付くはずがないよー・・・・・ちーちゃんも薄々気付いてたかもしれないけど、はつきり言ひねー。らーくんはちゃんと生きてるよー IIS学園に向かう手筈になつてゐるリンクスの中にいるからー』

『答える束・・・・・一夏の件とラーゼの件、どう考へてもタイミングが合ひすぎてる。委員会は隠しているが、私はお前がORCAに向ひかの接觸を図つたとしか考えられん。どうだ？』

『さつすがちーちゃん！その通り！どう見てもタダじや動かなさそうだし、潰しちゃつたららーくんが困るでしょ？だから前払いで企

業連にお金、ORCAの方には初期化したISコアを少し渡してきましたのあ～！」

「ISコアだと？…………とにかく、お前が連絡を寄越した理由はわかった。それで、用件はそれだけか？」

『情報と束さんの配慮のお代にちーちゃんの水着セクシーショット一枚（ブツシッ！）』

躊躇いも無く通話を切ったスース姿の女性、織斑千冬は静かに空を見上げた。

義弟であるラーゼ・B・織斑は7年前の空港火災で行方不明となつていた。

千冬も一夏も、死体が見つかっていないのならラーゼが死んだとは思わなかつた。当然葬式も挙げていない。

だが、千冬はこうして弟が確かに生きているという事実を知り、それを今喜んでいる。しかも、その弟が今からこの場所、IS学園にやつてくるのだ。

「・・・・ラーゼ・・・・」

小さく呟く声。その声の中には、安心と期待の心がはつきりと感じられた。

「先輩つーすいません、会談で話しあつ内容について確認をお願いします」

「ああ、すぐに行く

千冬を先輩と呼ぶ眼鏡を掛けた女性に返事を返し、歩き出した。

その様子は普段と違い、何処か上機嫌な雰囲気を感じさせた。

第1-9話 動き出す世界（後書き）

「見いただきありがとうございました。」

ORCA旅団と企業連は束さんの思いのままに動いています。

つか束の話しがまったくわからんねえー！！

HS学園ではリリウムとエイ＝プールに学生、他のリンクスには職員をやつてもうひとつになります。

ラーゼと職員の皆さんが話をする場面でも書けたら良いなと思います。

スティグロはそのままだと不安だったので、改造しました。結構無茶な改造だと思いますが、束さんの残した完璧なデータのおかげで実用化できました。

ランデクラブも馬車馬の如く働き続けています。

次回はラーゼと千冬さんが再会します。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9738q/>

IS - 小さな幸せを求める青年

2011年11月5日11時18分発行